
女鑑
第十六年第八號

夏季向呉服太物類一切

店内漏れなく陳列致置申候間多少に拘はらず御用命被下度奉願上候。尚目下大流行の

中形浴衣地　は柄合の嶄新なるものを撰び

小間物化粧品類　は最新流行の品々極めて格安に販賣致し居候。尚地方御得意樣の御注文は、可成鄭寧親切に御取計可申上候。

地方御注文案内書　は御一報次第早速御送付可申上候。

東京日本橋區駿河町

三越呉服店

細川十洲翁序

三輪田女學校長 女子大學校講師 三輪田眞佐子著

第二十二版

女子の本分

定價二十五錢 郵税金六錢 郵券代用一割增

本書初版發刊以來既に廿一版に及び發刊册數數萬部の多きに上れるも購讀者の數依然として衰へず又以て本書が婦女子間に高評を博せるを知るべきなり今や第廿二版成る希くば世の未だ本書を閲讀せられざる人々は速に一本を購はるべし若し遲延せば忽ち賣盡して求むべからざるに至らん

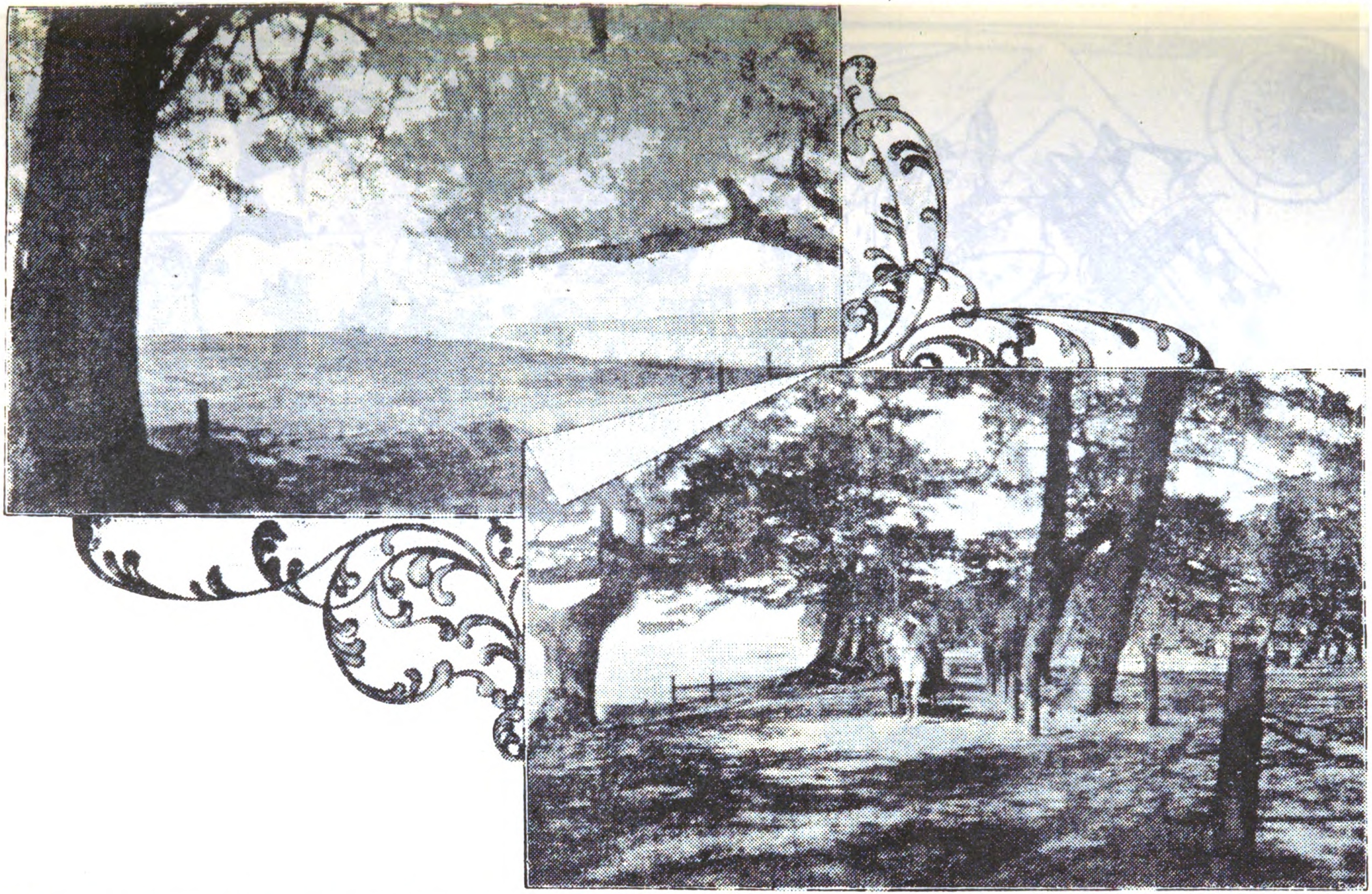
發行所

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

株式會社 國光社

電話新橋 特八八 二六九三

女鑑 第十六年 第八號 目次



須磨の浦

金子男爵の家庭



男爵 金子堅太郎君

令夫人 彌壽子君

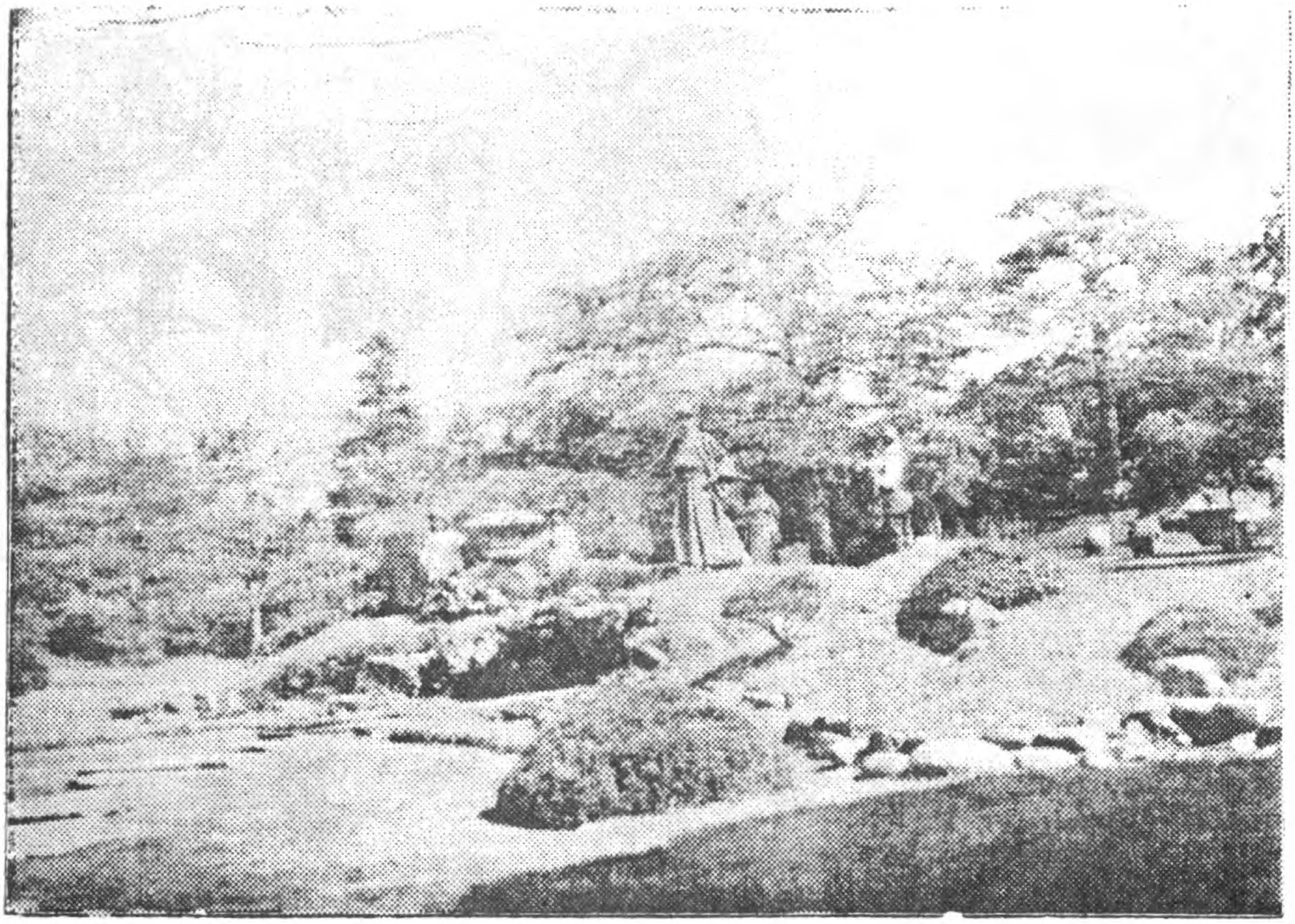
令息 武麿君

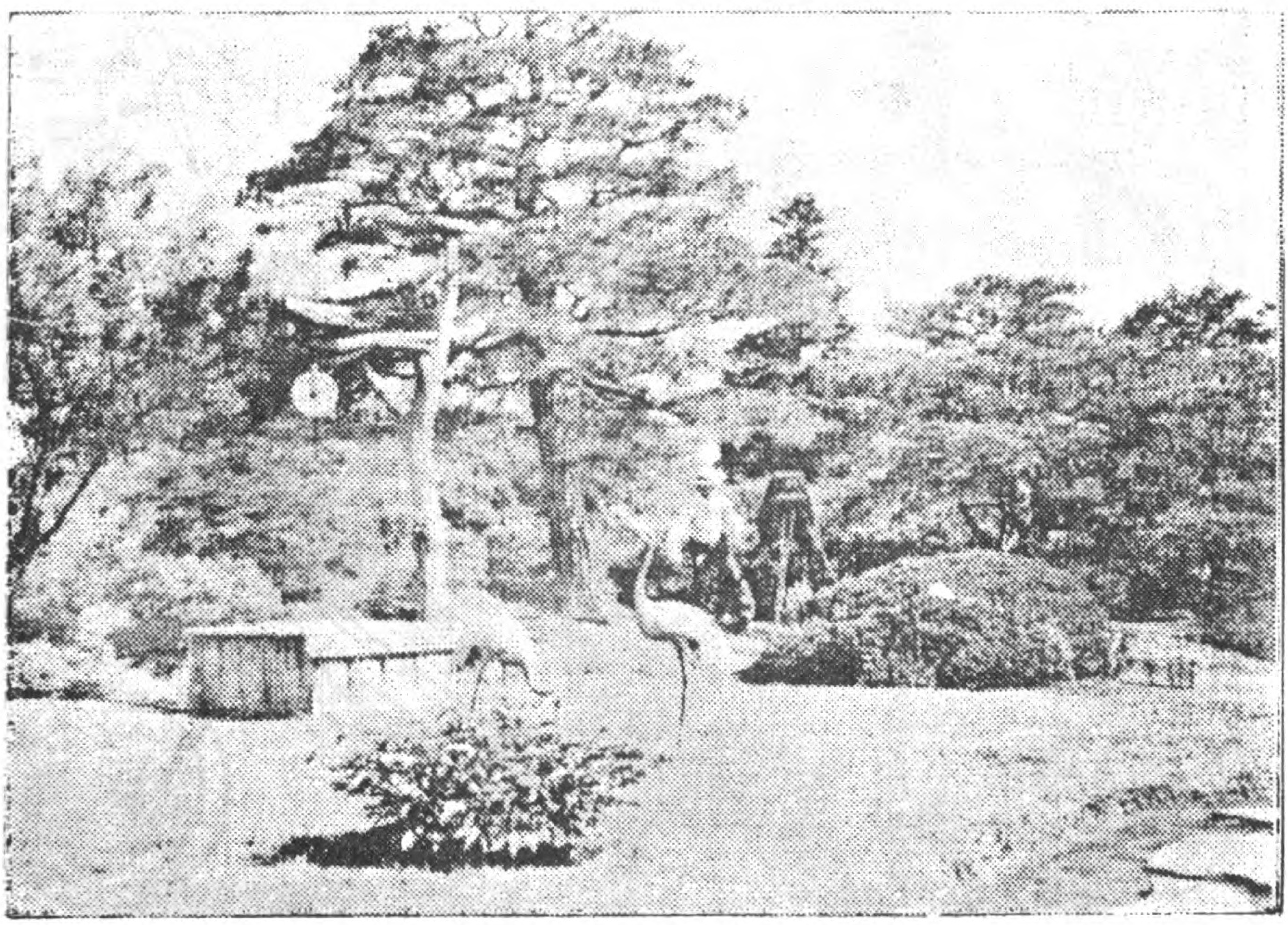
（二令孃は次號に掲載す）

紀念繪葉書



柳原伯の邸園





上圖に袴を着けられたるは柳原伯爵にして、右は令夫人、左は二令孃なり、

上圖に寫眞器をとられたるは、高崎男爵にして、下の圖を撮影せられたるなり

下圖に寫眞器をとりしたるは、黒川男爵にして、上の圖を撮影せられたるなり

◎東京帝國大學講師 女子高等師範學校教授 關根正直先生編

文範 筆のあや

新刊

和装美製全壹冊
正價金四拾五錢
郵税金六錢

作文界の珍書

本書は徳川文學に精通せる著者が元祿前後より現代に至る名家の美文を蒐むその選の厳且つ精しきは云はずもがな特に着想の重要なるを示さん爲め一同題に對して數篇を掲け各家の異同を研鑽するの資に供し毎篇の次には富贍なる類語を載せて好辭麗句求むるに随つて容易に得やすからしめたる用意は從來多くその比あらず一度本書を手にせば妙想涌いて雄篇佳作筆に隨てならん眞に作文界に於ける珍書はこれのみ

大町桂月先生著 三版

◎新體書翰

洋装美製全一冊
正價金六十錢
郵税金十錢

小野鵞堂先生著 廿二版

◎増訂女子手紙文

和装美製全一冊
正價金四拾錢
郵税金四錢

關根正直先生著
坂正臣先生著並書

◎筆のゆきかひ

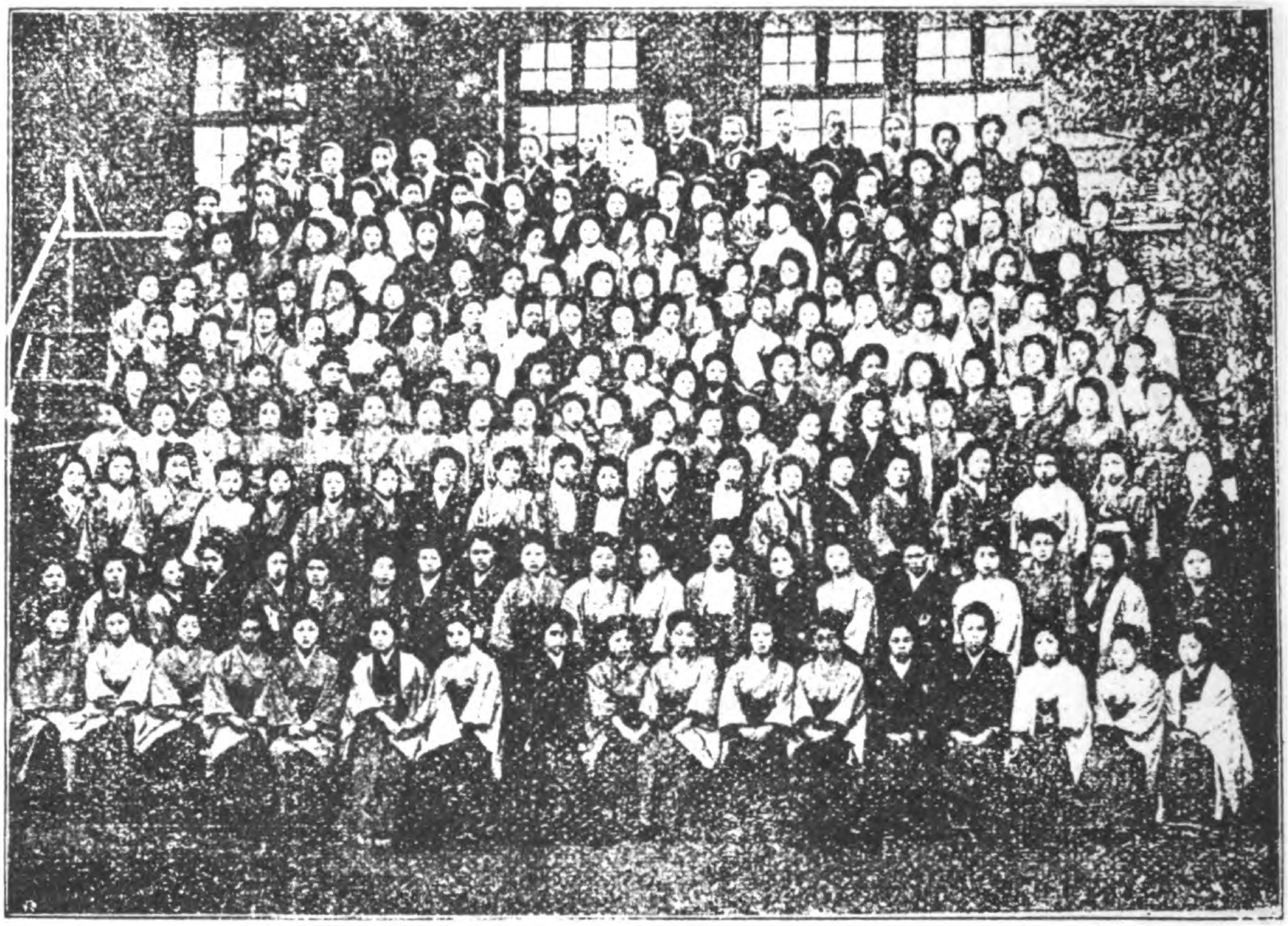
和装美製全二冊
一冊正價四拾錢
郵税一冊金四錢

◎改正圖書總目錄郵券二錢送附あれば呈す◎

發行所 東京日本橋區通一丁目 大倉書店

賣捌 大阪市前川書店●吉岡書店
都市若林●名古屋市川瀬

二技藝女學校



女子共立職業學校

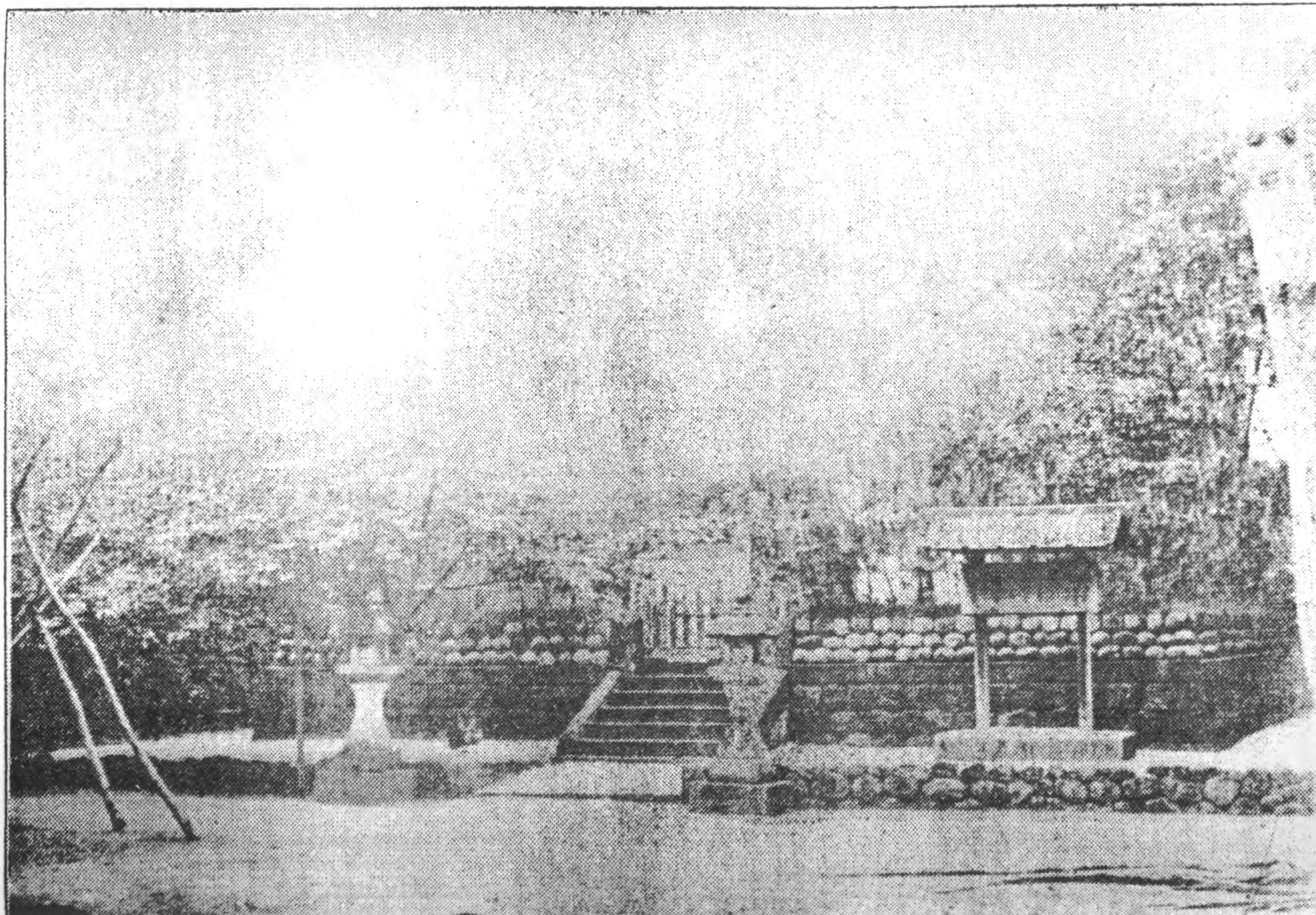


東洋女藝學校

神戸女學院卒業生



瓊子内親王の御墓



三島江月君寄贈

幼児の嬉游



幼児の百態二

井伊直方君撮影



女鑑　第十六年　第八號

言語の墮落

言葉の美しきは、鶯の聲の麗はしきが如く、誠に快く耳に響くものである、然るに近時女生間に流行せる言葉は如何に、實に鵙の囀る如きものではあるまいか、鵙の聲は誰の聽きて喜ぶものぞ、さるにてもこの喜ばれざる言葉の、何故にかく流行し來つたのであらう、これは大體に女生の墮落の傾向であらうと思ふ、

而してこの墮落の種を蒔き、この墮落の幇助をなせるものは誰ぞ、そは暫らく宿題として、いさゝか感ずる所を記して見やう、

『さうでございます』といふと、『さうです』といふは、いづれが女生的言葉らしいか、云ふまでもなく、前者であらう、少くも身分あるものゝ子女の言葉としては、前者でなければならぬと思ふ、然るに墮落的言葉のデスが下流より溯つて、教科書中、此言葉を見るに至つた、成る程デスといふは、今日では氣の利いた言葉となつて全國に行渡つて居る、さりながら上品な言葉ではあるまいと思ふ、

上品でなくとも、氣が利いて居ればよいとなると、頓て『よくッてよ』『さうなのよ』などいふ言葉も上等社會に用ひられ、全國に普及し、教科書中にも見るに至るであらうと思ふ、

考ふる迄もなく現時女生間に行はるゝ流行語は、端坐したる人の口より漏るべき言葉ではなく、寢ころんで居る、極めてダラシのなき人の口より出ねば似合はしからぬ言葉である、花柳界以外には禁ずべき言葉である、然るにそれを快とせる、或る一部の小説家の筆などに釣込れて、さも氣の利いた言葉の如く、爭うて用ふるに至つたのは、實に沙汰の限りで、あらゆる美しき言葉を知れる女學生が、平氣で用ふる如きは、己れ自らを輕視した話ではあるまいか、さなきだに女はつゝしみ深くあるべきもので、口數の少きを尊んで居る中に、歯の浮く如き、忌はしき言葉の續出して、自らも恥ぢず、聞く耳も平氣になつて居るは、風俗上大に寒心すべきことである、

併しながら『さうなのよ』『よくつてよ』的言葉は、盛に流行して、社會もそれを放任して居るのであるが、而も墮落せる言葉として認められては居る、幸に全國に普及しても居らねば、教科書中にも見えぬ、さればとてこの墮落語を俄にさし止むる事は難いことであるが、この墮落語に勢力を有するは、今の所女學生若くは女學生上りであるから、各女學校は、この取締に就て嚴重にありたいものである、さすれば其跡を絶つまでには行かずとも、大に見るべき成績が擧る事と思ふ、切に各女學校の同意を求めたいのである

顔と心

容貌のあしきことは、人として不仕合せの一つに數ふべきであらう、殊に婦人にとりては、或は悲しまる人もあらうと思ふ、さりながら、そは容貌のあしきが爲に、世の愛をうくる事の少きを憂ふるより出づ

るものであるが、ある厭ふべき自負心のなき為に、却つて世に愛せらるゝ例も少からぬのである、ヘイデッカーといふランダーの音樂家は、容貌の醜き點に於ては、四十年間英國無比と稱せられた、されど品格の正しき人として、ジョージ第二世の寵を受け、遂には巨萬の富をつくり、九十餘年の天壽を終るまで宮廷に奉仕したといふ事である、

またスタール夫人も、シャルロットプロシテも、女性の美麗と云ふ點は全く缺げたる婦人であつたが、其容貌に無頓着であつた為に、却て世の美人といはるゝ婦人よりも、多くの人の親愛を惹き、極めて世を幸福に送つたとの事である、

近くは小川直子刀自の如き、決して美人と稱することは得ない、然るに刀自が、良人の紀念品を知れる人より贈られた時、良人に再會する思ひしたりとて、喜悦を溢れしめた其の顔、居會す人は之を見て、かゝる美人が、又とあるべきかと感じたとの事である、實に貞操めでたき心の美が、顔にあらはれたもので、美しき顔の見ざめのするのとは正反對である、故に顔を美しくするより心を美しくせねばならぬ、

容貌の美しきものは、却つて世に立つて弱點があり、身をあやまる基であるから、容貌の美しいと思ひたる時、身は既に墮落せんとし、美しと云はれたる時、既に大に墮落したるものと思ひ頗る用心を加ふべきものであつて、容貌のあしき人は、この點に於て大に心を安うすることを得るのである、

されば容貌のあしく生れたる人は、たゞ飽くまでも其の容貌に無頓着にありたいものである、容貌如何に醜きも、それに無頓着であつて、快活に眞切に慇懃であつたならば、單に顔の美しきばかりの人よりは、多く世間の愛敬を受くることを得るは云ふまでもなきことで、露國のオルが王女が有名なる醜婦であつたに拘らず、世界第一の愛すべき婦人と呼ばれたも、前述の理由に外ならぬのである。

論說

現時の女學生難

三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子

むかし詩人白樂天は、婦人の身を以て、百年苦樂由他人と歌ひて憐みけり、そは未だ文化の進まざる時代わけて封建制度の時代に於ては、尊きものは、權力と暴力なりけらし、從ひて軟弱なる婦人は、常に男によりて抑壓せられけん、然るに詩人の眼には、血あり涙あるを以て、婦人の斯る運命と境遇とを哀れと思ふも理にこそ、爾來日に月に、文化進みぬるも、今なほ婦人を翫弄視するものあり、たとへさなくも、婦人を遙かに男子より劣等の位地にあるものとして、完全なる人格を認めざるものあり、これに引きかへ其の反動にや、男女同權を唱へ、男子に敵抗せんばかりの勢ひを懷くものあり、不婚論、獨立論の如きはその勢の極端に馳するものなり、あはれ過ぎたるは、猶及ばざるが如く、高慢を誇る女子の其狂も亦哀れまざるべからず。

女子たるもの自ら眞の女道を發見して、これを踐むを欲せざるものあらんや。されど唯恨むらくは、現今は舊思想と新思想と衝突の時代なりければ、共に我を聖なりとして、誰か烏の雌雄を知らんの語を假りて評すべき狀態にあり、などか眞の女道なるものを確立し得るものあらんや。故にその間に教育せらるべき

天下の女學生は、左せんと欲せば、これを非とするものあり、將に右せんと欲せばこれを是とせざるものありて、殆ど適從すべき所を失ひ、所謂五里霧中に迷ふものゝ如し、われ現今の世に於て、女學生たることは難いかな。

凡そ道德の重んずべきは、男子と女子との區別なかるべきも、殊にその操行と品性の輕んずべからざるは男子よりも女子に於て嚴なるべきを信せり、故に女子にして操行に缺點あり、將た品性に汚點を含まんかたとひ萬卷の書を讀み終らんも、おのれは未だ教育なき女子と言まほし、從ひて女學生たるものは如何なる學術技能に劣等なるを耻づるよりも、その操行と品性の優等ならん事を期せざるべからず。否社會が女子に對する制裁も、その操行如何、その品性奈何を中心とすべきものならんかし。然るに現今の世に於て、女學生難を感ずる所以のものは、かゝる女道の根本より來る批評にあらずして些々たる末技の優劣、若しくは外觀の異同等につきて、徒らに毀譽し、褒貶するにあり、實に現今も尚、女子は百年苦樂由他人との語をして、單にその苦樂は良人に由りて、決せらるゝのみならず、廣く天下の衆目に由りて定めらるゝとの意に解するが、適當なるかの觀あり。必ずや心ある者は罪なくして學窓の下にある女學生を、浪花津のよしあし繁き言の葉にかゝらしむるを欲せざるべし。希くは世の女子教育者、其偏見を去ると同時に、妄信を捨て、天下の女學生をして、安んじて德行を養ひ。知能を學ぶに至らしめよ。濫に女學生を難ずるに非ざる也。

古より大器晩成と云へり。これまた眞理なきにあらず。即ち女子が一家を整理し、以て良人をして内顧の憂ひなからしむるのみならず、老者もこれがため安んじて餘年を送り、少者もこれに因りて、立身の端を開き、なほ施いて、社會全般の福祉をも謀る如き婦人の出づるは、天才に歸するも妨げなしと雖、多くは

素養の然らじむるものぞかし。故に深く修めし女子にあらざれば、その妻として亦母としての任務を全うすること能はざるべし。而るに世の女學生を難ずるものを見るに、曰く其の作文の流暢なる、地理歴史及び理科等の諸學に通達するは、往々感ずべしとせんも、日常の生活法を知らざるため、反りて終始家庭を出づることなくして、實際上の家務に熟達せしものに劣るならん、云々。固より普通女子教育の目的は内助の任に堪能ならしむるが主ならんも、學ぶところを悉く直に實行するは難きのみならず、學校にて學びし課業は殆ど理論のみにして、臨機應變の適用は更に修養を要すべし　蓋し男子に於てすら文武の官に任ぜらるゝものは更に見習を要せざる理由あらんや。是を以て、女子教育を主るものは成△

婦人と時代の要求

日本婦人の美點といひましたら、從順で、家事に勤勉であるといふことでせうが、然し一方からみれば、之がまた日本婦人の弱點と云へるかも知れませぬので、要するに善といひ、惡といふのは、社會の釣合上からのことでありますから、美點であるか弱點であるかといふことは、輕々しく斷言はできません、

◎日本婦人の第一美點　元來日本は、經濟上に於て英米の如く豐でないから、婦人が社交上に働くといふ餘地は到底ありません、やはり夫に從つて、家を修め、家のために働くといふことが必要であると思ひもし多少の教育ある婦人でありますなれば、家庭に於て兒童の教育に當らねばならぬで、米國の婦人の如く飛んで歩いてゐるばかりでは困ります、今日の日本の狀態では、夫婦共稼といふことが、また必要でありますので、勞働者などならば勿論身分あり、地位あるものにしましても、妻君は學校の教師をして家計を助くるといふ風にでもせねばなりません、外に向つて力を注ぐといふことは、まだ〳〵難かしいことであります、此點から見ますると、從來の日本婦人のやり方は、な

△べく理論と見習を同時に行はしむる方法を講ぜざるべからず。又一方には、家庭と學校と相待ち、相助けて　完全なる女子を作らざるべからず、されど現今の如く學校に於て、諸種の課業を授くる必要ある時代にありては、決して昔日裁縫割烹若は遊藝のみに全力を盡し、單純なる課業を學びし時代

と同日に論ずべからず。思ふに現今の教育を受けし女學生の長所は、學生の境遇を離れて主婦となりし當時にあらずして、漸次年月を經るにつれて、嘗て修學せし實力の効驗を現はすに至る曉を以て知るべきなり。然るに世人は學生の身分を有するものに、良妻賢母の實力を現はさんことを求めて批評するは、酷にあらずや、己れ屢々女學生あがりの新婦に對して同情の淚を濺ぐことあり。これ今日女△學生難を說く所以なり。斯くの如き酷なる批評のため、女學生の譽と望は殆ど沒せられて、既に女學生てふ名詞は一種異樣の意味に用ひられ、以てこれを厭ひ且つ忌むものだにあり。口惜しき限りにこそ。古人曰ふ、前車の覆るは後車の戒と、實に過去の女學生中には、多少急進に失するものあり、將た空想に流る丶ものありけんため、女學生を批評するもの丶口實を得しならんも、今日時勢に必要なる修養を以て目的とする女子教育を破壞し、昔日のいろは教育を復活せんとするものは、その可なる所以を知らず。さりとて實踐を顧みざる虛飾の學術を修め、時流に媚ぶるものは、一層可なりと言

かくいゝやうに思はれます、

◎日本婦人の第二美點　けれども、婦人は從順であるからといふて、壓制し輕蔑するといふことは甚だいはれのない事でありますので、婦人は何所までも婦人として尊重して行かねばなりません、又親子の別居も、理想からいつたならばいゝことでありませうけれども、今日の日本の狀態では、迚も不可能の事と思ひます、されば親子は何うしても、一家内に住まねばならぬとしまして、差當り起つて來る問題は、舊い思想を持つた人と、新たらしい思想を持つた人との衝突であります、之は一家内に生活してゐるもの丶間には、是非起るべきことでありまするが、婦人は此間に立つて調和をするといふ精神でなければなりません、つまり從順でなければならぬといふことになります、

◎日本婦人に對する時代の要求　事物の進步には、順序がなければなりません、急進黨の或は弱點と見易い從順といふ點は、寧ろ私の考では、今日の日本に於ては適當であると思ひます、社會の秩序と平和を保つ上からは、何もかうなければなりますまい、然し之は私の理想ではありませんので、たゞ利害の上から打算したばかりなのです、……誤解なさらぬやうに望みます（島田三郎氏談）

ふを得べからず。

今後中等社會以上の婦人たるものは普通の學識を備へ、以てこれを家政に用ひ、亦交際に用ひざるべからず。若しその嫁せし當時に於ては、女學生との批評を受くることあらんも、自ら省みて、内に疚しき所なくんば、毫も恐るゝに足らず。

獨り良心の命ずる方針に從ふて行ふべきなり、おのれの見聞する所に由れば、教育ある女子の始めて家政を執るや、いと迂遠なるを覺ゆるも、その悟り易きこと且つ改むるに速なることは、教育なき女子が、裁縫の裁方を計算するに當りては、單純なるときは暗算して、大に便益ならんも、稍々複雜なるときは、或は豆粒を用ひ、或は箸を用ひて、抱腹に堪へざることをなさんも、聊かにても數學上の智識あらんには、計算流るゝが如く速やかなるべし、その他家庭に趣味を與ふる如きも、教育なき子女の望むべからざることなり、甚だしきは一家に波瀾を生ずる時に於ても、教育あるものは、條理を辨ふること明ならんも、教育なきものは、頑愚にして、導き難きは事實ならずや。亦女德を守る點に於ても、教育あるものは、女道の如何を詳かにして、践むべき所を自覺せんも、教育なきものは自覺する所なきがため、變節變心の憂なしとせず。况んや一家一國萬一の秋に際しては、平素修養の厚き女子にあらざれば、恃むに足らざるべし。要するに、人は棺を掩うて始めて事定まるものなり。されば今日學窓にある女生の眞價を評定するに、その生涯の行動を通じて見ざるべからず。唯目前の利害のみを見て、其成敗を言ふは、天下後進の女子を誤らしむるものなり、おのれ恒に女學生につきて痛論することあるも、將來に望を屬するものを返りて難せざるべからず。天下の女學生たるもの自愛して、將來の望を全うせざるべからず、決して一丁字をも知らざるものに劣るべけんや。

尙現時の女學生を難ずるものを見るに、眞に女學生に缺點あるを發見せしもの少く、その多くは、一種の感情に制せられて、徒に好惡するのみ、假之ば、體育の奬勵、衣帶の改良を好まざる人は、活潑の女生若くは、新裝の女生を以て、眞に女學生の通弊となし、これに反して、柔和の養成、古風の固守等を惡む人は、一切の舊慣を打破して、忽ち理想的女子敎育を加へんと議するもの丶如し、由りて其の間に立つ女學生は一方より賞讃せらるれば、同時に他方より排斥せらるゝを免かれず。おのれの女學生に同情を表するは其の進退維れ谷る、過度の時代に處することの容易ならざるを以てなり。

果して然らば、現今の女學生難を救ふ道は如何。他なし、女子に適從すべき道を示すと同時に、完全なる女子敎育制度を作り、學得せしことゝ、其の實踐を並行せしむる方法を採るより、良きはなかるべし。而して其の詳細なる說明と題目を改めて述べん、唯おのれがこの文をものせし目的は、天下の女學生をして失望することなく、益々勉勵し、以て舊弊を墨守する愚を學ばず、亦時弊を追慕する悔を得ざるやうなれよかしと、祈るばかりにこそ。

婦人の運動

文學士　下田次郎

日本では婦人の運動と云ふことはカラ駄目で、近頃になつて女學生連が、學校で頻りと運動々々と云ふので、運動をするが、それも仰々しく云ふ程ではなく、まあアダンスだとか時折遠足をするとか又はテニスをする位、一般の婦人は殊更運動と云ふ事をしないで、年に二三度の花見遊山や、又は不圖人に誘はれての散歩位で、中には只家にばかり居て、運動をせぬ者もある、で今の處婦人の運動と云へば、只女學生に

限つてる様だが、それも女だからと云ふ考からでもあらうが、學校を卒業すると一向に運動をせぬ。そこになると英、米の婦人などは感心なもので、一體に運動が盛で、日本と比較すると天地の差よりも甚しい、向ふでは、只學生時代と限らぬ、いつまでも運動をする、それで到る處に運動會がある。婦人はそれに出て盛に競爭をすると云ふ工合で、西洋の運動雜誌を見ると、その内に女の運動のレコードが出て居る、しかし日本では第一運動專門の雜誌はないと云つてもよい位だから、婦人の運動の記事などは思ひも寄らぬ事である。

向ふでは一體にどんな運動をするかと云ふに、先づ第一日々の散歩を初め、庭など持てる人々はテニスコートを作つて、夕食後に必ずテニスをする。又ゴルフ△と云つて小さい球を遠く離れた穴の中へ棒で投げ入れる運動も旺で、こんな事は勿論運動は大概海邊や野原などの樣な空氣の清新な處でする。又處々にゴルフ競技會がある、また馬に乗る、自轉車にも乗ると云ふ工合で中々盛なものだが、之は服裝にも關係があらうが、矢張日本婦人は駄目である、

女子の教育

◎男女教育の目的は、兩性の天職によりて定まる、女子の天職は家系の繼續に在り、種屬の繁殖にあり、男子も其のことに關係なきにあらざれども、女子が懷姙、哺乳、分娩のために、盛年の大部分を犧牲に供するに比すべくもあらず、女子の活力は男子に劣らず、其の腦力も男子に讓るべきはフエミニスト等のいふが如し、而も其英雄豪傑を出す事少く、たま〳〵之ある時は、女性としての不具者多きは誠に當然の理なり、歷史は社會に顯れたる現象を記錄するを主とす、其の紙片を染むるは文明築造の技術者たる男子の役目なれは女子が赫々の功名をなさゞれば、男女の尊卑を斷じ優劣を許すべきにあらざる也

◎故に職業を以て男子と競爭せむとする女子の誤りなるは子女を產せむとする男子の妄なるが如く、男子より獨立せむとする女子の愚なるは女子より獨立せむとする男子の狂なるが如く、社會の舞臺に活動せむとする女子の異なるは、臺所の整理に心配する男子の尋常ならざるが如し、家庭に於ても、社會に於ても、男女は其の天性に從ひて分業し、協力すべくして、同一の事務の上に競爭せんとすべからず

しかし日本でも徳川時代では女にも、馬に騎るものがあり、火事の時などに馬に乗つて逃げたものもある、今は迚てもそんな事は薬にしたくもない。

まだ夫よりか一層雄々しく勇ましく痛快なのは世界的旅行で、向では必ず女連で大旅行をする、第一所謂觀光の外客で最も多いのが米人次が英人で佛、獨其他は數等落ちる、伊太利に漫遊して見ると、澤山英語を談す女の團體がある、之△

△でも如何に英米人が世界的旅行を盛にやつてるか〻解る。日本には旅行など〻云つても其處から其處へで迚も外國に旅行をすると云ふ樣なことはない。夏になると日本では大磯邊に行いて海水浴とか遊泳とか云つて、僅かに潮に體を入れてボチヤン〱〱と足を動す位が關の山だが、向ふの夫人はアルプスやロッキー山に登とか、或は氷河を杖ついて渉るとか云ふ樣に、海水浴も盛にやる、中々爽快な事をする、殊に英人でベルカルに虎狩をしに行き、虎を射とめた奇聞もある、勿論之は例外だが、兎に角大規模の運動をして、氣分を浩くしなければならぬ。外不見の婦人が子供を育てては如何したつて、良好の結果

◎されば、國民必須の智識技能を授くるを目的とする小學教育が男女に共通なるべきは論なけれども、高等女學校の教育に至りては、中學の教育と大に其の趣を異にせざるべからず、妙齢の女子をして精神を過勞せしむるは母性機能の發育に害あることは、學理と經驗との明證する所なれば、女子の教育は高等女學校にて完結するを可とせむ、結婚の第一條件は健康にありて金錢爵位にあらざることを知らしめざるべからず、良人をして内顧の憂なからしめ、圓滿なる家庭をつくるの心得を授けざるべからず、ことに姙娠以後の衛生法及育兒教育の術を教へざるべからず、今日の高等女學校の圖畫、和歌、作法、禮式等の末に汲々として、肝心なる教育學心理學さへ、教員志望者のための隨意科たるに過ぎざるは抑も何ぞや、多くの新體詩家を生じ、蓮葉娘を生じ、戀愛自由主義者を生じ、不婚主義者を生ずる學校あり、之を以て其の能事と信ずる教育者あるに至りては沙汰の限りといはざるべからず、男子は複雜なる競爭社會に立ちて、一種の職業に從事する者なれば、其の教育は一方に偏して可なれども、女子は兒童を善化し、美化するに適すべき家庭を主宰せむために、穩健にして調和ある教育を受くるの要あるにあらずや(報知)

は收めることは出來ぬ。日本の貴族の婦人連は、家に居て下らぬ事を考へて居るより、世界を巡遊したり、せめてアルプス山麓までなりと行くがよい、よしむば行かぬ處が、行く氣でもあつてほしい。まだ普通の運動すら盛でない處へこんな事を云ふのは少々無理かも知れぬ、がせめて普通だけの運動でもして貰ひたい。又英國ではホッケーと云ふが流行して居る、之はフットボール見た樣なもので、女では男の樣に足を亂暴に使へぬからでもあらうが、球を棒で地を滑べらすものである、尤も球もフットボールの樣ではなく小さい。之は殊に女學生の間に大流行で、ホッケー競技が屢々催される。又クリケットも少しは流行する。之は一寸ベース見た樣なもので、球の通る門の上に板が載せてある、誤つて其板を落すと失敗になると云ふ鹽梅で、棒で小さい球を打つて、地を滑べらすのである。一體に冒險的性質を有つて居る運動が流行するらしい、元より運動となれば、餘り女性的ではいかぬ、向では女で游泳の競爭もする位で、日本では一寸見られぬ事である、一般に婦人の運動が盛である事は元よりだが、學校に於ても運動の奬勵には中々注意してると見えて、學校の年報の末に、運動會の成績が載つて、誰々は何で何等と云ふ樣に立派に記されてある、日本では東京と地方では少々違ふが、運動場がある學校では運動場全體を使ふ樣な事をやればよいにまだそれが無いらしい、又運動をするによい公園がない。只東京の日比谷が稍それらしいもの位だが、倫敦では幾つあるかも知れぬ。でも少し一般の人々が運動する樣にならねばよくない。一體で東洋人は内政的だ、支那、朝鮮は元より御談にならぬが、日本とても左程威張る事は出來ぬ、只少し氣の利いた位なものだ、一體で日本の女は氣が勝つて居る、それも氣ばかりではイザ鎌倉と云ふ場合がだめだから、どうしても身體が强壯でなくては駄目だ、身體を强くするには是非とも運動が必要だ。其運動も力も要るし汗も出る樣な非女性的なのがよいと思ふ。其目的としてはホッケーなどがよからう。何にしろ運動を盛にして

力のいる筋力が緊つて永續する身體を作らねばいかぬ。第一產をするのでも筋力の發達してる者は餘程容易い、其外何事でも身體の强壯と云ふ事ほど貴いものはない。

運動々々と云つても、運動をせぬ人には其眞味がわからないが、其味が解ると是位愉快なものはない、自分は中學時代から現に運動は盛にやつてる方で、其面白さは何とも云へぬ、世の中には只運動々々と云つても御本人は一向に運動せぬ者があるが、自分の如きは多年其味を知つて居るので、運動しかも婦人に運動を奬める資格があると確信して居る。

しかし今の日本の服裝では、運動は爲惡いから、女の服裝は是非改めねばならぬ。マア第一に帶をやめて袂を短くすると云ふ樣に、運動に適する樣に、また仕事をするに都合のよい物にせねばいかぬ。

要するに婦人の運動は學生と云はず一般に運動をして、世界的の事を盛にし、力の要る汗の出る筋力の緊まる樣なことをして、日本人が世界に最も强壯で快活で能く働く人となるやうにして貰ひたい。

婦人問題

◎女子と人世觀　予は其根本的原因を以て今日の女子が人世觀の定まつて居らぬことであると信ずる、昔時は女子は三界に家なしといつて、絕對的服從を認めて居たのである、即ち自家の位置を自覺して居たのである、此自覺あるが故に如何なる境遇に際會しても、婦人は決して漫に煩悶をしなかつたが、社會の事情の變遷は女子をして此人生觀を根本から破らしめた、女子も人間である、男子と異なる處はないといふやうな考へが起て來た、其處で女子も社會の上に於て男子と肩を丼べやうといふことになつた、其結果はどうであらう、

◎婦人の物質的煩悶　婦人の人世觀は打壞されると同時に煩悶は避くべからざる結果である、そして婦人の殆ど總ては此煩悶に苦しめられてある、而かも其煩悶はといふと多く物質的である、其羨む所は富貴、榮華である、從つて學問も高等敎育を受ければならぬ、其配偶もより以上のものでなければならぬ、かういふ物質上の煩悶は、婦人をして遂に憐れむべき境遇に追ひやるのである、予は世の婦人に向て物質上の慾望を排して、精神的慰安を得んことを望むものである（三輪田元道氏談片）



家庭の婦人

文學士 齋藤一如

婦人の風儀は、昔の士族の妻女は、甚だたしなみの深かつたものであるが、維新後は四民同一になつて國の全體の爲にはまことに結構な事になつたのであるが、風儀は惡くなつたやうに思ふ、昔の士族といふものは、世事にも迂遠にあり、生産の事にかけてはゼロといふてもよい程であつたが、風儀と云ふ點に於ては、他の三民より立まさつて宜かつた、然る處四民合同になつて、他の三民が士族の風に倣うて風儀をよくするのではなく士族が他の三民の風儀を倣うて甚だしく風儀が下落したのである、それは士族の數は平民の二十分の一にも足ない、例へば一合の清水に二升程の黒い水を入れたものと同じ事であるそれ故に、黒い水が清水にならずして、清水が黒い水になる、これが士族の風儀が下つて、三民の風儀と同じやうになつた所以である、從つて婦人の風儀も下つた、其上に西洋の風俗が段々に這入つて來て今日は婦人の風俗は混淆風俗とも又混亂風俗と云ふても宜い、遂に日本固有の美風はどういふものか解らぬやうになつて仕舞つた、風俗は云ふまでもなく大切なもので、風俗が惡ければ、一人二人善い事をしやうと思うても善い事が出來ぬ、風俗がよくなれば一人二人惡い者があつても、よい方に化せられて仕舞ふ、

現今の婦人の風俗はどうであらうといへば、下等社會は敢て論せず、風俗の源は中等以上より下等に及ぶ物であるから、中等以上の風俗が改まれば自然に善くなる、今日中以上より上等の婦人の風俗を觀察し、いさゝか所感を述べて見やうと思ふ、

我日本は、奢侈を禁じて、是非質朴剛毅と云ふ國風にならねばならぬ、戰爭に勝つて益々敵が殖ゑたと見ねばならぬ、其殖ゑた敵に對して、國の威光を保つて居らうといふには、質朴剛毅で行かなければならぬ、然る處戰爭の後は兎角奢侈に流れたがる物と見えて、歐羅巴あたりの歷史を見ても、戰爭に勝つた後は大抵其國が奢侈に流れる、奢侈に流るれば其後は大抵柔弱に流れる、さうして國が疲弊して衰亂を起す、戰勝後に國が衰へて取返しの付かなくなつた例は夥しい、故に今日は奢侈を戒めねばならぬ其奢侈は兎角婦人から起る、さうして婦人の奢侈は衣服から起る、衣服から身の周圍が奢侈の起る本である、奢侈は婦人が自分で奢侈を爲すが初めであるが、今少し可笑しき話は、男子が婦人に喜ばれやうと思うて奢侈をなす、男子が衣服飮食に金を費すは多くは婦人を喜ばせる爲である、兎に角に本は婦人から起ると云うても宜しい、凡そ婦人の風俗の一番惡いと云ふべきは、奢侈の根元といふべきものである、

次に交際であるが、婦人の交際といふことも、大に必要な事である、去ながら多くは、此方へ來たり彼方へ行つたりして御馳走になつたり、なられたり、其度毎に費用もかゝり、時間も潰す、其交際は何の用でもない、向ふで來たから、此方でも行かねばならぬといふ位で、時々顏を合せて世間話でもして歸る位、それでは見聞を廣くし、知見を進めるといふ所へは距離がある、

それから交際用として何々婦人會とか慈善會といふのがある、これは唯往來して話をしたり、菓子でも喰つて歸るよりは實もあり、近來愛國婦人會の如きは大に活動して、甚だ目ざましいものがあるが、その他多くの場合には、婦人は皆人形になつて、男に使はるゝので、其機關を掌るものは皆男である、かう云ふ事は婦人がなくても出來る仕事である、且つその婦人と云ふものは、屢往つたり來たりすると自然衣服から飮食に奢りを生じ、此着物では度々は

往かれぬ、別に着物を拵へねばならぬと云ふ事が起る、寄合うて多くは碌な事は考へぬ、我邦にてはまだ戸外へ出るより、家内に於ける任務が充分に盡されて居らぬ、その方に缺くる所がなくば、社會は婦人の外交を喝采するに決して怯ではない、まづ〳〵芋の煮えたのも御存じのないと云ふ交際は、暫らく見合せた方がよからうと思ふ、

主人は社會に出で、妻君も同く社會に出づるとなれば、夏の河涼みに臺所を鼠の世界にする如く、家庭は誰も支配して行くものがない譯である、家庭が亂れて社會が何う圓滿に行くものであるか、それより家庭に釆配をふつて、風儀の點にも大に注意を拂はれたいのである、

夫婦の愛

島地默雷

こゝに興味のあるお話しと云ふは、今から數年前のことでありますが、或る紳士の宅で戸棚へ新らたに棚を一ッ設けました、尤も是れは毎日開閉をする日常品を入れる爲めに、設けたのでありませんので、夫れが出來てから數日間其儘にして物を仕舞つた限り開けて見もしませんでしたが、一日入用な物があつて細君が不圖开處を開けて見ますと、其の棚の棧の所に一匹の蜥蜴がピッタリくッついて居ります。一體この蜥蜴と云ふ虫は人の跫音でも聞くと御承知のやうに周章騷いで遁げるのが常でありますに、この蜥蜴は唯キヨロ〳〵として居るばかりで、一向に遁げやうとせぬ。所で細君は女のことですから氣味を惡るがッてシッ〳〵と追ッて見ましたが、夫れでも遁げません、止むを得ませんから怖る〳〵品物を取出して、却說翌日になッて之れを仕舞はふと思ッて開けて見ますと、昨日の蜥蜴は依然として塲所も替へず。キヨロ〳〵として棧にくッ付いて居ります开處でまたシッ〳〵と云ッて追ッて見ましたが、矢ッ張り遁げません、何うも不思議な蜥蜴もあればあ

ッたものだと細君も根氣まけして見て居りますと、隅ッこの柱を傳ッてきた一匹の蜥蜴が現らはれました、そして其の蜥蜴は口に何やら咬へて居ります。尚ほ見て居りますと其の蜥蜴は例の棧の所にくッついて居る蜥蜴の傍へ行ッて、咬へて來た物をそれに食はせて少時斤處を放れません。餘りに不思議でなりませんので、主人に其の事を話しますと主人も夫れは不思議なことだと云ッて來て見ます。スルと後から現らはれた蜥蜴は其時モウ居ませんでしたが、間もなくまた何やら咬へて



來て食べさせること以前と少しも變りがない、さて斯うなると家内中の評判になッて書生も來て見る下女も來て見ると云ふ大騷ぎですが、夫れでも蜥蜴は逃げませんので、主人が傍へ寄ッて能く〳〵驗めて見ますと、逃げぬも道理、蜥蜴は其の半身を棧と板との間に挾まれて半身不隨になつて居るのです。是れは棚を拵らへる時に大工が斤處に蜥蜴が居るとも知らず釘を打附けたものと分かりました。さうして數日間何うして之れ

家庭に於ける諸名家の談片

家庭と衛生

△誤れる衛生思想　近刊の新聞紙上一青年が其肺病を苦にして、毒菌の他に傳染せんことを恐れて自殺せしことを見たるが、斯る事は往々ある例にて是れ全く誤れる衛生思想より肺病を絶對的不治症と信じ、可惜生命を殺せるものなり、元來肺病は決して不治の症にあらず、刀圭社會の統計に由れば、該患者百人中六十人は平癒し、死亡者は平均四割に過ぎず、されば不幸にして一旦此病に罹るとも、必しも失望落膽するに及ばず、充分治療の途を盡すべし、衛生とは決して悲觀的思想を懐くことにあらざるなり、今家庭に於ける注意すべき條件二三を擧ぐれば

△室内の掃除　室内を掃除するに、ハタキを用ゐ、塵埃を立るは宜しからず、殊に病室は最も注意すべし、塵埃は靜かに雜巾にて拭き取るを善しとし、若しハタキを使ふ要あらば、風通しよき縁側か庭外に持出し、ハタキを掛くる樣にすべし、又室内は空氣の流通をよくし、日光を入るゝ工風あるべし、獨逸の諺に『日光入らざれば醫師入る』といふことあり、最も味ふ可き言にて、五六、七の月はペスト流行期なれば、能くよく此事に留意すべく、鰹節箱など塵埃に染み、汚染あるものは食パンを切りて之にて拭へば、全く垢は落ち、此法は羅紗の帽子等の掃除にも應用するを得べし、

△屋外の掃除　溝、水溜などは常に　清潔法を行ひ、惡臭を放ち、蛆蟲を生じ、蚊蠅などの蕃殖所とならざる樣注意すべし、惡臭は自然呼吸を淺くし、胸筋を弱め肺患を起すの恐あり、又蚊や蠅はペスト馬剌利亞の媒介者なれば、之を未然に防ぎ、蠅の蛆蟲には過滿俺酸加留謨、孑孑には石油を投すれば何れも死するものなり、又蚤には疊を裏返して、日光に曝しナフリンを撒くべし

▽身體の掃除　齒を磨くには毛楊子を竪に使ふべし、さすれば三度摩擦する所は一度にて事足れり、嗽水には硼酸を混じたるものよろしく、之を平生に用ふるときは、喉痛咽喉加答兒等に罹ること無く、創の洗ひ藥としても重寶なれば、家庭藥として常に備へ置く可く、又鼻をかむに餘り力を入れて強くかむはよろしからず、爲めに鼓膜に響き腦を害するの恐あればなり、故文部大臣外山正一氏の如きは、頭初流行性感冒に罹れるが、遂に病を續發して、不歸の客となれり、今更いふ迄もなきことながら、暑氣に向へば、發汗した上埃風を浴びる故、別して冷水摩擦、洗湯を怠らず、以て身體の清潔を保つべき也云々（遠山醫學博士談）

家庭と理想

▽家庭の事であるがあなた方は學校で英語を學び外國の事情をも知つて居られやうが卒業前後になると、直に腦裡に浮ぶのは

理想的の家庭である、是れは學校と社會とを結び附けない限りは、決して理想通りに行かない、想像力の發達は結構であるが、多くは空想に終るのである▽將來完全なる理想を描いて風俗と理想とを相容れんとするのは、大いに六かしい▽他人の家に嫁し舅姑と氣が合ぬ、風波が起る、迚も理想どころでは無い、內亂が起る樣になる、ヒドクなると革命が起る、であるから、先づ家庭は、我家庭を研究するが捷徑である（大隈伯談）

父母の改良

▽今の青年男女は兎角家庭に居る事を快しとしないが、之れ家庭を陰氣な場所と思ひ込むに到らしめた父母の罪で、家庭を改良するには、父母からして改良せればならぬ今其二三改良の要點を擧げて見やうならば小兒の感應性に氣を附け、些細な事に影響を蒙ること、蠟細工の如き小兒にやかましい干渉や、壓迫を加へないことである、小兒の自由活動を束縛し、イヂケ根性を養はしめるは、他日家庭を快しとせざるに到らしめたる大原因である、世には理想を有して居る父母が、却つて此個人性の發達を妨げ、小兒を一個の模型中に入れやうとする甚しき心得違ひであらう、之れ天才を殺すものである、然ればと言つて▽無定見の親にも困る、小兒の鞦韆に乘る事を勸誘て置きながら、一度乘り外して着物でも汚すと直ぐ之を叱るやうな親は、無定見の一例で、小兒に取つては何うして宜か分らない、能く世間には當座當座の叱言を子供に加へて、一定の見地を持たぬ父母は多いが、之れ又家庭を快く思はしめぬ一つの原因▽打擲　子供を打擲することは、最も厭ふべき業で、爲に小兒の自尊心を傷け、男子は放蕩になり、女子は淫奔になる、始終打擲され成長した少年は、決して好結果を得ない、歐洲各國の中でも、伊太利は能く小兒を毆打する惡風行はれて居るが、隨つて風俗も荒々しく毆打犯殺人犯なども、伊太利に多い、打擲は小兒の神聖を害するものだ▽廿世紀の父母　要するに理想の父母たらんとするには、小刀細工は爲ないやうに、煩瑣な干渉を愼み、鷹揚で淡泊で、大體に子供を教育して、而して子供の活動を壓へない樣にするのが最も宜い、（松本孝次郎氏談）

家庭と人工美

戰後に於ける我が國の位置は、實に國力の充實を計るのを以て急務とすべきは勿論のことである、即ち實利實益を重んずるの精神を養ふの必要なるは明かなる所である、されば近時實業教育などが盛んになり來つたのは誠に故あることである、恐らくは斯かる精神は、現在の我が社會及び家庭の間に行はるゝ一大勢力であると云ても宜い、吾人は是非趣味の教育の頗る必要なるものであるを主張し、之を奬勵したいと思ふ自然の美に接せしむるの必要は固より明らかであるが、尙自然の美の足らざる所を補ひ、又は何時でも美を樂しみ得るの點よりしては云へば、人工美の必要がある、況んや美を朗らかなる形にてあらはすと云ふ點から考へて見ても、人工美の必要がある是非家庭にては之を利用して兒童の精神を慰め高尙なる快樂を經驗せしめたいものである（大村仁太郎君談）

で生きて居られたかと云ふと、最前お話しゝた外の蜥蜴が食物を運んで來て養ッて居たと云ふことも分りました。思ふに是れは夫婦の蜥蜴で、夫が半身不隨の憂目に逢ッて居るのを、其妻が養ッて居るのであらう、ア丶小さな動物でさへ愛と云ふことは知ッて居る、然るに世の中には隨分と夫婦喧嘩をしたり夫婦別れをしたりするものがある、人間大に恥べしである、と云ッて主人夫婦が感心して居りますと、突然开處に居た下女が大きな聲をして泣き出しました。蜥蜴で驚いて居る矢先きにこの下女で驚かされた主人夫婦は、まアお前はどうしたと云ふのかと右左から問ひますと、下女は「旦那さま奥様お恥しう御座います、私はこの虫にも劣ッた人間で御座います」と云ッて、尚ほ啼歔げて泣きます。开處でいろ〱宥めて仔細を聞きますと、この下女は當家に奉公に參る以前に他へ緣附きましたが、不幸にして其の亭主が大病に罹かり、終に足腰も立たぬ不自由な身となりました、素より斯かる女の緣附いて行く所で御座いますから裕な生活もして居りませんし、斯んな不具同樣になッた亭主に附いて居た所で、一生花の咲く時もあるまいと云ふので、離緣をして歸つて來て、こゝへ奉公して來たのでありますが、今この蜥蜴を見るにつけて、小さな虫でさへ夫婦の愛はあるもの、況んや其の境遇が自分と相似たと云ふところから大に慚愧して人目も關はず泣いたと云ふことが分かり、且つ今日限りお暇を貰ッて、元の夫、乃ち不具の亭主の所へ歸ッて妻たるの道を盡したいと、懺悔やら改心の事を語りましたので、主人夫婦に於きましても、其の殊勝なる心に感じまして、この下女が復歸のことに就いては一方ならぬ盡力もし、何うか女の手一ッで細々ながらも不具の亭主を養ッて行ける丈けの道を附けて遣ッたことがありました斯うお話をしますと、古い物語りかなにかにある作り事のやうでありますが、實際斯う云ふことのあッたのは事實であります、仁禽獸に及ぼすと云ふことがありますが、是は禽獸の仁人間に及ぼしたる誠に

稀らしいお話しであります。故に夫婦の愛の衰いものであると同時に、何うか、禽獸に劣ッたこの下女のやうなことはしたくないものであります。また假にさう云ふ人があッたとすれば、同じくこの話に鑑みて、この下女のやうに速かに改心せられんことを望むのであります(文責在記者)

美しき家庭

高橋東洋女藝學校長の一家

折柴園主人

銀行の創立者で支配人を勤めて居る人が女學校を創立して校長となる、近頃の學校の多くは營利的であるが、銀行家が思ひ付くほどの營利的のものであるか、銀行家と教育家、その取合せが、少し異樣に感じられるので、

現に靑山の旭銀行の支配人なる高橋粂太郎氏が、多額の費用を投じ、東洋女藝學校を設立せられたに就て氏の門を叩き、設立の動機と、教育の方針とをたづね、圖らずも、氏の美しき家庭を見るを得たのである、

氏は靜岡の人で、嚴君には早く別れ、母堂とく子の手一つに育上げられたのである、氏の今日あるやう教育せられた母堂とく子の苦心は實に容易ならざるもので、氏がやう〳〵物を解するに至つた頃、母堂が孤燈の前に夜を徹して、針の手の休みなく働かるゝを見て、なぜ自家の母さまは、夜の目も寢ずに仕事を成さるのであらう、との疑問を起した

この疑問の解決、女子は貞操を重んずべきこと、女子は手藝を覺え置くべきこと、この二點は、大に氏の心琴を鳴らしたのである、即ち氏をして子孫の爲に美田を買ふの考を、女子教育に轉ぜしめたのである、而して氏はそれを母堂へ對するの義務、且つ社會へ對するの義務として、良妻堅母養成の外決して他意はないのである、

氏は斯の如く美しき考を以て、夙に女子教育に意を

注いだのである、然る所去る三十六年十一月、種々の名稱の下に甚だ評判よろしからざる猿樂町の女學校々舍が競賣に付せらるゝ事に成つたので氏はそを買受け、翌年一月認可を受けて開校することになり爾來本年一月大刷新を行ふに至る迄、不評判の跡を引受けたると、經驗の乏しかりしと、一つはあまり正直に過ぎるやり方なりし爲に、目ざましき發展はなかつた、氏は多くの生徒をあつむるのみの發展を望まれざつたのであるが、あまりに關係者に信用を拂ひ過ぎて、それが爲に、大苦心をせられたとのことである、利益主義ならば、疾に逃出すべき時機がなければならぬのである、然るに一日も飽かず、今日まで甘んじて辛抱せられたのは、内心大に賴むところがあつて、前途の光明を認めて居るからである爰に感ずべきは、氏の支配せる銀行の頭取高橋藤兵衞氏は、親孝行を以て名高き温厚篤實の人であるが氏が學校屋でなき教育の方針に感じて、甚だ賴もしき後援者となられて居る事である、

併し氏は斯く女學校の設立を急ぐ譯ではなかつたのであるが、その當時母堂が危篤であつた爲に、早く母堂の志より起れる女學校の成立を見せて、瞑目せしめたいと云ふので、校舍の賣物のあつたのを幸に買受ける事になつたのである、

であるから經營上、少からぬ困難を經來つたのであるが、氏は却つてそれが爲に多大の經驗を積むを得たと喜んで居られるのである、

學校を設立の動機がそれであるから、教育の主義も當世風のハイカラでなく、眞面目な人をつくり、利功者ものより、十人並の人物をつくるといふのである、時代後れといへば云ふべきであるが、今の時代に大に氏の教育法が必要である、

そこで學校は創立した、孝心天に通じて母堂の病氣も平癒した、母堂の病氣は中耳炎で、其時醫師は死期近きにありといふので匙を投げた、氏は母堂が平素覺悟のよき人であるから、醫師の言ふ所を打明けて遺言はござりませぬかと尋ねた、すると母堂の答が

面白い、死にかゝつた人の精神は確かであらうか、もし確かでなかつて、間違うた事を遺言をし、行ふ事の出來ぬ遺言をしたら何うする、聞きに來ることも聞き直すことも出來まい、私は決して思殘すやうな事はしてないのみならず、今の家内の有様を見て誠に心安く思ふ、長々世話になつた、皆のものは身體を大切にするが專一であるぞ、

一事は萬事を推す、氏はこの調子で教育をせられたのである、氏が令閨ちよう子を迎へられた時には、ちよう子は某子爵家の姫君で、氏は十圓の月給取であつた、然るに氏の漢學の師久我懋正氏の父君は子爵家の家令で、氏の前途に望みを囑し、媒介者となつてこの婚儀を結ばしめたとのことである、其當時久我氏より氏に結納の金は如何にするぞといへば、惜しい事をしたり、けさ書籍を買ひて囊中を無一物にしたりといふ如き有様であつて、然もその時氏は決して家柄は欲しくないのであるから、高橋流の教育に仕直して差支ないかといふ注文であつた、その位であるから、氏に大樹の蔭に立寄るなどいふ卑劣の考は無論ない譯である、さてきのふまで子爵家の姫君であつた身は、今日より十圓取の奥様になる、姑に連れられて八百屋魚屋の買出し方を敎へられる、或時は一日金三錢の内職までもして、貧苦の中に、殊に子爵家よりは賴まんばかりの補助金をもはねつけて、親子夫婦相親み、相勵み、遂に一銀行を脊負つて立つ今日の地位にまで進んだのである、かゝる美談を今のハイカラ女學生に煎じて飲ませたいものである、

氏の家族は氏夫婦と母堂、長男壽(十二)長女登美子(八つ)次女定子(六つ)高子(二つ)の七人である、下女も書生も置かず、所謂水入らずの一家で、朝は五時に一同床を出で、氏と長男長女の君は庭を掃除し、母堂は座敷の掃除、令閨は炊事、六歳になる令嬢は二歳の令息の傅をするといふ役割になつて、一人も働いて居らぬものはない、それが下女下男を傭へば、子供を朝寢坊の怠惰物にするやうなものであるから

この點に就ても寧ろ他人を入れぬ方が得策で、然も苦情なしに事の辨ずるに至つて、猶更の事と感じられたからである、

長男の君は當時高等一年生、尋常校を精勤で終へて今日まで一日も休校したる事なく、長女の君幼稚園を級長で出て、今は尋常小學一年級、末頼もしき成績が見えるのである、

就眠は小さいのより順に七時より八時にかけて、この時間に母堂も枕に就かるゝとの事である、

邸内に廣き畑があつて、手のあいた人は誰かれなく面倒を見るので、種々の野菜は年中膳部を賑はすのである、かゝる事をまで他人の手を借らずに出來るといふ話で、働くことの如何ばかり價値あり趣味あるかゞ解る、實に氏の家庭は、一家悉く働かるゝことを樂まるゝので室内はもとより廣き庭の隙まで、塵一本小草一莖もなく、はれ〴〵する中に、元氣のよい團欒、實に羨ましき限りである、

衞生に就ての注意も、働く人の家庭には行届くもので、肌着はすべて白で、よごれの早く目にたつやうにし、常に洗濯し、地質は夏にかけてフランネルを用ひて居らるゝ、氏は年中冷水浴をなし、家族一同冬も湯で顔を洗ふといふことはない殘らず水で、自然巨燵の如きものは拵へてないのである、入浴は毎日家族缺かさぬやうにし、飲食物は頗る注意を拂ひ飯は麥を用ひるとの事である、

經濟に就ては家族それ〴〵豫算をつくり、長男の君には毎月五十錢づゝ支給し、筆墨用紙其他の支出を出納簿に記入させ、令閨が調査するといふやうにし氏自分も豫算外に支出することの出來ぬやう注意し煙草の如きは禁ずるを得るも、氏が煙草を廢すれば母堂が氣兼をせらるゝので、お附合に喫まるゝとの事である、母堂は氏を養育するとてしば〳〵の徹夜に氣散じにした烟草であるから、その名殘の惜まるゝのは無理ならぬ事である、

實に右の如き水入らずの家庭、いき〳〵とした家庭睦まじき家庭、夏座敷の明放したる如きはれ〳〵し

た家庭には、一點日記を汚すべきものはなく、家庭として最も美しきものではあるまいか、その美しき家庭をつくる材料はといへば、一家正しき心を以つて働くにあるのである、この正しき心を以て働ける美しき家庭の主人に敎育さるゝ東洋女藝學校の生徒は、大なる名譽と幸福を喜はねばならぬ事と思ふ、

金剛石式を擧げし老夫婦

岡山縣淺田郡玉島町大字上成小山紋平(八十五)妻民(八十三)と云へる老夫婦あり、小山翁は舊赤穗藩士小山源吾右衛門が八代の孫にて、少しく昔時に溯れば、源吾右衛門は大石良雄と從兄弟の仲にて、當時義士四十七人の中に入り、目醒ましき仇打の數に加はる筈なりしに、源吾右衛門には八十餘りの父あり、豫て孝心篤く、常に汲々とし孝養に努め、搗て小心の憶病者なりしかば、老父に心引け、到底勇ましき功名を做し能はざる可きを見て取りし大石は、體よく一味同志より除きしとの話柄も傳はり、其頃より小山家は累代長命者多く、紋平も亦其妻お民と共に旣に八十有餘の今日矍鑠とし、若者を欺く程の元氣にて杖も眼鏡も一切用ふる必要なく、老翁は日々一里餘の海濱に出で魚釣に餘念なく、老媼は家にて針仕事に勉め、夫婦が衣類は更なり、孫の着物に迄世話を燒き、近村に於ける活字引と稱され、元戸長たりし關係より、今に至るも村内の萬端紋平の意見にて做され、殊に家傳の秘藥を製して、農民に施す等慈み深ければ、近郷一般の重望中々なりと、偖てお民は備中國川上郡吹屋町長尾佐助の三女にて、十八歳の折甫めて紋平に嫁し、結婚後今年六十五年に達し、旣に昨年一月五日を以て此長壽の老夫婦は世にも珍らしきダイヤモンド式の祝儀を執り行へり、當時其子息にて、經木細工發明者として知られし小山善太郎氏は畏くも東宮妃殿下幷に高輪宮殿下より御菓子を賜はりし折とて、其を家名の光榮とし、幾久しく紀念せんと、件の賀筵に於き恩賜の御菓子を種とし、同形の菓子を作り『嬉しくも我が袖の上に九重の御そのゝ菊の露のかゝれる』との一首の國風を添へ、親族自己は素より村内總てに配布し老翁老媼は共に、六十四年前華燭の典を擧げし際着用の五ツ紋黒羽二重に仙臺平の袴紅色紋羽二重に刺繍を施せる裲襠を取出し、高砂の翁媼を眞似て、國內に舞ひ、且つ謠ひしぞ芽出度かりけることゞもなり、紋平翁の長命法として、常に人に語りて謂へる處に依れば、三度の食事を一定し、一回は茶椀に二杯半とし、如何に珍味佳肴の食膳に上るも定量以上を執らず、斷じて間食をつゝしみ、六十餘年來遂ひに破りし事なしとか、此目出度夫婦仲の長男福島三五郎(六十)妻ちか(四十八)次男大岸岩吉(五十六)妻しか(五十)三男小山善太郎(四十四)妻きん(三十八)皆現存し居れど、何れも遠く膝下を離れ家に在られば、幼孫を膝下に招きて其敎養に勉めなどし、老後の餘生を樂み送りつゝありと云、因に同老が世嗣たる小山西畠(二十三)は同志社大學を卒へ目下兵役に服し鐵嶺守備隊に在りと、



法庭より得たる婦人觀

解題

中川愛氷

此問題は、野口事件より得たる婦人觀である、野口事件即ち男三郎の罪惡事件は、明治昭代を汚したる行爲で、士君子の話頭に上すを耻づべきもの、殊に本誌讀者の如き貞淑なる諸孃に向つては、臭き物に蓋をする方策に出でねばならぬ、併しながら新聞紙の讀めるほどの人にして、此事件を知らざるはなく、事婦人に關係して、而も社會の或一部は、此事件に教訓を受けねばならぬ有樣であるから、此問題を提出した次第である、

本題に入る前に、此事件に最も關係深き野口寧齋氏に就て所感を述べやう、品行方正と評判さるゝ人には、多くは薄情で、所謂ツラかゝ、シコと稱する厭ふべき人が多い、故に輕薄なる世間が、評判する其聲の高きものには、白い眼鏡をかけて、最も注意してかゝられねばならぬ、寧齋氏の如きも、品行方正を以て評判された人である、されどその品行方正は、人格上貴ぶべきものであつたらうか、もし寧齋氏にして貴つべき品行方正家であつたならば、此事件を見ずに濟んだかも知れぬ、寧齋氏は多少の財産があつて、詩文に長けた人で外歩きの出來ぬ身體を持て、派手な交際をするではなく、引札に手紙を書くといふ經濟家であるから、男三郎の如きものが舞込みさへせねば、無事に世を渡れたのであらう、然るに男三郎の惡人物を引立てる爲に、俄に寧齋氏を人格の高きものにして仕舞ふ如きは、少々滑稽である、否滑稽どころではない、かゝる事が、物の間違ひの種になるのである、

石井豫審判事の話によれば、寧齋氏は男三郎に、常人の企及ばざる如き親切の看病を受けたとのことである、而して其間が長かつたとの事である、もし寧齋氏にして世間に噂する如き、(噂は反對に聞くに堪へぬ醜事もあれど)立派な人であれば、この時既に排斥せねばならぬ、或は自分の都合のよき時には目眩んで、男三郎にうまく乘ぜられたのであるか、これ寧齋氏の人格に於ける疑問の一

氏が家庭の亂れは、妹曾恵子をして食客男三郎と情交を訂せしむるに至り、終に彼等二人は所謂出奔をしたのである、もし寧齋氏が理性に富んだ品行方正家であつたならば、この時曾恵諸ともに勘當せねばならぬのである、然るに婚嫁を許したのは、或は人情の拘すべき所でもあらうが、寧齋辭書中に人情といふ文字があらうか(外形を粧ふ外に)これ寧齋氏の人格に於ける疑問の二

既に曾惠子に許すに男三郎の妻たるを以てしたのである、もし寧齋氏が情の人であれば、一人は妹とは思はぬ母と思ふとまで、看病其他の面倒を見てくれた愛妹である、一人は縁もゆかりもなきに、常人の及ばぬ看病から、家事の世話をもさせた男である、しかも妹は普通の良縁を結ぶことの出來ぬ血統をうけて、その婿となつた男三郎は、年も若し、云はゞ前途多望である、比較的好縁を得たのである、少しは血統の上から打算して讓歩せねばならぬ、男三郎の爲には(妹の爲にも)一臂の勞をとらればならぬ、決して男三郎をして東西南北に流轉せしむべきではない、然るにあまり勘定高き爲に 妹をして貞節を盡さしむるとの出來ぬやうに立至らしめたは、常に行動が利欲から割出され、家につく壻には遠慮がなかつたからであらうと思ふ、これ寧齋氏の人格に於ける疑問の三、

この三疑問は、それでも立派な家庭、立派な人物であると解答が出來るであらうか、子女を持てる家庭中、或は此事件に教訓されて、今後注意を拂ふものがあらうと思ふ、

次に男三郎、これは虚榮心の熾んな女の如き男である、彼が婦人を欺きたる手段は、婦人が男子を籠絡すると同一筆法である、併し彼は婦人を欺いて得た金で銀行を建てやうといふのでもなく、欺いた婦人を利用して出世しやうといふのでもない、常に接近せる幾人かの婦人等に、えらき人と思はれ、賴もしき人と思はれ、チヤホヤさるれば、それで人生の能事終れりと思ふて居るので、その準備の爲には、いかなる辛抱でもし、終には殺人までしたことゝ思ふ、辛抱の乏しい、人殺しまではせぬ男三郎は、決して世間には少くないやうである、まとまつた藝のない、働くことの嫌な、虚榮心の盛んな男は大に警戒せれば(ママ)ならぬ、既に人物が男三郎になれば、場合によつては人をも殺さぬとも限らぬ、この公判を聽きに來て、すました顏の男三郎的人物もないではなからうと思ふ、

さて本題の主人公曾惠子、先づ以て同人は憎むべき人であるか否やもし憎まぬとすれば、如何なる人を憎むべきであるか、同人に制裁を加ふべきや否や、もし同人に制裁を加へれば、社會は如何なる人に制裁を加ふべきか、社會の道義を保つ爲には、飽くまでも憎まればならぬ、飽くまでも排斥せればならぬ、然るに世間他に同情を寄せればならぬもの多きに拘らず、この不義者に同情を表する如きは云はゞ變則の義俠心で、社會の制裁を無視したものである、泣付きさへすれば、いつでも罪を償へるものであるといふ、惡しき事をするにも依賴心を起さしむる惡例をつくるものである、と云ふ人もある、

併し憎まればならぬ、排斥せればならぬと云ふは、曾惠子のどの點であるか、もし過去の行狀對男三郎との當初の關係とすれば、それは賤むべきことに違ひはないが、今の社會が、それを憎み、それを排斥する資格があるか、資格の有無に拘らず、惡しきことに制裁を加ふることは贊成であるが、それならばなぜ其の當時大に憎み、大に排斥を加へざりしか、今になつては、喧嘩過ぎての棒ちぎりではないか、

それから其心情に立入つて考へて見れば、曾惠子は其身分と才藝と容色とに釣合ふべき良縁を求むることの出來ぬ血統を受けて居る、されぱとて普通の婦人として情を矯めることは難いことであるに、氣位が高いから自然縁は遠い、少し話は違ふが、或商店の娘に多年和歌を敎へたことがある、なか〳〵上達なした、すると許嫁の手代が、俄に不風流とでも見えたのか遂に其縁談は娘の主張通りお流れになつたが、さて自分の理想通りの良人はと云ふと、注文通りには行かない、そのうちに齡は遠慮なく傾くといふ始末で、其親たちは大に苦心をして居る、曾惠子も止むを得ずの獨身主義で、良縁あらばと思ふたに違ひない、然るに其處へ舞込んだ男三郎は目先の敏い口先の旨い、風采もなか〳〵立派で、學問すきで、親切であると、まづ〳〵受取れるのであるから、其の誘惑に乘せられたのは感ずべきことでないが、また憫むべき所がある、それは癩病といふものに就ての醫學上の誤解と、その毛ぎらひの甚しいのとで、其點に於て社會はあまり冷酷であるから、その冷酷の中から一縷の情緒を引出さうとし、引出し得たので、心機一轉したのは、また無理のない所もある、

以上の範圍に於ける曾惠子を非難するならば、今少し感心の出來ぬのが、令夫人とか奥樣とかすまして居るばかりでなく、學校の敎師の中にも、敎育會の役員の中にもある、世間はそれを知つて居ても咎め立をせず、自分も思切つて社會を無視して居る、まづ騷動が起るまでは默つて居る、併し之れを一々詮議立をすればこれ日も足らずであるが、何の某と云はれる位な所には制裁を加へたいものである、騷動が起つて騷いだ所で追付く話ではない、曾惠子の如きも、今日の悲境の種を蒔いた當初の不義に對しては、世間では何と噂をするものさへなかつたのである、一詩人の妹たるに過ぎぬ曾惠子でさへ以上の如き騷動の種となつたのであるから、それ以上の婦人になつては、騷動が持上つた日には、隨つて影響する所が多大な譯である、幸に曾惠子を非難するほどの社會であるならば、今少し制裁力を大にして貰ひたいと思ふ、予は曾惠子位なものは濱の眞砂の數よりも多からうと思ふ、實に困つたものである、

又憎まればならぬ、排斥せればならぬといふは、男三郎の妻となり濟して後の曾惠子であるか、もし曾惠子が初め世間で信じた如き女であつたならば、かゝる罪惡を造らせずに終つたかも知れぬ、或は曾惠子が男三郎の惡事を幇助したのであらう、大に憎む所があるとならば、少々意見がある、男三郎に對しては曾惠子に弱味がある、それは自分の如き血統を受て居る因果者を、妻として愛してくれるといふ考があるからであらうと思ふ、もし曾惠子が世間から厭るゝ血統さへ受けて居られば、其容色と才藝とは、相當なる良縁を求め得べく、決して男三郎如きの妻となりもすまい、又男三郎の妻となつても、男三郎に向つて強硬に、其短所を矯めるに力めたであらう、先以て嫌はれぬやうに飽かれぬやうにと、それに心を碎いたからで即ち面を冒してといふ所まで進まなんだのであらう、實に不見識な沙汰ではあるが、それには、兄寧齋氏が兩人の間を圓滿にするやうにはつとめず、常に嫌惡の情を以て迎へ、遂に貞操を捨てしむる、即ち離別されたからである、神ならぬ身の曾惠子は、まさか男三郎

が人を殺さうと迄は思はず、二人の中には子まであるから、寧齋氏の嫌惡する材料位では、男三郎を捨てる譯には行かなかつたのであらう、かゝる境遇にあつた曾恵子が、一筋繩で行かぬ男三郎に對するのであるから、なか〳〵それを矯正する所までは進まなんだのであらう、それが寧齋氏の立場からであらば、まづ男三郎の虛言を喝破し、涙を以て將來の方針を立てさせ、無職業ならば職業を授ける事も出來たであらう、かくして氣永く、自分が妹の看病を受けた如く氣永く、曾恵子との間に立つて面倒を見たならば、男三郎も或は眞面目に職業に就く事も出來、曾恵子も貞操を全うすることが出來たであらう、多年曾恵子が男三郎の妻でありながら、情婦の如き境遇に於かれたのであるから、かゝる結果になつたので、この點に於ては、曾恵子は罪のないものと思ふ、もしあらば、子女に對する家庭の罪で、寧齋氏の冷酷がさせたのであると思ふ、對寧齋氏の醜事を云々されるのも無理でないと思ふ、

又憎まれば排斥せねばならぬといふは、曾恵子の今日の動靜であるが、聞く所によれば、男三郎が入獄後一回も書信をしたことがなく、第一審に於て、男三郎が死刑を宣告された日も、呑氣に構へて居つた、と云ふのは、法律上離別した良人に對して、法律上何うするにも及ばぬが、情誼としては、あまりに冷酷ではないかと云ふのであるが、それは感心すべきことでないと思ふだけで、今世間へ出やうとして居るのでもないから、殊更に憎みも排斥するにも及ばぬと思ふ、併し同情を寄せる點は少しもないのである、

此問題提出に就ては、一應曾恵子氏に面會の必要があり、男三郎が第一審に於て死刑を宣告された後、二三回訪問した、尋訪其他に於て否見た所の總てに於て、更に間然する所のない婦人で、歌集など見るとなか〳〵、感服する歌が多い、寧齋氏の墓前に捧ぐる文の如きは、啻寶人裸足である、十年前に噂に聞いた貞淑なる曾恵子を聯想する、それ以上の觀察は出來ぬ、もし男三郎の妻とさへならねば貞淑なる婦人で終ることが出來たであらう、併し忠臣義士の節操は變ある時に於て現はるゝものであるから、結局貞節でなかつたといふ事になれば、遂に今日迄は假面を被來つたものであつて、今村氏の説の如く、野口家の筆法で、外部を飾る事に妙を得たのであると思ふと、また慄然とするのである、曾て留宅檢分の時に於ける曾恵子が美服をつけ金鎖を燦然と胸間にきらめかした點の如きは、有るものであるから持つ、女はたしなみが大切であるから着飾つたといへばそれ迄であるが、かゝる場合にも、婦人はそれであるから、男三郎の金の欲しかつたのも無理はなく、多くの罪惡は、この婦人の虛飾心が作るやうであるから、この虛飾心を大に警戒せねばならぬと思ふ、

次は此事件に傍聽に來た、女學生らしき婦人の多かつた事であるが、この醜惡殘忍なる裁判を、面白げに傍聽して居る顔付、心の奥は讀めぬまでも、この人々の第二の曾恵子と評さるゝを侮辱と憤る資格はあるまいと思ふ、また此傍聽劵を世話して隨行する男たちは、これまた第二の男三郎と評さるゝを、侮辱と憤る資格はあるまいと思ふ、

右の如く、世上には見掛に似ぬ醜惡な家庭が其數に於ても、乏しく

はなく、曾惠子以上の令夫人も教育家もあり、第二の男三郎曾惠子も常に眼前に往來して居る、此事件を決して輕々に看過してはならぬことゝ思ふ、即ち此問題を提出して、社會の制裁を嚴にせんことを望む所以である、

なほ此事件の觀察に就ては此事件に裁判長たりし今村判事を始め、諸君の高説を吝まれなんだことは感謝に堪へぬ次第で、文責は愛氷の負ふ所である、

意外四則

東京地方裁判所判事　今村恭太郎

法廷と云ふものは、隨分嚴しき所であるが、其刑事法廷に現はるゝことは、社會人事の寫實である、それ故表面より窺ひ知ることの出來ない、人事の裏面も遠慮なく暴露することもある、其中には刑事人類學等の研究材料は勿論、道德上、社交上、教育上、其他心理學上の研究に資すべきものもあり　又家庭とか婦人問題とか云ふ事に就ても、注意すべき資料も少くないのである、今回の男三郎事件の如きは、其の中にも最も多方面に亘り、婦人問題、家庭問題等に付ても、趣味ある材料もあることゝ思ふのである、然し自分は左樣な問題は、餘り攻究しない方故、其觀察も價なき事と思はるゝが、御尋ねの婦人問題、家庭問題に付ても、二三の感じた事がある、然し之は一種の法廷觀に過ぎないので、又婦人の意向に投ずることもなく、寧ろ忌諱に觸るゝ事かも知らぬが、試に其所感を述べて見やう、

婦人の同情と涙

婦人は情に支配せられ、情の爲に動き易く、極めて涙脆きものであると思ふ、涙は婦人の生命で、涙なき婦人は婦人の資格がないと云ふてもよい位である、實に涙は婦人にとつては最も貴いものである、然し其動き易き情の爲に忽ち動き、猥に貴き涙を流すに至るならば、遂には他の爲、之に乘せらるゝ危險がある、婦人の情性は、熱誠なる眞情に出で、其涙は極めて貴く、極めて價あるものでなければならぬと思ふ、彼の男三郎が今日の惡事を働くまで、諸家に取入つた慣行手段は、憐を以て人に訴へ、涙を以て人の袖に縋ることである、婦人に對してのみでない、男子に向つても、彼は常に其同情を買ふに力めたのである

涙を以て欺かんとしたのである、然るに彼は婦人には頼もしき人、憐れな人として、其涙を買はれたのである、最も貴重なる婦人の涙を誘ふことを得ぬも、其弱點を握つて、其涙を迎へることが出來たのである、男子には、其の手段も常に排斥せられ、野口寧齋の如き、伊澤某の如きは、決して男三郎を信用したものでない、石川博士の如きは、虚言多き男と看破し、三輪家に宿泊した某の如きは、一見掏摸の如き男と蔑視したのである、然るに其半面婦人側よりは、妙齢の處女も、世故の經驗ある家婦も、之を信じ、女教員すらも之に欺かれ、總て同情と涙とを以て迎へ、中には親戚の如く、家人の如く取扱ふたるものもある、曾恵の如きは、遂にそれが爲に今日の悲境に陷つたのである、是れ婦人が猥りに情の爲に動き、不謹愼に涙を流す爲、其間に乘ぜらるゝ所以ではあるまいか斯る不用意な事で、近時流行の男女交際論など行はんには、頗る危險であると感じたのである、婦人の眞情は今一層高尚に、其涙は最も貴く、價あるものであらねばならぬと信ずるのである、

婦人性行の表裏

婦人は深く裏に藏み、表に愼むと云ふ、特性を養ふものである、故に其性行に表裏のあるは、怪むべきことでもないやうであるが、表裏の差の甚しく、頗る假面を被るに、妙を得たるものが少くない樣に思ふ、曾恵の如きは、其最も巧みなるものではあるまいか、其平常の言語なり、起居動作なり、實に意を注いたものである、家に在りて其家政を整理し、家兄の病を看護し其編輯を助くるに至るまで、實に行屆いたものである、何人にも其性行を非難すべき點を現はさず、淑女と評され來たのである、然るに曾恵が男三郎に與へた文書等を見れば、可憐なる情緒を訴ふるのみでなく、醜惡なる思想と、不徳なる行動を現して居るものが多いのである、其文書より其人を伺へば、品性は醜劣であると云うて差支ないのである、其婦人が多年淑女の假面を被り、少しも之を現はさゞりしは、如何に表を愼む特性とは云へ、實に巧なる者である、此點

件は是と同樣に、秘密に包まれて、現さゝる、此種の婦人は他にもあるのである、之を思ふと、世に賢女とか淑女とか云ふも、容易に買被られぬことを感じ、婦人に接するものは、其表面のみを以て、其性行を信ずるは危險であると思ふのである、

家庭と同居者

人の家庭に就ても、亦表見の美は極めて當にならぬ事である、先づ寧齋の如き、世間では君子人の如く評するものもあるが、其家庭には、今回の樣なる事件が孕まれ、又種々な醜聞も傳へらるゝは、其家庭が表に評せらるゝやうではないのである、其他一々擧げて云ふは好ましからぬが、今回の事件により、計らざる家庭の不始末を暴露し、他も驚き、自らも意外に感じた家も見たであらう、斯樣に刑事々件の爲に立派な家庭に意外なる裏面の珍事現はるゝは、其例少くない事である、子女を他人の家に托する時などに、外觀のみを以て、其家庭を買被ると、裏面には忌はしき醜事が潜んで、意外な珍事を惹起すこともある、實に危險千萬のことである、

又其家庭の同居者と云ふものは、抑も一の問題ものである、水入らずといふ骨肉の團欒のうちへ、性行品格も詳かならぬ同居者が入來り、其家に關係遠きものが、其家庭の內事に與かるに至れば、自然種々の弊を生ずるは明白なることである、それ故近き親戚とか、特別なる關係あるものとか、又は嚴格なる敎育家か、其監督の下に子女を同居せしむるとか、主人が雇傭の關係にて、雇人を同居せしむるといふことは格別なれども、謂なき者を同居せしむると云ふことは大に考ふべき事と思ふ、刑事の法廷に於て、同居者より生ずる罪惡の表はるゝことは、其類極めて多きものである、實に謂れなき同居者は、『家庭に於ける罪惡の勸誘者』といふも過言でないと思ふ、敎育盛りの子女ある家庭に、謂れなき同居者を置くは、最も愼むべきことではあるまいか、もし男三郎の如き奸物が、其家庭に入らば家庭は破滅に歸するのである、

解決に苦む

次に感じたるは、此事件の公判の傍聽に、婦人しかも蝦茶袴を穿きたる一見女學生の如きもの丶多かつた事である、白粉をつけ、口紅をさし、此傍聽に出掛ける心事は何れに在るか、若し此事件に興味ありとすれば、それは醜惡とまた殘忍の二つで、普通の婦人なれば、此話を聞かされても、自然耳を掩はねばならぬ事である、然るに不思議なるは、傍聽劵を受取に來るものには、婦人はないのである、孰れ何人かゞ受取りしものを貰受くるに相違ない、此受取人は婦人の親でも兄でもないことは、普通の人情として想像が出來る、然らば如何なる男子の手より得る物か、實に不思議なる現象である、裁判長は風敎上の必要を認むれば、婦人兒童の退廷も出來るのであるが、其傍聽に來る所以を解し得ざると、事に害なくは新奇の處置も面白からざる故、暫らく其儘に看過したるが、今に至りて何其傍聽の理由は、解決に困むのである、若しそれ戀愛小說でも讀むと同樣の考にて此傍聽を爲すものあらんには、風敎の上に大に注意すべき事と思ふ、併し世上には此種の演劇も隨分流行して居る、さうして親子兄弟姉妹手を連ねて、觀劇して居て怪しまないのであるから、それが社會の常態で、寧ろ怪むものが不明なのであらうか、

婦人の貞操と弱點

東京地方裁判所檢事　清水孝藏

婦人の涙

婦人の多くは、其性質として、男子よりも比較的に涙にもろい、自分が泣くばかりでなく、他の泣くにも、之に反抗する力が乏しい、殊にそれを感じたのは男三郎事件であつて、彼の關係して居る多くの婦人は、その弱點を利用せられ、それに乘せられて居る、實に男三郎の泣く手腕に至つては團十郎以上で私どもも調べる時にも、それは旨く泣いて見せたもので、普通の人であれば、かゝる場合には動かされる

であらうと思ふた事が屢々ある、要するに相手が涙を流して、他を動かすに力めるといふ性質が解つて居ればよいが、そうでないと、涙の爲に、其心情を判斷する事が出來なくなるかも知れぬ、

西洋などの諺でも、殘忍なる人でも泣くことはあると云うて居る、それに違ひない、故に泣いたからと云うて、心の底にも涙が流れて居ると見ると、それは大變な間違である、それであるから、他に泣かれる場合があつても、まづ道理を考へて、條理のない事を聞届けるなどは、考ふべき事であらうと思ふ、そこで婦人の涙は、婦人にとつての弱點であるが、またそれが長所でもあるから、絶對的に涙を流さぬやうにせよ、他の涙を聞届けるな、とは云へぬ、極端に涙を禁止すれば、冷淡になれといふも同じことで、隨つて弊害がある、その加減が大切で、理性と情との權衡がむづかしいのである、

婦人の倨傲心

次には倨傲心で、この倨傲心は婦人にとつての大なる弱點である、この弱點のある婦人は、それを利用する事が容易である、倨傲心の爲に知らず識らず利用せられるのである たとへば或婦人に對して、特別に尊敬したる言葉を用ひ、其人に對して敬意を表する擧動があり、其人の爲に自分は奴隷の如く見せしむると、ツイよい氣になつて、與し易い感じが起る、さう感じたその時は、幾分か其人に利用される端緒を開いたものである、男三郎は此倨傲心のある婦人を見付けては、いづれに對しても、奥樣から遊ばせ、お孃樣から遊ばしては、といふ風に遊ばせ言葉を缺いた事がなく、しかもその時は、手を膝の上に置いて、なか／＼敬意を表したものである、さうして一歩々々家庭にとり入り、家人と見らるゝまでに進むのである、さうして犯罪人の種々の方面に利用せられ、犯罪人の性質等も全然解せず、遂に聰明を掩はるゝに至るのである、實にこの倨傲心は婦人にとつて、大に禁すべき物である、

貞操の重んずべきこと

次に感じたのは、今更ながら婦人の貞操、これは實に愼むべき事と思ふたのである、白木屋お駒が鈴ケ森で、親の許さぬ不義いたづらをして、遂にうき恥さらす身の因果を懺悔した如く、親の許さぬ不義は大なる禍を受くる事がある、もし不幸にして相手が男三郎の如き犯罪人であれば、其犯罪の味方をさゝれるやうに成り、一度犯罪人の味方となれば、いかなる場合にも其味方たることを拒まれぬやうになるのである、又相手が同等な人物であれば、まだしもそれが居候的の物でゝもあれば、世間の噂も面白からず、自然それが世に處しての弱點になり、眞面目で通すことが出來なくなる、曾恵の如きはそれが爲に家には疵をつけ、社會には顔向の出來ぬ始末となつた、その源は云ふまでもない痴情である、

その痴情が男三郎のやうな物にからみついたのであるから、どこまでも惡縁が付いて廻はるのである、又曾恵の如く獨身の婦人であれば、婦人に少しの强味もあるが、有夫の婦人であると、どこまでも利用せられ、いつでも種につかはれ、いよ〳〵行かねばこの秘密を其筋へ持出して仕舞ふなど〻脅迫し、それが爲に無理な事をも聞かされるやうになる、

それで男三郎が出入るまでは圓滿な家庭、曾恵もまづ善良の性質であつたが、自然に男三郎に强制せられ、直接間接に其感化を受け、男三郎に關係して後の曾恵は、その以前とは別人の如きものになつたのである、

恐ろしき感化

それから罪跡を取しらべるには、女の强情なのになると中々むつかしい、まさかに男はそんな事はないが、女は全然白い物をつきつけて、ソラ白いではないかと云うても、私には黒いとしか見えません、と云ふやうにしら〴〵しい返答をする、八釜しく云へば泣く、素直にすれば附上る、何うしても女は阿古屋の琴責、あの遺方でなければならん、曾恵も普通の女から見るとなか〴〵確りして、云はんとなつた

らなか〱口を開かぬ、例のソップの事でも、男三郎はお前に飲ませたと云ふたではないかと云ふと、さてはそれ丈は白状したかと云はねばかりに、始めてハイそのやうな物は飲みました、といふやうな事で、石井豫審判事も、曾恵から心證を得る事はむつかしいと匙を投げた位である、よく男三郎に感化されたもので、その點に至つては男三郎以上である、結局男三郎との關係が、不義から起つたから、か丶る次第になり、か丶る感化までを受ける仕義になつたのである、婦人が口を開けられぬやうな強情を敢てするやうになつては、その婦人も最早ゼロであるその感化でもあるまいが、兄には妹とは思はぬ親と思ふとまで親しまれたのであるに、廿日祭までは曾恵が兄の墓參をして居らぬ、死後三日目に劇場に行つたといふ事さへ新聞紙に傳へられたのである、要するに此事件は婦人の價なき涙、又は倨傲心等から起つたと云うてもよい位であるから、その點に於て充分の注意を拂はれたいものである、

新しき事實の證明

東京地方裁判所豫審判事　石井豊七郎

御尋の問題に就ては、意見なしといふのが、私の意見である、それは犯跡捜査の上、多くの家庭に入り他人の見ることの出來ぬ所まで立入つて居るから、意外な事もあり、隨つて警告したいこともあるが、それは豫審の職務を執行するに際して得た秘密であるから、幾多の面白い材料があるにしても、豫審判事の徳義として、さういふことは絶體に公に物語ることは出來ぬと確信して居る、

なぜ此事件に就て意見なし、といふかは、此事件が何等新らしい敎訓を與へない、昔から在來つた敎訓で、女鑑などが常に敎訓したことが、陳にして腐ならず、生きた説明を與へられたといふに過ぎない、即ち材料が生きて居るから、抽象的に云へば、古人の敎、女鑑などが常に唱へて居ることが、間違ないといふことを事實に證明されたに過ぎないのである

男三郎は婦人に對して、一種の魔力でもある如く噂するものがあるが、何等の魔力をも持つて居らぬ、婦人の心を藥劑によつて迷はすなど丶云ふものもあるが、そんな事もないやうで、結局男三郎が婦人に取入ることに成功したのは辛抱である、

其家に老人があればいたはる、子供があれば可愛がる、男三郎が抱いて表へ駈出せば泣が止まるといふ有樣、女中が居れば水を汲んでやる、萬遍なく四方へ行渡つて歡心を買ふに力める、なか／＼痒い所へ手が屆いたものである、實に男三郎の辛抱は、常人の及ばぬ事をも平氣でして居る、この辛抱が善事に向つてゞあれば、頗るよい結果が得られたのである男三郎のした辛抱さへあれば、大抵な事は成功するであらうと思ふ位である、

その辛抱には、有夫の婦人の心をも動かして、家庭へ引入れしむるに至るのである　さうして男三郎は其の裏面の秘密を握り　常にその秘密を振廻はして惡い事を企むのである、

曾惠の如きも、醜寫眞を撮影されたのか、彼に對する大なる弱點となつて居る、男三郎の筆法は辛抱と一は卑劣の行爲で、或る後家の時計屋を曾惠との會合所にしたのも、其皮に怪しき繪のある女持の時計の修繕を頼み、それより取入つて、女主人の弟を非常に愛し、斷るにも斷れぬやう仕向けたのであるなか／＼手數のかゝつた事である、

すべて斯の如くにして家庭に入り込むものであるから、自然其家庭の裏面にも目が屆く、そこで裏面といふことは彼の寶庫となつたのである、いつか男三郎は社會のあらゆる裏面を摘發して、風紀を一新するといふ觸出しで、それには宗教の方面には、或僧侶を頼み、婦人界の方面は、或る女流文士に頼み、野口男三郎自身は主筆といふことで、其名も裏面と題する雜誌を發行しやうとしたが、それは不成功に終つた、後で聞けば女流文士といふは醜業婦、僧侶といふは若い妾を寺に引込んで居ると云ふ人物、これらも男三郎が裏面中の人物に漏れぬのである、斯

の如く彼は裏面を窺うて、他の秘密を握ることに苦心して居る、而して今の社會は遺憾ながら、男三郎に秘密を握らるゝやうな行爲が少くないのである、家庭には秘密は大禁物で、夏座敷の如きものでなければならぬ、所が開放してはお座のさめる家庭が多い、そこで處女は家庭に於て權利も薄く、弱點も秘密も少いので自然有夫の婦人に取入る、有夫の婦人は職權も多く、秘密も弱點も多くある、男三郎はそれ等の婦人に對して、鼻息をうかゞひ、媚びへつらひ、飽くまでも從順に見せ掛けるものであるから、相手は夫あることも忘れて、第三者なる男三郎に秘密を打ち明け夫は敬して遠け、男三郎は愛して近けるといふやうになる、此時男三郎が横を向ひて舌を出して居るなどには氣付かぬのである、

妻は如何なる敏腕であらうとも、夫を待たずして家庭が治まるものでなければ、夫も自分が干與せねば家庭の成立を見る事が出來ぬものと思うて居らねばならぬ、

閨門の亂れは夫の權利の行はれて居らぬ所に限る、夫權の完全なる所には、決して男三郎の如きもの、入込む餘地はないのである、故に男三郎の關係したる家は、すべて女權の盛んな家庭で、閨門は亂れて居るのである、男三郎を待つて初めて其家に女權が擴張され、閨門が亂れたのではない、男三郎に女權と閨門の亂れに乘せられて、それが明白になつたまでゞある。

要するに婦人をして如上の如き秘密弱點なるもの、ないやうにさへすれば、男三郎は幾人あつても禍を受けるには至らぬのである、故に男三郎の如き人物を警戒する前に、婦人の弱點なり秘密なりに警戒を加へねばならぬ、それは今更云ふまでもなく、女鑑などの常に唱へて居る所である、しといふはそれである、今更意見のないのが、常に唱ふる女鑑の説を賛成して居る譯で、女鑑の方からは意見のない方を喜んで貰ひたいのである、

婦人の弱點と災禍

辯護士　花井卓藏

弱點の一

第一、婦人は言葉に欺かれ易い性質を持つて居る、喜ぶことも、怒ることも、哀むことも、樂しむことも、皆言葉で自由に出來るのであるから、つまらぬ事男ならば何とも思はぬほどの事でも、婦人は褒めさへすれば喜ぶ、いやがらせる事でも云へば、如何なる些細の事でも腹を立てる、それは殆ど教育のあると否とに拘らぬのである、古人は一凡人之を褒むるも榮とし、一凡人之を譏るも之を辱となすと云うて居る、實にその通りである、

野口男三郎は驚くべき虚言家で、而して婦人の喜ぶべき言葉に巧みで、婦人の歡心を買ふに、言ふ可らざる技能がある、彼が大阪の木寺家、野口家、新宿の伊澤家三輪家に取入つたのも、言葉の上から婦人の歡心を得たので、即ち虚言によつて、多くの婦人に接近したのである、彼は先天的に婦人に取入る技倆があつて、年老いたる婦人にはおはれまれ、年若き婦人には愛せられ、幼き女にはしたしまれ、この人でなければならぬ如く信用せしめるのである、敢て戀愛といはず、すべて言葉を以て婦人の歡心を買ふにつとめ、彼はそれを年齢十七より、二十六七歳まで繼續したのである、故に自分は曾恵を咎めない言葉にあやまられ易い婦人に對して、此問題が一教訓を與へたことを自覺するのである、

弱點の二

第二、婦人は信切を裝ひたる態度に迷ふ習癖がある一見舊の如しといふことはあれど、中々さういふ譯には行くものでない、然るに僅に數日の交り數月の交りに於て、親切らしき態度を執れば、直にそれを以て己に對する信切な人であると、淺薄なる女性は疑ふ所なく、一切萬事を打明けるやうになる男三郎は此特性を有して居る、初め彼が木寺家に取入つた時は、己より年若き一人の男子の學校に行くに、雨

がふれば傘を以て之を送るといふ風に、細な所に注意をして愛したものであるから、親切なものとして同家に住込むやうになり、野口家に行けば、忌むべき恐るべき寧齋の病に侍して、膿汁を洗ひ落す等、肉身の人でもあまり好ましからぬことを忍んで世話する、そこで野口家にも親切な人と思はれたのである、また三輪家に行けば、主人は病氣で東京に出て居る、あとは婦人に子供であるから、家政の助けをしたり、子供に着物を教へる、又伊澤家に行けば、子供に對する世話の如き、火の付く如く泣いて居るも、彼が手に抱けば泣を止むるといふ有様で、外出すれば玩具や菓子を買うて與へる、下婢に對しては水を汲んでやる、先づ右の如く、親切を假裝したものである、

そこで意志の弱き女は深くその人を研究せず、假裝せられたる態度に、知らず識らず信用を措くのである、故に自分は曾惠を咎めず、親切らしき態度の然らしめたものとして、此事件に一の教訓を得たのである、

弱點の三

第三、凡そ婦人ほど虛榮心のあるものはない、虛榮心に基き、未來を豫想する習癖がある、而して男三郎は、婦人に對しては、非常に勤勉の人なる感を懷かしめ、學校にあつては優等生の如く、卒業すれば遖れの人物になれる如くほのめかし、末樂しき未來の大成功者の如き感覺を起させ、此人を世話さへして置けば、定めて立身出世をするであらう、自分等の子供の爲にもなると、年取りたる婦人には思はせ此人と契を結ばゞ、後には立派な貴夫人として立つことを得らるゝと、青春の婦人には思はしめる、實に彼は婦人虛榮心に乘ずる秘訣を有して居る、さなきだに言葉の上に於ては巧言令色で上手に瞞着し、虛榮心に向つて點綴する、即ち婦人の弱點、第二の天性習癖に打込んで、操縦するに功みであるから、自分は肯て曾惠を咎めぬ、これによつて世の婦人たるものは、實現せざる空想が、虛榮心より成つて居

る事のあやまつて居るといふことに就て、一の教訓を與へられたものと信ずるのである、

催眠術中の人

自分は淸水檢事の所謂、曾惠は催眠術中の人になつたといふのを當らぬとは思はぬ、婦人にとつては、いつはり多き男子の言葉に恐るべきもの丶含まれて居ること丶、親切らしき態度に恐ろしき或物の含まれて居ること丶、虛榮の空想に陷り易き習癖を自覺して、輕々しく男子を信せぬやうにせねばならぬと思ふ、

曾惠子の災禍

それから曾惠に就てのお尋ねで、いさゝか所感を述べるが、自分は辯護士として云ふのではないが、男三郎の罪科で、寧齋殺しと、臀肉の件は、全く寃罪であらうと思ふ、男三郎もこの寃罪さへ雪ぐことを得ば、藥屋殺で死刑は覺悟して居るものと見受けられる、即ち東京地方裁判所に於ける判決は、我意を得たものである、

然らば野口曾惠は兄を殺した男三郎の妻でなく、君子は叔父を殺した者の子でなく、子を殺した婿を迎へた榮子でなく、義弟に殺された寧齋でない、即ちこの事件は野口家とは離れたものと見てよいのである、懺悔は總ての罪惡を打消すものである、況んや曾惠は、自ら罪惡を犯したるに非ずして、恐ろしき女性の敵に遭遇したので、不思議の災禍に罹つたのである、換言すれば、曾惠は罪惡にあらずして災禍にかゝつたのである、斯の如き不幸者に對しては、社會は厚き涙を以て同情せねばならぬ、世間には曾惠を、尼になれの、或は鄕里に退隱せよのと云ふものがある、もしさうせねばならぬものとすれば、詐欺をする夫を持つた妻は、その他すべて罪を犯した夫を持つた妻は、夫と同じく社會の制裁を受けねばならぬといふ如く、實に酷極まる話であらうと思ふ今後の曾惠に就ては、われ〳〵の關知する所ではない、そこで曾惠もあれだけの境遇に立至つた人であるから、迷ひの雲も晴れ、本然の善に立かへつて、

嘗て己の不心得より、家名にかゝはる大事件を起したことを泣いて居るであらう、これに慰安を與ふべきかの問題は、婦人論者の攻究に價することであらうと思ふ、

事實は小說より奇

伯爵　柳原義光

拜啓　時下倍々御清適賀し奉り候、さて野口男三郎事件に關し、何か思ひ付きたる考有之候はゞ申述ぶべき旨拜承仕候、此事件に就き、法律の適用如何は勿論、其筋の黒人の方々に任せ、小生の今日迄に知り得たる各種の材料に基き、遠く犯罪の動機に迄遡り、これに倫理的社會的方面よりの觀察をも加へ、なほ戀愛問題としても、此事件を解釋致候へば、實に人生の一問題にして、事件の複雜せるだけそれだけ研究の餘地頗る多く『事實は小說よりも奇なり』との諺の誠なるを深く覺え申候、乍然此事件に就きて小生の考を申述ぶる儀は、何卒御宥免願度委細は拜眉の上御話に及ぶべく候へど、取急ぎ御斷り迄如此に御坐候、

丙午六月十九日

華山　柳原生

愛氷中川雅契

侍史

◎附記　柳原伯は、貴族中の文藝家にて、多方面に趣味を有たれ、野口件事の如きも、もしこれを劇壇に上すことあらんには、其役割も伯によつて容易に定めらるゝを得べく、この事件を女鑑の立場より解說するも、伯の說に得る所多きを信じ、一書を飛ばして先づ内意をうかゞひしに、意外にも右の如き返翰に接したり、されど『研究の餘地頗る多く』とあるは、いさゝか伯の說を叩くに餘地ありと思ひ、伯の邸に走せて、御斷りの理由を尋ねたり、伯は答

へて、予は此事件に就ては同情を以て辯じたき事なきにしもあらねど、會惠子孃の兄島文次郎君とは多年の交わり、同君に對しても禁默すべき義務ありとありたるにぞ、そを強ひてもといひかねて、さればその代りをとて飛車取王手をかけ、全く別問題にて高見を叩きしは、次號の家庭欄にて（愛氷生）

人格の變化

文學士　三輪田元道

私は斯ういふ事を考へて居る、人間と云ふものは通常或意味に於て、時と場所により、二重にも三重にも人格が變る、或は情の人格の人になり、或は意志の強い人格の人になり、又は智の鋭い人格の人となる、であるから彼の人にしてあアいふ事を云ふ、此人にして斯ういふ事がある、など、意外な事がある、野口事件に就ても、恐らく此幾重にも働いて居る人格が様々に映じて會惠の如きも、會惠自身の人格を怪しむ感が起つたに違ひない、

如何となれば、男三郎といふ男が　野口家に出入した其當時は、眞の信切か、その信切が假裝したものかは別問題として、會惠はその信切なる動作の爲に情が動き、此人ならば一身を托してもよいと思ふたのであらう、其時の會惠は情の人格である、情は由來盲目である、少しも先途がわからず、其瞬間に自分で愉快を感じ、自分の境遇に滿足を與へるといふ事に服從するのである、男三郎が親切ごかしの當時は之を喜んで、彼の將來に於ける性行、眞個の性質は何うであるかと云ふことを、冷靜に考へる遑がない、即ち彼等二人の間に出來た關係の當時は無我無中で、何等の判斷も意見もなかつたのである、

今日になつては局面一變、會惠に對する宇内が變つたのである、如何となれば、是迄無我無中に樂しく感じたのが暗黑界になり、これまで花の色と見、鳥の聲と聞いた愉快なる天地が忽に、暗夜となつたやうな心地がするのであるから、此時に當つて人の情

は沈底し、情の發動は止まつて、心の底に殘る、微かながらも智的作用が起り、智の人格になる、そこで初めて、男三郎はあァいふ惡人であつたか、佞奸な人物であつたかといふ事も判斷が出來、過去に於ける行動を我ながら恥ぢ、男三郎の如きものを夫として一日でも此人に仕へたかと云ふ事を悔ゆ念が起り、此時心の主宰となれるものは智で、利害得失を心に齎くことが出來るのである、この念の起つた曾惠は靜肅にして莊嚴なる法廷に呼出された時の如きこれまで發動した情は、ます／＼冷却し、其心は後悔以上に進んだであらうと思ふ、其證據は、曾惠が其母に向つても、男三郎は全く不都合な人物であつて、何月何日の言葉は虛言であつたか、何月何日の行爲は僞善であつたか、など口外して、自分の心を確めるやうになつたの」を見ても知らるゝのである、實に今日の曾惠の心中は大に憐むべきものがあらうと思ふ、

人間は罪を悔ひ心を改めたならば、其時は神聖なもので、儒者も過つて改むるに憚る勿れ、と云ふて居る、眞に悔悟の念が起つたならば、その瞬間からは高潔なる人になり得べき性質のものである、心的狀體からいへば、心の中は洗濯せられ、花の如く月の如く淸く美しくなつて居るに相違ない、更に進んで恐るべきは、その心的狀體が折々變ることである、この悔悟の念が、いつまでも其人永久の人格でないことである、法廷へ出て情の人格の人が智の人になつても、法廷外へ出ては元の如く情が發動して、情の人格になる人が多い、例へば花井お梅の如き、入獄中は非常に悔悟した、狀體であつたから、出獄の後は、眞面目に渡世することが出來るであらうと推測した人もあつた、然るに出獄後のお梅は、再び情が發動して、視聽の樂しみをほしいまゝにし、曾て後悔したるものとは、反對の行動がある今日の曾惠は、たとひ男三郎の犯罪に關係なくとも婦人として父兄の許さぬ不義の行爲をなした以上は道德上多大の責任がある、故に曾惠は今日悔悟した

念慮をいつまでも繼續し、第二の男三郎をつくる如き行爲なからんことを望むのである、要するに今回の事件は、世間の婦人に種々の訓誨を與へたものである、

一、兎に角に父兄の許さぬ男女の關係は、絕對的に惡しき結果を得べき確證として、

二、佞奸なる、口に密あり、腹に劍ありといへる如き、言葉と精神の一致せざる者に注意すべき事、

三、血統のよからぬといふことは、結婚に就て非常なる妨害を與へるものなるが故に、社會は之を救濟する道を講せねばならぬ、人道上決して等閑に付すべからざる事として、

四、實に此事件は、極めて悲しい演劇よりも悲慘なる光景で、一家の當主人は人の忌む惡病にかゝり、其妹は佞惡の男子に欺かれて、遂に此上もなき耻辱を流し、年老いたる母は、惡人の種をやどせる孫を抱いて、何等の罪もなく、何等の缺點もないに、悲慘なる晩年を送らねばならぬ、又人の生るゝや一切平等、これ亦何等の罪もなきに、曾惠と男三郎の間に生れたる子として、他日自ら淸い人であれば、如何に己が身を耻づるであらう、もし自暴自棄して惡路に踏入るといふ事になれば甚だ憂ふべきことである、あはれ四五十年の小兒の前途をほゞ、今日に於て決せらるゝといふ事になれば、人生の不幸これより甚しいものはなからう、

此間に立てる曾惠が、この老母を如何にすべき、この幼兒を如何にすべき、自分みづからを如何にすべきかといふ事に考へ到れば、彼の心は亂麻の如く、形容の出來ぬほど慘憺たるものであらう、

此問題は決して對岸の火災視さるべきものではない實に人生問題として、社會問題として、婦人問題として、此事件は無限の訓誨を與へて居るのである、

◎次號の本欄に於て更に新らしき問題によつて名家の人生觀婦人觀を紹介すべし、その問題とは何ぞ、しばらく諸君の豫想に任せん、



旅のつと

侯爵夫人　鍋島榮子

宇品より品浦丸に乘り三津ヶ濱に
行く舟中にてよめる

右ひだりはなれ小島の數見えて
　けしきことなる船のたびかな

松山にて赤十字總會催されけるに

國のためつくす心はまつ山の
　松のいろにも見ゆるけふかな

總裁の宮殿下の臨ませたまひけるを
かしこみて

このうへに猶しげるらし朝ゆふに
　君がいでましまつやまの里

人々のもてなしあつきに

海やまの遠き旅路もいとはれず
　御國の爲につくすと思へば

國を思ふこゝろおなじき人にあひて
　更にへだてもなきむしろかな

その折白蓮といふ八十一歳の老女
ことに心をよせければ

老人のおなじ姿に見ゆれども
　こゝろわかきはめづらしき哉

蓮葉におくしら露の玉よりも
　きよきは人のまことなりけり

あまた高齢の人々を見て

ひらけゆく御代になれつゝ老人も
　むかしの事はいはずなりけり

汽車中によめる

夏來ても雪をいたゞくふじのねの
　雲のたちゐのめづらしきかな

加茂のあふひ祭りに

年をへてけふにあふひの神祭り
にぎ〳〵しくもあふぐ嬉しさ

筆のすさび

男爵夫人　千家俊子

友

まじはりは形のものとなれる世に
心の友をうるよしもがな

夢

おなじくは心のまゝになる夢の
現なりせばうれしからまし

竹

窓ちかき竹の心をこゝろにて
世にたつふしを我は求めん

松風に汗をふかせて晝寢かな

水軒夏日（分題爲韵得日字）

蕉葉軒主人

紅榴映碧梧。疎々又密々。樹間清泉流。淙潺繞書室。雖云小草廬。亦足容兩膝。微涼絶炎氣。可消長夏日。竹風和水聲。恰似奏琴瑟。心安而神恬。應是醫疾術。北軒午睡餘。几邊散書帙。小詩纔吟成。愧無如椽筆。

夏夕過東臺

東臺雖是四時好。夏夕尤堪趁早涼。喬木參雲風帶響。厚苔滿地露含光。將軍廟畔鈎輈叫。天女祠邊菡萏香。深院無人孤磬靜。小西湖上月蒼々。

籠鶴

半弓苔地雪毛翻。仙翅將舒奈小園。本是樊籠非鶴意。况乘衛懿大夫軒。

折にふれて

佐々木信綱

神のみ聲聞くかとぞ思ふ神路山
　杉生の奥のうぐひすの聲

春の水ゆたに流れてしら帆一つ
　眠るが如し利根のおほ川

奉納の繪馬古びたるみやしろに
　みやまうぐひす初音さゝぐる

露はもろし星はつめたしわれは唯
　花のゑまひのなつかしきかな

花の咲くさくいづこにも先ゆきて
　さもたのしげに語る蝶かな

見るまゝに眺むるまゝに花もまた
　物いひたげに打ゑまひつゝ

去年の秋片枝かれし古やなぎ
　かた枝みどりに萠出にけり

引舟のみのかさ姿とほく消えて
　春ざめけぶるなか川の水

何處よりいづこの果にいたるらん
　かすみて遠し大川の水

病める身も枕もたげて花かめの
　花にこゝろをなぐさむるかな

高麗人は內裏にまゐりて鴻臚館
　あしたしづかに牡丹花ちる

牡丹さく春のあしたをめされたる
　春の日ながし那古の山でら

巢立してつばさも弱き子雀を
　さも荒まじく吹くあられ哉

諸ともに遊びし野邊よ池よ山よ
　又いつの世かともに見るべき

岩の湯

小川直子

今日は空も麗に晴渡りたれば、朝ぼらけの程に宿り

を出でゝ岩の湯のあたり逍遙す、先づ川の此方より見渡せば、此地を圍ひたる峰々、五重ばかりかさなりて、同じ緑なれどとり〴〵に色替れり、遠なるはいたう濃くて、其上に薄衣着せたらんやうに、霧たちこめたり、前なるは年經たる松ども並立て、美しう見え、其あひより白雲の立ちのぼらんとして、むら〳〵と打なびけるに、楓麓の岡どもは、の青葉限りもなう打續き、岸の巖岩滑なるを、猶も洗はむとや、川波の打そゝぎたるもいと清し、同じ川の流なれど、此わたりの氣色、



此方は汀まで早瀬白波岩に碎けて湧き返り、清く滯なきは、倦める心を勵ますに似て、勇ましくも亦いさぎよし、彼方の岸は中洲のためにやわらむ、中々に上つ方へゆるらかにのぼり行くも、亦やうかはりてをかしう見ゆ、かゝる程に、左にわたれる峰より横雲を分つゝ、朝日の漸々昇れるが、波の上に輝きてゆるく流るゝ方は、水底まですき通りたる日影に、いと深き水なれど、淺きやうにさへ見えて、波のうね〳〵たとしへなう面

白し、はた此岩の湯は、向ひの岸なれば、假初なる板橋わたしたり、これはたいともく長き板橋を、三つにあやどりたれば、折れてめぐれるさまいと面白し此橋の上にて、

ちりの世を拂ふ箒木の川風は
ころも手寒し夏のなかばも

あかぬながめに時をうつしければ、こゝかしこより人々起きいで來つゝ、湯あみむとてそこらの行かひ繁くなりぬ、

苔むして千とせを經たる岩の湯を
あむれはいえぬいたつきもなし、

と口すさびつゝ徐にたち歸りて宿りに入りぬ。

胡蝶の日記（五）

白井千代梅

のぼりをりつゝ猶わくるに、一の瀧音のみさやかに聞ゆ、二の瀧も程なしといへば嬉しうて進むにいと險しきをり坂にて、古りたる杉暗きまで生て、ことに物凄う、細き岩路の苔滑かに、足ふみ立つべき角もなし、鳥も通はぬとは、斯る所をやと覺えて、下るべうもあらねば、足さへ戰かれぬ、さばかり賴もし人なりつる杖も、つくべきやうなければ、蔦かづらに縋りて、辛うじて下りぬ、瀧のすそ川水瀬早うて、岩にせかれて流れゆく、其しげき岩稜ふみ踰えつゝ、瀧の樣を見るに、廿丈ばかりの岩山より、幅は二尺ばかりに、二口に別れて唯白う、雪の崩るゝが如くに落つ、音は百の鳴雷落かゝるやうに、傍の人の物いふだに聞えず、峨々たる岩ほのたゞずまひ神寂たる木立のさま、なべて此世の境とも覺えず、口塞がりて唯まもりにまもる、水霧いたく立つをみて、忽脚下作雲など例のからうた誦ふにぞ、げに瀧の樣はなかく言の葉に述ぶべくもあらねど、みづからも

みだれ落る瀧つせにたつ水けふり
すくせの山の雲となるらむ

打見るまゝに、心さへいと涼しくなりて、仙人などぞ斯るわたりには、往きかひ遊ぶらむと思はる、山路にて暮なば便なかるべしとて、彼の蔦道からうじて攀ぢ登る、瀧の音猶おどろ／＼しう聞ゆるに顧すれど隙なき木立に見ゆべうもあらず、急ぎつる程に、申の半ばかり、隱瀧といふ里に來ぬ、爰なむしるべ人の預れる、蠶桑の機織屋なりける、こは専ら蠶飼、糸引き編織るためにとて、公けより設けさせ給ふ舍にして、子息なる重勝ぬしのまけ蒙れる所なれば入つゝ見るに、筋織、菱絹は更なり、五つの色糸もて、花鳥のさま、妙なる錦をさへ織居たるは、あやに珍らし、又傍なるより屋といふには、緒車の音おどろ／＼しきまで、人集ひ居て糸より居たり、竹の棹かけ渡して、みどり口なし紫など、いろ／＼に染めかけたるもあり、椽に皆腰うちかけて見出せば水は涸て形ばかりなる池の中島に、やゝ木高き松の翠いろ深う見ゆるも哀れにて、

うゑて見し人もなき世に己れのみ
木だかきかげと立さかえつゝ

人々も打まもりて　昔しのび顔なり、主手作り酒とり出て、山里のならひ御肴はなけれどとて、人々にすゝむ、刀自おのれにも土杯さし給へば、聊かうくるに、彼唐土の岡の越えざるにはあらで、

手もゆらにはた織る里に酌みつるは
こや神つ代のあまのうすざけ

とぞ覺えし、平津、鹿の澤など過て、日暮ぬれば、松ふり照して辿り行くも、古へめきて興ある心地す今宵は厳岡なる坊にぞ宿れる、二日朝戸ひきあくれば、軒のつまより雲立ち籠めて、雨さへ降すさび、山里の哀も此上なうまさりぬ、關守は爰より歸らむとて、別れを告るに、人々名殘の唐大和詠み出しにぞみづからも

ふる雨に山ぢをわくる袖よりも
ひとり歸らん人をしぞおもふ

また此ほどの案内の勞をよろこびて、

山もひくゝ海も淺くやしるべせし

君がこゝろを何にたとへん

とかくしつゝ、雨も晴れねれば、出たちぬ、三日に聞つる大泉坊とやらんの、前栽も見ばやとてゆく、こゝら立ち續きたる中には、家も棟々も、築地の小門より入ば、庭もなべてならず作りなしたるが、垣の外面を見出すに、左右に生並みたる松原雨の名殘にいとゞ常磐の色増して、敷妙の袖の浦わは、唯こゝもとの様なれど、晴れ殘る雲に、海の面さだかに見えぬもをかし、斯く妙なるながめを、朝夕に見つゝ居ればぞ、爰のあるじの風流心も、いとゞ進むらめと羨む人もありき、觀世音に詣づ、二王門を過れば石の燈籠いくつもあり、中に由利郡本庄の領主、藤原正武と彫りたるぞ、まことに大きなりける、御堂いと廣らに磨きなしたるさま、心も及ばず、今日はしるべ人も歸りつ、己れぞ案内ものなれとて、佐かたぬし先に進み給ふ、何がしの坊の後ろの山に出て右の道よりゆけば、いと茂き林あり、分わづらひてさは此上に出てぞ道はあらめと、しもとばら押分けつゝ登るに、衣は絞るばかりにそぼちぬるにぞ

しるべせし人の心はあさけれど
まどへる道の露はふかしな

など打侘つゝ、辛うじて道にいでぬ、空は名殘なう晴れて日は照り増れるに、木立もなき砂山登りゆく、炎さ堪えがたう覺えて、しばし息ひて見下せば、えもいはれず景色のおかしきに、白う布引はへたるやうに河の見ゆるぞ、近くは汲ままほしうぞ思ふ、折しも薪おへる翁の、かたち穢なげなるが登り來つゝ、汗おし拭ひ、君等は何處よりぞ、瀧まうでにやと問ふに、さなり秋田より來つと、文木ぬし戯れ欺けば、驚きたるさまして、あな遙々と來玉ひぬるかな、鶴が岡をもかかり給ひけぬ、城下の様はいかに見給ひしと、誇りがに言へるにぞ、忍び難くて俯きて笑ふ、又行さきの道を問ふ、彼の川ある彼方の里は、新出と申侍り、此方の黒河草津など過て、程なく増田村に侍り、此山は網取と申はべりなど、まめだちて敎ゆ、聞つる里々打過てゆくに

流れいと早う、目もきるやうなる河に、丸木かけ渡し、間遠に柴おき並べたる橋あり、ようせずば足ふみ落すべく覺ゆれど、辛うじて打渡り青柳植なみたる川面に添て行に、しげき巖にせかれ來る、水のさまいと面白う、風は更なり、浪の音さへ涼しくて、むつ田の河ならでも、立止らまほしうぞ覺ゆ、山路になれば、昨日のごとは險しからねど、かしこ此處にて、ふみ迷ひなどしつればにや、彼の翁に聞しより行くに遠さの増田かなと、戲れてしばし休らふ、梢に蟬どもの鳴あへるに、

たづねゆく瀧のひゞきと思ふまで
高き梢にせみぞなくなる

登りつ下りつ、やゝ増田村に到りぬ、偶と見れば、茂きみどりの、こぬれよき瀧の、白う見ゆるにぞ、覺えず皆いそぐ、柴橋だになき小川をかち渡りしてかたへは山、かたへは田にて、いと細き道をゆくに鳥居あり、其處よりは松柏、小暗きまで生茂りたるを過て、瀧の下に立よりて打仰ぐに、千尋の岩峯より、空に續きて落來るさま、見るにまづ心駭かれて

雲ゐよりおちくる瀧のみなかみは
そらに流るゝ天のかはかも

上はぬき亂りたる白玉の、千々の袖にも包み餘りつべう、中はまた、白雲吹下すらむやうなるが、下の岩ほにかゝりて、糸と亂るゝさま、すべて譬ふべき物なし、况て音のおどろ〱しきは、何にかは比へむ、水霧いみじう立て、間ひ程あれど、衣はたゞ絞るばかりになりぬ、風吹くまに〱瀧のすがた、さま〱に靡き變るなど、只打まもるのみ、口噤まりて人々皆言の葉もなし、

琴の音

喜久本海洲

短かき夏の夜は更て
松に傾ぶく月のかげ
影を踏つゝ彷徨へば

折戸掩したる草の庵
主人はたれぞ筑紫琴
奏する節の優しさよ
謡ふ聲さへ美はしく
菱垣もれて聞ゆなり
故郷遠くしらくもの
空や戀しと忍ぶらん
扨は憂世の嵯峨の奥
昔の跡をや慕ふらん
主人ゆかし我も又
唐詩選低く唱ふれば
琴の調へは絶はてゝ
小窓に寫る人のかげ

三十一文字

首夏　　麻生春子

朝風をまつべき夏は來ぬれども
わかれし春のさらに戀しき

餘花

鶯のこゑもきこえぬ山のはに
咲おくれたる花の一もと

殘鶯

咲のこる花の梢に行く春の
わびしさうたふ鶯のこゑ

新樹

露むすぶ庭のわか葉の淺みどり
見るもすゞしくなれる頃かな

新竹

去年植ゑし垣根の竹もおひいでゝ
なびくもすゞし夕月のかげ

撫子　　照内せい子

から國におれる錦におとらじな
うすくこくさく常夏の花
もゝ草のしげき夏野にくれなゐの
色なつかしきなでしこの花

家事

婦人のサンダウ

神保院々長　鈴木篤三郎

さうですね、體育は富國强兵の基で、シカモ人の母はとなるべき婦人の近來よく運動するやうになつたのは誠に嬉しい、どうか盛んに身體の養ひをして、ソシテ將來に於ける國民の益々强い、豪い者をつくつて貰ひたい。私は御承知の通りの運動好き、無論サンダウもやれば、自轉車の遠乘りもやつて見る、夫れで、愈々身體は丈大になるばかり、イヤ老人の何時迄も壯健で居るのは憎らしいやうだが、世間から憎らしく思はれるだけ、夫れ丈働きが出來て、所謂富國の基となるのであれば、誰殿にしろ、運動は是非行つて欲しい。

まだ〳〵今の日本人には時間と云ふこと、日曜日……即ち一週間に一度の安息日を守られぬが、私しはさうじやない、時間も出來得る限りキチンと行りたいし、無論日曜日も守つて家内には子供をつけて日比谷公園、若しくは九段、上野公園へドシ〳〵と遊びに出してやります、私も日曜日は宅に居らない、假令宅に居つた所で、來訪者を遠慮なく追ひかへして居る、斯う云ふと餘り亂暴、禮義を知らぬ奴だとの嘲りがあるか知れないが、平生一生懸命に働く代り、一週間に一度の安息日は休みたい、そこへ今日は日曜日だからと、ノコ〳〵來訪するのは寧ろ無遠慮で、無禮で、他人の迷惑を迷惑とも感せぬ、非文明的行爲で、コンナ事の世間に多いのは喜ばしくない、アハヽヽ、例の大口で失敬しました。ソコデ

▲婦人とサンダウですね

モウ世間に大分行はれて、御承知でも厶いませうが搔い摘まんだ所をお話しすると、婦人も男子と少し

も異らず、ヤハリ同じ樣に行つて差支へありませんが、運動方法は多少男子と異にせねばならぬのです夫れは別に回數表をもお目に懸ける事にして、婦人は月經中、月經後も一週間經つた後でないと、却つて害がある。

▲妊娠以後のサンダウ

サンダウに據らず、何によらず、趣味と云ふものを感じて、之れは至極面白い、効能があると思へば誰でも、メチヤクチヤに行りますが、夫れに謂所藥變じて毒となるが如く、誠に危險千萬な事で、男子も其通りであるけれど、殊に婦人と云ふものには毎月の異狀がある、ソコデ、十分醫師の診斷を受けて行るのは差支へないが、うつかりすると取かへしの附かぬ事がある、夫れに月經以外の妊娠で、妊娠後四ケ月目まではいゝが、其後行るのは惡い、產んで後も八週間……五十六日を經過せぬ中に、やつて惡い事を承知していたゞきたい。

▲運動と婦人の今昔

隨分近來は婦人にも運動と云ふものが行はれ出して來て私は寔に嬉れしいと思つて居ると、或る一部にお轉婆ものを養成するとか、又は女角力でも稼業にしやしまいにと云ふ人もあるぢや、夫れは一を知つて二を知らぬ人の云ひ草に過ぎない、ソンナラ昔の婦人は、全く深窓にのみ閉ぢ籠り、重いものはお飯の箸より外に持たぬかと云へば、どうして〳〵さうでない、町家の婦人はイザ知らず、昔時の武家生立……云はば上流の婦人になると、一朝事あるに臨んでは、女ながらも一廉の働きをしようと云ふ用意の爲、薙刀の稽古位は必らずした、それで、今日の樣に『體育』と云ふ名目はなかつたけれど、云はず語らずの間に運動もすれば、又體育も自然に行はれて昔は今日の如き虛弱の婦人はなかつたのでございます、薙刀は格別の事、サンダウは對手も容らず、小さな座敷の中で、シカモ僅か一時間位やつてそれで體格を鍊え上げ、體質の改良が十分に出來るのであるから、我が日本婦人も自個の爲、國家將來の爲に

サンダウを盛に行つて行けば、益々日本は強い國となる事は受合である。

▲運動に就いて注意の個條

長たらしい講釈はいゝ加減にして、十七歳以上の婦人の爲、運動の回數表を拵へてお目に懸けやう、ソシテ使用するポンドは普通三ポンドとして、身體の强弱については醫師に診察もらふのがよい。

運動番號	最初の回數	回數増加割合	極度の回數	摘要
第一運動	十	三日に一回	百	此運動は肋膜・肺病等治後の人のみ行ふべきものなり極度の回數に達して後第二以下に移るべし
第二運動	三十	毎日三回	七十	
第三運動	二十	毎日一回	三十	
第四運動	七	隔日に一回	十二	
第五運動	七	五日に一回	十二	
第六運動	三	三日に一回	七	
第七運動	十	右と同じ	十八	
第八運動	七	右と同じ	十二	
第九運動	疲れる迄	疲れる迄	疲れる迄	
第十運動	七	隔日に一回	三十	此運動は膝頭を密接して行ふべし
第十一運動	七	二日に一回	十二	
第十二運動	七	右と同じ	十二	
第十三運動	二	五日に一回	十四	
第十四運動	七	三日に一回	十八	腹の皮の痛む迄行ふものなり
第十五運動	疲れる迄	疲れる迄	疲れる迄	
第十六運動	右と同じ	右と同じ	右と同じ	右と同じ
第十七運動	右と同じ	右と同じ	右と同じ	
第十八運動	右と同じ	右と同じ	右と同じ	此運動は過ぐれば下痢を來すべし若し下痢を來せば度を減ずべし
第十九運動	二	三日に一回	七	
第二十運動	疲れる迄	疲れる迄	疲れる迄	

マア之れを參考にすればよい、夫れから

▲運動についての注意

それに婦人のみでない、男も倶に注意すべき事で、先年私がサンダウ式の體育法について悉しく述べた書物が厶いますが、夫れは尚ほ讀んでいたゞく事として、運動に關する注意の事を一寸お話し仕ます

一、運動する時には衣物を脱ぎ、褌一つになつて行つて貰ひたい、但し寒い時は襯衣や股引をつけて居ても差支へない、婦人の裸體と云ふ事は難しい注文であるから、全然襯衣に股引をつけて居てよろしいのです。

二、運動をする時に上の空で行る事は不可ません、

夫れに運動ばかりでない、書物を讀む時でもさうだが、出來得る限り姿勢を正し、精神と云ふものは十分に込めて行らねば運動の効がない。

三、サンダウを行りますと、きつと食慾が進んで來るだ、併し食慾の進むに任せて腹一杯に食ふのは惡い、大食の四杯と云ふ所は、控え目の三杯位にして四回にするとも、必らず一度に大食するは禁物でございます。

四、運動をして居る中に動悸が強くなり、呼吸が切迫して來て、苦しくなつたと思つたらば、一寸休んで、呼吸の舊に復するを待つて後ちやるがよい。

五、唯行つても面白くないが、一週間に一度宛同じ時間を見て體量を計るがいゝ、其の都度いくら宛量の增して來るのは愉快なものだ。

六、運動をして最も愉快に感ずるのは朝である、無論運動は朝起きて直ぐ行るに限る、夫れで、前の日の疲勞さへスツカリ忘れてしまう事もある。

七、朝でも晩でもいゝが、食後だと一時間半、乃至は二時間を過ぎて行らねば惡い、又た運動をした後ならば、少なくとも三十分以上經過して食事を採らぬと、之れも非常の害になります。

八、サンダウを行つた後で冷水摩擦をしやうと思ふならば、先づ衣物を着て、直ぐに水で顏を洗ひ、夫れから徐々と濡手拭で兩腕、首の廻りを摩擦する位が一週間、次ぎが三週間目以上になつて、始めて肌を脫ぐと云ふ樣にするがよい、冷水摩擦をした事のない人が急にやるのは惡い。

九、運動の回數は多きに過ぎては行かず、又少なきに失してもよくない、夫れは回數法を必らず守る事である。

十、サンダウを行るとすれば、醫師の診察を受けて其の意見通りにして欲しい。

十一、鐵亞鈴の持つところに糸、もしは皮で卷いてあるが、婦人には痛痒を感ずるであらう、其の上を古手拭で卷いてやつてよろしい。

十二、病氣でもして、サンダウは一ケ月以上休んで居つても、別にボンドを減らすに及びません、只回數を減ずる丈けでよいのだ、併し息切れを感ずる場

合には止むを得ずボンドを減らすのだ。

十三、運動はゆる〳〵やるがよい。

十四、右左と交互にやるものは、右と左を行つて一回とするので、又た右左を交互にせず、一緒にやるものに元の構へに戻つて一回となり、又上げ下げをするのは、上げて、下げて、夫れを一回と云ふのでございます。

十五、運動は十分にやるのがよいので、定めの回數に戻つたからと云つても、時間内に猶ほ行り得べき餘裕があつたらば行つてもよろしい。

十六、使用するボンドは、人々の強弱に據つて相違があります、いきほひ最初は醫師について檢定を受けるがい丶。

マア〳〵此の位の所でムいませう、運動の方法は、從來サンダウを行り來たつたと云ふ人を見つけて始めは冗談半分に敎はるのも惡くありません。何にしろ今後の日本人は充分に身體を鍊えて、國民の母たる實を擧げねばなるまいと存じます。

季節料理の一二三

◎莢豌豆の乳煮　先づ莢を剝いて豆を水に入れると實の入ないのは浮上るから、夫を取捨て丶豆を鍋に移し水をタップリ入れ、十五分間程煮て煮汁が多過ぎれば、少し溢して其中に牛乳を入れ（豆三合に付乳一合位の割合）鹽と砂糖とを加へて味を附け、文火に掛けて五分間程煮た處で、饂飩粉を少し水で溶して、之を入れ能く攪混るのであります◎蕗のほろ和へ　蕗の葉をよく茹で、水で洗て、絞り上げ、爼板に置き、庖丁でよく〳〵叩き、白胡麻、甘味噌、砂糖、鹽を擂合はせて、右の蕗の葉を入れ、能く和へて小團子にして、皿に盛て出すのである、此を蕗のホロ和と云ふ◎鯡を澁くなく煮る法　鯡は米の精水（水に糠を加へてもよし）へ一晝夜程浸し、束藁で能々擦り洗ひ、淸水で二三度洗つて、多量の水と共に鍋へ入れて、中火にかけて茹、沸騰たら、更に二三分茹で其湯を棄て扨味淋を被ふ程入れて強火で煮沸し、醬油を少し注して火を弱くして徐々と煮、再び醬油を加へたら水溶の葛を入れて、葛のかへつた頃鍋を下して暫時して器へ盛るがよろしい◎比目魚の旨煮　比目魚は最も旨煮（上方では煮附、煎附と稱する）に適する、そして此が何より簡單で而も旨いが、甘味の強い魚であるから、能く水洗ひを爲し、大ならば適當に切り、小ならば其儘にして煮上げに懸る、此を煮るには、先づ酒鹽をよく煮立て丶、魚を投じて稍熟したる時、醬油と砂糖を加へ味を附けるのである、若し酒と砂糖を用ふるを厭ふ人があるならば味淋を用ゐるもよい、添へ物は蕗、獨活、絞り生姜等が最も適當する。

體質と營養

醫學士　久保杏林

溫の作用は大切なもので、身體の運動も之に由りて起り、神經の物に感じ、食物の消化するのも、溫より生ずる運動の力である、で溫の少くなつた時には人間の身體の運動は惡くなる、其證據は指先などの樣な細かい仕事をする處は、朝の寒い時などは凍えて細かいものは出來なくなる、然らば絕體的に寒は人體に不利益なるものであるかと云へば、決してさうではない、不用なる溫は棄てなければならぬものである、たとへば餘り暖くなると心に惰氣を生じ寒冷なる空氣は勉强心を促すのは、人の能く知る所である、

又溫の方は身體の働きを强くし、寒の方は働きを弱くするものである、故に誤つて何處か打ちたる時には、忽ち水を以て冷し、或は唾液などを採けて置くのは、寒くなると神經が鈍くなつて、痛みが少くなるからである、體中に溫を生ずると血が其の溫を帶びて、全身各處に環つて往きまして、而うして其溫が此の筋力の働き、即ち運動を起して來る、然し溫は汎く全身に運搬されて居る物故、全身一度に運動を起しさうなものであるが、而うでない、筋肉は神經に支配されて居るので、其神經が指圖をした部分だけに運動を起して來るのである、

身體中何れの部分にても、働けば働きし丈、其部分は減つて行くのである、例之ば手を動かすには、此筋を縮めて働かねばならぬ、而うすると、此筋の幾分か老敗して有害物が出來る、此害物は身體以外に排出して仕舞はなければならぬ、たとへば腕を一本動かしても、此點の處の筋から大層養分を奪はれる故に晝夜全身を動かす時には、諸所から澤山の有害物が出て、遂に養分が乏しくなる、故に滋養物を澤山食べる、其上に運動を能くすると、全身の筋骨が逞しく成つて來るが、運動のみして食物が缺けて居る時分には、運動といふものは極危險のものである

といふ事を知らなければならぬ、又いくら滋養物を口にしても、運動をしなければ少しも役に立たない、其食物は只腹中を往抜けになつて、口より入つて肛門に出づるのみの事で、更に筋骨を丈夫にする事の用には立たない、身體諸部を養ふ血といふ物は、肉眼で見ると、赤い液であるけれども、之を顯微鏡で見ると、其中には血球と云ふものがあつて、其中に黄色のものと白色の者とがある、其黄色なる物が澤山聚まると、赤い血が出來るのである、それで一を赤血球と名づけ、一を白血球と名ける、又此の白血球といふ物は、極僅少のもので、赤血球といふものは、血液の中に夥しくあるものである、而して此赤血球は多い丈け好いのである、又此赤血球といふもの丶中に血色素と云ふものがあつてそれが酸素を吸收して赤色を爲すのである、又血液の中に含んで居る酸素は無論血液の循環に從つて各處に分配して行くから漸う身體の末端に行くに從つて、養氣が乏しくなる譯である、それから



全身を循環した血液は、殆んど酸素が少くなつて仕舞ふから、血の色が變じて青黒くなる、其變色した血の通る道を靜脈と云ふ、其道路を經て、變色した血液を心臟へ送り返す、食物の中より取りたる滋養物は、格別途中で費さぬ故に、流動形の滋養分は含んだまゝで、心臟へ戻つて來ますから、酸素の減じた血液は、肺臟に往つて洗濯をして、有害物は肺臟より外に排出して仕舞ひ、而して更に新らしい酸素を吸込んで、再び循環させるのである、此血液も自分で全身を往復するものではない、別に運動を授ける道具がなければならん、其道具は所謂心臟である血液の流通する道を血管又は脈管といひ、此脈管の中には、血脈管、水脈管の二種あつて、血脈管とは血液の通る道、水脈管とは無色の水の通る所である、それから又血液の循環と云うて、輪を環る如く身體諸部を環つて本の所へ歸つて來るのである、即ち其原本とする所は心臟であつて、血液は心臟から出て、身體諸部の、毛細管といふ毛のやうな細い管に至つて後に、復心に戻る、

又血脈管には、動脈と靜脈との二種あつて、動脈とは脈所を手でおさへると鼓動して來る、それ故動脈といふので、又靜脈と云ふのは、動脈に對して云ふ言葉で、靜かなる脈といふ事である、

それから動脈と靜脈との間に毛細管があつて、其所に至つた血の中から營養になるものは吸收され、不用なる部分は、靜脈の方へ送り返さるゝのである、

又動脈と云ふものは、心臟から力一ぱいに血液を送り出す脈である、それ故もし此動脈に疵などが出來た時には、血液が一時に迸り出づるのである、之は即ち心臟から出た所の血液が、全速力を以て毛細管へ達する爲進行しつゝある證據である、それ故動脈と云ふものは、餘程大切に保護されてあるもので、又其質も至つて堅固に出來て居る、

それから靜脈の方は、血液の進行が遲い故に、多少怪我などをしても直に出血が止まる、

又心臟といふものは、袋のやうな形狀をして居るの

であつて、これを收縮すると　其中に含んで居る血を送る管即ち、動脈管を走つて毛細管の所へ來る又心臓が膨脹すると云ふと、還る管即ち靜脈管の血は、心臓の方へ吸込まるゝに依つて、毛細管の中の血液は、順に靜脈の方へ入込むのである、斯くして血液は絶えず循環するのである、

それから又水脈管といふものがあつて、此脈管の働きは、動脈から出た血液が靜脈に入る際に、こぼれた物を吸收して、不潔なものや汚物は、皆此脈管の中の水濾器械にて濾し、清淨なるものにして、而して血液が幾回も循環して、餘り濃厚に成り過ぎた塲合に、此淡い水樣の液を左の肩の所の靜脈の口から注入するのである、

それから血液の循環する器械の中に、小循環と云ふものがあつて、之は不潔の血を肺臓に送つて、身體の害になる所の炭酸瓦斯を捨てるのである、而して養ひになる酸素を肺臓から吸收して歸のである、

つまり大循環と小循環との差は、大循環は養に富んだ善き血を身體中に運搬して害になるものを、心臓まで持歸る動作である、又小循環の働きは、不潔なる惡い血液を肺臓に持行きて、清潔なるものにして持歸るといふ働きである、

それから又肺臓から血の方へ吸込む養分とは、酸素とて血中にあつて大害をなすものは、即ち炭酸瓦斯である、試に暫時息を止めて居ると忽ち苦しくなつて堪へられなくなる、是は養分の減少したのよりも寧ろ有害物の血中に溜つた故である、若し病の爲に氣道が塞るか、又食道に餠團子抔の嵌る時は、炭酸の毒に中りて絶息することがある、其時は速に空氣の通路を妨ぐものを取除くことが肝要である、

肺臓で呼吸する旁ら、喉に笛をつけて吐く息で音聲を放ち、咽口舌唇等の助けによつて言語をなし　又唱歌を謠ふことが出來る、併し此働きを爲すにも、咽から口の邊の諸筋肉に充分營養が行廻はらねば其處の運動が出來ない、

血液は其中に瓦斯體と流動體との養分を含んで居る

もので、其基は日常の飲食物に採るのである、其飲食物を採るにも亦口や咽や食道及び胃腸の運動で食物を食ひ、且つ之を消化することが出來るのである、若し病氣の爲に衰弱るか、又は大出血などありたる時は、血液の養分俄に減ずる故に、言語の力亡せ手足も慄へて慥かな運動は出來なくなるのである、

乳の話

農學士　牧　忍

其六　山羊の乳に就て

山羊の乳は甚だ牛乳に類似して居ます、例へば乾酪素の性質に就ては、山羊の乳と牛乳とは、殆ど差がない位ゐです、其他の性質もよく類似してゐますが、只脂肪の分量が牛乳に比すれば多いのです、乳糖と鹽類とは、殆ど兩者同じです、一般に云へば乾酪素の量も、牛乳より多いのです、此外山羊の乳の特色を述べれば、色が稍や黄色を帯むで居ること、固有の香を有することゝです、其香は山羊の體より發する揮發物質を吸收するからです、全體にいへば山羊の乳成分及び其量は丁度牛乳人乳と同樣に、分泌期の前後種類、營養等の關係により必ずしも一定してはゐませぬ、只分娩後に乳の性質の一變することが牛乳に比して餘程早いのです、即ち、初乳より正當の乳に變ずる事が、牛乳に比して早いのです、普通に山羊の乳は最も營養分に富むものと考へられて、病後衰弱の人、老人には特に適當したる滋養分と認られてゐますから、一種の惡臭あるにも係らず其價牛乳よりも高いのです、然るに實際分析して見ると、營養上の價値ある成分は、牛其他の家畜の乳に比して、餘り差がありませぬ、

●託兒所設置計畫　東京市は近來頻りに社會教育の方面に力を盡しつゝあるが、今回更に獨逸に於て行はれある勞働者の小供を預りて、終日後顧の憂なからしむる託兒所を設け、且之と聯絡する特殊の幼稚園小學校を併置するの計畫をなせり、其結果の如何によりて、既設の特殊小學校にも、附屬託兒所を設くる筈なり、

石黒男爵生活談

△一家生計の帳面　一家生計の帳面と云ふものを出して公にして見たならば餘程面白くもあり何か爲になる事もあらうと思ふ役人などはシミツタンなものだが如何金錢を使用して居るか生計の帳面を出して見ると面白い

△過去三十年の活計帳　私は幸ひに妻が緻密で過去三十何年間の生計の統計がチヤンと書き付けてあるから此間も古い帳面を出さして新舊の帳面を照し合はして見た所が餘程面白い事を見出した

△事々物々二倍、高價　何でも彼でも二倍から二倍半まで物の値段が高くなつて居る其所で何か安くなつて居るものがないかと段々捜して往くとある／＼著しく安くなつて居るものがある殆んど昔の半額より未安いものがある何だらう解るまい

△安いものはホヤと石油　夫れは洋燈のホヤと石油だ石油は其頃米國の許りを使つて居たが越後で出る樣になつて半額になつたこんな事を調べて見ると何となしに趣味があつて面白い其所で此石油の一件から思ひ付いて臺所のもの何を買つても買つた日と値段を書かして置く保存期限と値段の高下を知るには妙だ

△月給は兎ても殘せぬ　成程役人はシミツタレな筈だ古い帳面を調べて見ると私の樣なシロンボーでも明治初年からずうーツと月給は遺せない陸軍では部下もある事だし慶事相救はなけりやならん上に八年十年の戰爭で怪我した者などが皆私の所へ來るから如何しても月給は殘せなかつた

△一身保護の金は殘す　其上に儉約して立派な馬などを買ふのだから月給は皆使つて仕舞つた如何しても月給を殘す譯には往かない夫れぢや何も殘つて居ないかと云ふに幸ひに一身の保護するだけのものは殘して居る

△勤儉貯蓄の必要　月給では殘らないで金錢を持つて居る夫れぢや泥棒でも爲たかと云ふにさうぢやない此處に至つて益々勤儉貯蓄の必要と云ふ事を切に感ずる夫れは斯う云ふ事がある

△最初の著述化學訓蒙　私が文部で講釋を爲て居る内に化學訓蒙と云ふものを書いた其時分の事であるから大層賣れて私が文部を飛び出す時に文部では私の月給を悉皆拂つた上に八十圓儲かつた夫れで私は此本の增刊權を持つて文部を出て陸軍に這入つた

△六十餘部の著述家　陸軍の役人となつてから毎晩一時頃迄蚊帳の中に這入つて是れを增補して賣り出した所が非常に賣れた夫れから面白くなつて外科書を始め六十何部と云ふ著述を爲て是れでも明治十七八年頃は有名な著述家であつたよ中には損を爲たのもあるが大抵は儲かつた此勤務外で儲けた金錢を貯蓄して置いた奴が積り積つて今日の相當な金高になつて居るから浪人しても大法螺吹いて居られるのは全く此勤儉貯蓄のお陰に在る

作法と習慣

日々の習慣

竹街山人

端正にして高潔なる生涯を送り、萬に秩序正しく、且つ直進的なるを要する、之は如何にして爲し得らるゝかと云へば、只其習慣を作ることに依つて爲さるゝのである、

習慣を作るは、恰も獸畜を飼養し、草木を培養するが如きものである、常に注意して居れば、別に至難の業でもない、何事にも成功せんと欲せば、注意が必要であるが、習慣を作るにも注意は必要である、注意さへすれば、之を作るに成功は確かなものであるが、之に反して不熱心ならば、出來ることも出來なくなるは云ふまでもない事である、

右の方法、即ち草木を培養する如く、間斷なき熱心と注意とを以てすれば、如何なる嗜好にも（酒にも煙草にも）性癖にも打勝つ事が出來る、之をするに最初は中々つらいに相違ないが、撓まず屈せず忍耐して居るうちには、反つて自分が惡癖に打勝つた事が愉快になる、從つて益々嗜好性癖を改善する事が出來るやうになるものである、故に其最初眞につらいと思うた事も規則正しく行つて見れば、終には其苦痛が減ずる所か、反つて趣味を感ずるものである、之は常に記臆すべき一條であらうと思ふ、

子供に金錢を與へ、而して之を經濟的に使用することを教へて置けば、其子供は後年に至つて、資本を運轉するに妙を得るものである、之は兩親殊に母親の心得置くべきことである、其使用法も母親が專任になつて教へなければならぬ、例へば若干の金錢を與へ、其内或部分を以て菓子を求めるもよろし、其好に依つて繪草紙を買ふもよろし、兎に角與へた小遣で愉快を取らせることは必要である、又其或部分を以て學校用品を購はせなければならん、之は紙墨筆等を濫に使ひ棄てるものでないといふ事を自然に教へる、其殘りの或部分を割いて、慈善事業に寄附

をさせ、公共心を養ふも妙である、而して殘りの全額を貯蓄させなければならない、然し金錢を與へるに無闇に與へるよりは、日々規則正しく、極小さな仕事を授け、其仕事の勞銀として、即ち其小さな勞働の報酬として小遣を取らせたならば、至極効驗のあることゝ信ずる、兎に角金錢の勘定も知らない子供は、長じた後でも眞個の錢勘定は出來ないといふ事は事實である、

若し不幸にして、自分が幼少の時、金錢を經濟的に使用することを教へられなかつた場合には、常に金錢使用法に注意して、有益と認めたる時は、吝氣なく支出し、無駄錢を費さない樣に絶えず心掛れば、終には其習慣を作ることが出來るのである、

人は貧富に係らず、他人より物を借りるものではない（商業上或は勉學上は此限りでない）自分の金で買ふことの出來ないものは、不自由でも、おして暮して居るのがいゝ、さうすれば却つて其不自由を感ずる毎に奮發心が起るものである、之は全く習慣に依るもので、此習慣を持たないものは、他人に迷惑を掛けるばかりでなく、自分で不幸を貯へる樣なものである、殊に一時の慾望を滿足せしめんが爲に借金をする如き事なきやう習慣をつけねばならぬ、

勤勉の習慣は決心によつて容易に得らるゝものである、此習慣を作るに、決心の他に何物も必要でない、故に人として、此習慣を持たないものは申譯のない筈である、富たるも貧きも、世に生れたからは、勤勉の習慣は必要である、實にこれなくては人間の義務を盡す事が出來ないと云うてもよい位である、

朝早く起きるのは學ぶべき習慣である、實に早起の習慣は人の懶惰に流るゝことを禦ぎ、事務に勵ましめ、一日を有益に過さしむる者である、のみならず健康に害ある夜ふかしの癖を除去するものである、

事務上の習慣

一の定職を持たぬ人と雖も、事業上の事柄には、恰も一身を捧げて、其業務に從事するもの丶如く、確實に而も敏捷に之を處理すべきである、

苟も己の業務に多少の關係あるものは、之を等閑にしないやうな習慣を造り、深く關連せるものを取逃さゞる樣に注意すべきである、若し之を等閑にすれば何時かは失敗を招くべき、又煩累を來すは勿論の事である、

金錢の價値を知らなければならない、富者は猶更此一條を心に留めて置く必要がある、

金錢を騙取されながら、自分は寬大であるなど、澄し込んで居るは、實に至鈍の極である、寬大どころか却つて瞞手は影で舌を出し、益々罪惡の進行を計るものである、若しそれ吾人は考を吾人の周圍に集れる貧者に及ぼさば、彼等は其額に玉なす汗を以て日々汲々たるも、尙妻を病床に泣かしむるを知るであらう、

年若き間は、經驗に富める年長者を師とし、常に其談話を熱聽すべきである、若し老朽の説取るに足らずとなし、之に傾聽せざる靑年には、後年必ず其愚を悔る時が來る、實に吾人の出會へる最も經驗ある人は、吾人に取つては此上なき事務上の良敎師である、

成功者の習慣を學び、之を實行せんと勉むるは、習慣を作る方法中第一に位するものである、其習慣中に必ず共通に含るゝものがある、即ち之等は、注意敏捷、節約、整齊、決斷、勉强、直白、廉潔、靜肅、仁愛等である、

事務はすべて燥急に取扱つてはならぬ、如何なる細事も之を等閑にせず、而も緩慢に陷らざるやう注意すべきである、事務の延滞及び不注意は失敗の基となる、

事務上の通信は、意を留めて取扱ふもので、之には必ず直に返答をしなければならぬ、例へ自分に直接利害を及ぼさない書信でも、直に返答をして置くのが肝要である、有名なる成功者は必ず此規則を固守した、之を守らない少年は立身の途を失ひ、之を怠る富者は、其富と愉快に生別をせざる可らざるの止むを得ざるに至る、

東京美術學校長正木直彦序文
同校教授島田佳矣
同校卒業生野口俊尾 共著

女子技藝 編物模樣圖案

全五册石版極彩色大和綴美本
◉松の巻金四拾錢◉櫻の巻◉藤の巻各金五拾錢◉菊の巻◉梅の巻各五十五錢
定價 郵税各貳錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて諸模樣を編み或は刺繡するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなれば女子技藝に於て教育上參考上必要携書なり

本書の著ある所以は從來此類の歐米各國に於て盛に出版されしものあれども其意匠圖案の様式風趣は直ちに我邦工藝の風致に應適せざるのみならず價格の點に於ても不廉にして一般に普及する能はざるを以てなり

本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を改善せし者にして我邦に於ける編物圖案の嚆矢唯一の書なり

發兌元 東京京橋區築地二丁目 **國光社**


御用諸學校
體操器械
S.A TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
NO 5. Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
S.A
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八二〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ
調進可仕候
御用體操器械
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
體育用品
484
確實製造販賣
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱
二號同
三號同
四號同
同用テーブル 上等
拾参圓四拾錢並等一臺十二圓
テニス用ラケット一組四本
一號大人用 一二、五〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同 四、七〇〇
婦人用（小學用） 七〇〇圓
同二號（一號） 六〇〇圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾参圓
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
七號 五圓貳拾五錢
テニス組一張一、八八〇ヨリ三、一一五
〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

總て業務に關する書類は規矩整然と之を一函中に納め、證書及び領收書等を永久に保存する習慣は、後に思ひも寄らざる幸福を惹起すことがある、此容易に得らるゝ習慣を持たなんが爲に、厚く其身を蔽へる富貴繁榮を剝取られる者さへある、又領收書を保存して居なかつた爲、再度拂ひをしなければならない塲合が起つてくるかも知れない、故に萬事に注意深くするといふ習慣は、事務家には大に必要のことである、

自身の認めたる書信でも、必要の事項は寫し取り、保存して置く方が安全の策である、

一時の苦痛を忍んで節約をなし、貯金をするは、專ら奬勵すべき習慣である、之は先づ百萬圓にしろ、一錢にしろ、自分で使つてもいゝといふ金額を、悉皆使はぬ前に幾分かを餘すに始まるのである、之をせずして後に噬臍の悔を爲したるものは、世に其例は乏しくない、

古小袖盥に合歡の花が散る

小兒の賞罰

賞罰に就きての注意

蘭竹女史

◎賞罰は必ず自己の心の平和なるや否やを考へ、然る後に之を行ふべし、即ち己の心激動して穩かならざる時には行ふべからず、ダンテといへる人の云ひし詞に『怒る人の心は塵多き霞みたる沼池に立てるが如し、何も見る事能はず』と、實に然り、己の心怒に滿ちたる時は、罰すべからざるに罰し、又喜ばしきことある時は、罰すべきをも許し、賞すべからざるを賞することあるに至らん、故に己の心平和なるか否を試みたる後靜かに諭すべし、

◎賞罰すべき事柄の原因を取調ぶる事必要なり、一時の不注意より生ぜしものにして、故意に出でたる惡事は、其過を再びせざる樣に向後を誡むれば足れりと雖も、もし其惡事故意に出でたるものなる時は十分に之を懲罰して、再びそれに類似したる事も

せしめざるやうにすべし、又善事にても、自己の名譽の爲もしくは自らの利益の爲にせしことと變じて、善き結果を生ぜし如き場合は、賞するに足らず、唯自己を忘れて人の爲を思ひ、人に善事をなしたる場合、即ち己の欲する事を人に爲したる場合は、厚く之を賞すべし、

◎賞罰は父母兄姉とも一定すべし、父の叱責を母なだめ、或は兄姉の戒むる傍より、母の小言をいふ如きは、子女をしていよ〳〵傲慢にならしむるに至らん、又賞罰する事柄も一定するを要す、即ち父の制することを母は許し、學校にて禁ぜしことを、家庭にて默許する如きは、大に子女に迷ひの心を生ぜしめて、歸する所を知らざらしめん、

◎不公平にならぬやうにすべし、即ち長子ならば之丈は許すとか、末子なれば不憫なりとて罰し得ぬと云ふ風あつては、兄弟の間に和合を缺く原因を生じて宜しからず、獨逸の先帝ウヰリアム四世御在世の頃、公務に御忙がしかりし時、隣室に於て皇太子殿下（今の皇帝フレデリック二世）及び他の皇子方互に喧騷をなして用を辨じかぬる程なりし故に、父君叱責し給ひしに、皇太子殿下はなほ止せたまはで、吾は皇太子なれば差支なしと、猶騷しき御擧動ありしを、父帝は直に其室に至らせ給ひ、仰せらるゝやう、吾は皇帝の權を以て皇太子を成敗するとて、御成敗あらせられたり、實に正しき御育て方と云ふべし、又英國の故女皇ヴヰクトリヤ陛下は、皇女の方々の、陛下の詞遣ひにならひ、侍醫の方を呼捨にするを聞召して、其長者に對するの道にあらざる事を敎へ給ひしに、幼少の習ひとして、又前の如く呼捨にせしを聞し召されて、わざ〳〵其侍醫を陛下の目前にお召になり、改めて尊稱をつけて呼かへさせ、又先に敬意なかりしことを謝せしめたりとの話を聞けり、實に美事にあらずや、至尊の御身として、尚且斯の如く、幼き御方に敎へ率るに、如何で我等の賞罰をゆるすべき、

◎賞罰は屢々なすべからず、即ち小言をたび〳〵言

へば其効よく、又何事も度々なす時は其物に慣れて感ずる様に、賞罰も度々なす時は、嬉しともかなしとも思はぬに至らん、例へば小兒を敎育するに賞罰の必要なるは、病を治するに藥を用うるに同じ、其適宜を得れば著しき効を奏し、其度を過くせば害毒を殘すに至らん、故に屢々之を用ひて過すときは、効なくして害多し、心すべき事なり、

賞罰の方法

◎顏色を和らげ、音聲を用ひて賞揚し、又叱責する事最も容易にして、誰人も度々なす事なれど、其効力薄し、併し少し年長じ物の理非を辨へる程になれば、最も効力ありて、而も涙を以て諭すことは、永遠に忘れざるが如し、これ世に云ふ柔克く剛に勝つの諺に適合せる事ならん、



◎物品を用ひて賞罰する事、これも最も行はれ易き事にして、幼きは菓子果物より、稍長じて紙筆書籍若くは金錢を與へ、一時又は永く其賞を殘す、一方より見れば宜しきやうなれど、一方より見れば鄙吝貪慾の念を生じ易し、故に其得たる物品を、又良く用ふる事になれしめざる可らず、即ち其得たるものを愍れむべき者に與へ、又は善事に喜捨することに馴れしむべし、

かくする時は大に其効ありて、善事を生じ、其の心情をいよ〳〵發達せしむるを得ん、併し罰する爲に、與へたるものを取かへし、又食品を他兒に與へて、其罰せられたる兒にのみ與へざる如きは宜しからず、又食すべき時に食物を禁するが如き、なし得べからざることを試みなさしむべからず、

◎家族の者より度外視せらるゝ事、之は隨分骨の折れる罰則なれども、幼兒には、最効多し、即ち愛する母もしくは姉にも、見捨てられたるが如く、別室に退けられ、又は何を話しかけても、何を問ても、一言の答を與へずんば、それ程つらい事はなき樣になり、此場合には先にも述べし如く、一家協力同心して實施せざれは其効なし、母が一切かまはずとも祖母の處へ行くとか、又姉に愛せらるゝ時は、却つて其効なきのみならず、害を生ずれば、誰も一切構はぬがよし、かくする時は、甚しく後悔するものなり、又外出を禁じ、他の兒童との交際を許さゞるも、亦効あり、活氣に充ちたる兒童に、家内にのみあれ、他人と交はるべからずと云はゞ、如何に苦しき事ならずや、

◎體罰即ち炙をなすとか、又は打つとか、或は縛るなど云ふ如き、即ち蠻風の罰は一切之を廢する方宜し、其事たるや虚喝に過ぎずして、實際に於て十分なし得べき事ならねば、其効も從つて又薄し、

小兒の間食と胃腸病

春より夏へかけ追々、日永となり、大人すら三食の外に午後三時頃には茶菓子を欲く思ふにより、小兒は尚更食慾進むべしとて、母親の慈愛心より小兒に間食をなさしむる向、上中流の社會に多く、從つて上中流社會の小兒等には、胃腸の消化不良及び加答兒病多く小兒科醫の診察を乞ふもの殆ど引きも切らざる有樣なるが、此病を完全に治療せんには、多量の飲食物を與ふる事を嚴禁し、間食の惡習を矯正し、胃腸マッサージーを施し、且つ進んで海濱又は山野に伴ひて、全身強壯法を行はしめ、復常に鐵劑肉汁を與へて、約二年間の榮養を加ふる必要あり、故に斯る病に罹らざるうち、間食を慎ましむるやう訓へ慣はす事肝要なるべし、



七夕

酸漿女史

木立物古りて、晝なほ暗き森林より、高塔伽藍幾棟となく聳え、往來ふ人は、圓顱法衣の沙門にあらねば、樒閼迦桶をたづさふる都人士にて、ほの暗き木蔭より蚊虻の出でゝ、法衣にすがり生血を乞ふも、佛戒を守りてか、殺害を加ふるものはなきばかり、いと蕭條たりし東叡山は、三十九年のむかし、幕府の瓦解せしと共に、忽ちにして陰雨腥風すさまじき修羅の巷と化して、三百年の泰平に安眠をむさぼりし都人士の夢を破り、物換り星移りて、今は幾多の公館をつらね、四季の詠に遊客を娯しましむる昔忍が岡とはなりぬ、大佛傍の木かくれに、彈丸雨注の名殘をとめし黒門さへ、今は何れにか影をかくしたりき、

そも此岡の東北なる根岸の里といふは、さびしき秋の夜に、草間にすだく虫の音を聽き、長閑なる春の日のあかぬ眺めに日を暮す、騷客雅人等に稱へられたる、風雅の勝地なりけるが、忍ケ岡の變遷につれ、世の開化に伴はれて、昔ゆかしき鶯溪も、無慘や今は鐵路を横切られ、汽笛の響に百千鳥の囀る聲を沒し、車輪大地を動かして、宛然龍蛇の暴るゝが如し、惜しいかな名にしおふ鶯も溪間を去り、騷客も杖を曳かずなつて、今はたゞ風雅の名殘を、中根岸邊の蓬莊たる數戸の草の屋と、昔をしのぶ御行の松とにとゞめ

ぬ、此松は幾歳の齡を重ねしや、程長く垂れたる枝は年を經てや朽ちけん、異木の皮につゝまれて、命數を繋ぎぬれど、老いて氣高く見ゆる松かな、樹下には不動尊の小堂と、二三基の石碑とあり、あたりには一帶の小川潺湲と流れて涼風を送りけるが、何處も鄙は、舊套を脫し難ければにや、幾多の里童の、七夕祭を祝ぎて乎、各晴衣を着て、河の畔に集ひ來けるが、軈て三々五々に別れて、袖をからげ、裳をたぐりて、小魚を掬ひ、或は小舟を浮べ、衣服を水涯に脫棄てゝ水を浴び、日影の移り去るにも心づかで、餘念なくあそびけるが、そが中に五歳ばかりの、扮裝こそ粗末なれど、いと可愛らしき女兒が、附木製の小舟を持ちけるを、一個の惡戯兒が、罵詈嘲弄しつゝ、棒にて打拂ひ、そを河水に流しければ、件の幼女は遽しく取らんとして、したゝかに衣服を穢せしかば、いと悲しげに、濡れそぼちたる姿のまゝ、程近き柴の破れ戶をくゞり、やがて我家に入るとひとしく、ワーッと泣出し『母樣、他所の兄さんが、よしを父なしッ子と仰つた』、

あどけなき口よりして、河へ流されし小舟のこと、晴衣の濡れしことゞもをかこたで、父なきことを幾そたび繰かへすことのいぢらしさよ、母なる人は脊戶口に手桶を置きてかけ來り『さういはれても、よしチヤンには父樣があるからよいではないか、オヤ〳〵お衣物を大層濡らしたね、お草履も、アラすッかり濡れて、サアお流しの方へお出で』、といひつゝその子をかゝへたる淸瘦の婦人は、齡三十前後と思ぼしく、扮裝こそ見すぼらしけれど、昔ゆかしき品格のおのづから備はりて優にやさしく、見る人をして、如何なる人の成の果かと、うたゝ思はしむる風情なり、

『松枝よい所へおいでだ、あの竿にあるよしの着物を取つておくれ』、『オヤよしちやんはどうして』、『ま

アいゝから早くとさ』、『河へでもおッ落たんですか』、『さうだらうよ』、古びたる網代組の椽側を危な氣に歩み往きて、件の衣服を持來りて、差出しつゝ會釋する、十二歳の少女は、其容貌の婦人に似たるは、まさしく姉娘にてもあるべし、『お前今日は』、『今日は御隱居樣のお使で岡野へ參りましたから、鳥渡歸り掛によつたんです』、『さうー』といらへつ、手早に濡衣をとりすてゝ、いか樣ながら洗衣を着せければ、幼女は漸く啜泣をやめ、慈母の膝に腰うちかけて、ふりむきつゝ、訝しく嬉しき態して、楓のやうなる手を母の懷にさし込みて、『よしの父樣は何處に？』、『もうお忘れかへ、何時ぞや教へてあげたのに、あの父樣は、よしちやんの赤子の時、遠いお國へ被入つて、今にお歸りだらうよ、その時は、紅のお衣を澤山お土產に』と、いひさして、幼女の首に頬を摺りあて、さも愛らしげに抱きしめしが、渠は不審顏にて母に向ひ、『でも母樣、淺草のお伯父ちやんが、此間おまへ父樣がないから私がなつてあげやうッて、いゝ伯父ちやん、よしにお人形だの、お菓子だの、澤山下さつて』、母は默念としてありけるが、姉の松枝はむきになり、『いやよよしちやん、私はあの伯父さんは大嫌ひさ』『ウンいゝ伯父ちやんが』『イヽエ、チー母樣、父樣がお出立の時、あのそら』『シッお前、もう日が暮れるよ、早くお歸り、餘計なことを云はないで、御奉公を大切に勤めておくれ、お前が勤めてお呉れだから、母樣たちも、どんなに助かるかしれません、サアヽヽ早うお歸り』

と急きたてられて、小女はさゝやかなる包をかゝへ、後に心は殘れども、母の敎へを身に收め、夕陽に向ひて主家をさし、櫻木町に歸りゆく、あと見送りつゝ太息つき、幼心に父の事を、と獨ごちて、氣はすゝまねど蚊の出ぬうちにと、急はしく夕飯の支度をなしぬ、斜陽全く上野山の林中に沈み、塒に急ぐ群鴉の聲かしましく聞ゆれど、天は薄墨そゝぎし如く、暮行く空は秋ならねど、物淋しく見ゆる頃、件の婦

人は幼兒を寢させ、蚊遣火を迭らんとて、手に澁團扇を取りて、靜けく扇げと、調子も揃はぬ勝にて、時々の嘆息に、胸の有邪無邪も遣るや遣らずや、時に脊戸口より足音すと思へば、早聲かけて『お靜さん、何だ子眞暗がりでサ、今日は年に一度の七夕さんだ、お燈明でも點よ、お星さんにあやかつて、い丶渡りがつくかも知れねえ、それはそうと、今日は千住の孫が、手前造への團子を持つて來て呉れたから、よしちやんに持つて來た、さア〳〵』と差出せば『いつも御深切に有難うぞんじます、よしも嘸よろこびませう、目がさめたら早速いたゞかせます、まアお上りなさい、燈明をつけますから』

といひつゝ立ちて、流し元より手ランプを持來り、點火して踏臺の上にさし置きけるに、幽微なる燈火は主婦の半面を照らしけるが、夜目遠目傘の内には、醜も美の形像を映し出すためしもあれば、美とは幽微の影を云ふ乎、雲かくれにし月には眞美の詠あり、籬にしのぶ殘菊のゆかしき姿は、春の妖艶なる花の色香にもまさるふしも見ゆるとかや、實におぼろげなる孤燈の下にうつれる渠が面影は、美の觀念に乏しき田舍の老婦人の目にも、審美の視覺を與へしか、老婦は凹みたる眼にて、しばし凝視り、疎なる齒をあらはして『お靜さん、眞にお前さんは感心だよ、まだ三十にもなるかならないに此姿でサ、此の夏の暑さにも、あくせく稼ぎなさる、これもみんな子供たちの爲だらう、眞に感心だよ、何時も自家の嫁と譽めて居るのサ』『どういたしまして不束な私、お譽めなぞに』『い丶え、私はお世辭なんぞ大きらひだ、だがねお靜さん、お前さんの辛抱も子供が可愛いからだらう』『さうでございますとも』

『さうだらう、さうだらう、それなら子、お靜さん、物は相談づくだ、私は此間から賴まれてるが子、そらお松ツサンの勸めてる御隱居樣は、去年の暮お偕老をなくしなすツたから、そこでお若い御夫婦は、どんなに困つて居なさるか、昨日上つたら、松の母は、あアやつて子供を相手にして居るが、何うだらう、

私の家へ來てくれまいか、隱居の世話はほんの朝晩、床の上下し位でよいから、母代りになつて、私だちを助けてくれまいか、さうすれば私も姉妹のない身だから、松も其妹も能く育てゝ、眞の妹のやうにしてやりたい、彼人なら氣も知れて居るから、眞にいゝがナ、と被仰つた、ナーお靜さん、どうだへ、御隱居様も望んでいなさるには違ひない、私がちよつと上つたら、それとはなしに、お咄があつて、さうして此節はお松ツアンを可愛がる事ア非常だよ、實の孫さんだつてアゝは出來やしない、所へおまへさんが入つて見てごらん、そりや彼所では、どんなに喜びなさるか、お前さんたちも仕合せだ、此所らが實に行きどころだ、さうじやないか、

かゝる多辯と、事の意外なるとに、呆然としたるお靜は、霎時言なく、燈火に背きて、老婆の顏をジッと見つめ居しが、渠は言をつきて、お靜さん、身を捨てる山はないが、子供の爲にや、親は身を捨るがナ、お前さんなんぞは、自分も幸になる事だよ』お靜はハッと身を顫はし、外眦に一種の感をたゝへけるが、直に元の姿容にかへり『有難うぞんじます、何時もながらあなたの御親切 決して忘れはいたしません、けれど、自分で自分の身が自由にならない私、それ〳〵へも相談いたさなければ、御返事も申兼ます、とまづ當座を逃れる言葉『オヤ〳〵お前さんは三十にもおなりで、自分が自分の自由にならないと、アハ、、いゝじやないか、そんなにおツくうにする事はない、此家だつて彼家の物だし、すれば唯所が替るまでのことだ、眞にお前さんは當時の人に似合はない、何んて固ッ苦しいだらう、寶の山に登りながら、徒手で歸るとは、マーお前さんなんぞの事を云ふのだらう』

嘲笑と、老の短慮にまかせて、他の心も察せず、我が述べんとする所をのみ述ぶるうたてさよ、お靜はそれを云はんとする折、表口より會釋もなく、溷鬆わげて『千住の姉さんが歸るから、早く大急ぎでお出で』

と云ひ捨てゝ立歸りけるが、老婆は止むを得ぬといふ顔をして、『明日來るから、よく考へて置いてもらひませう』

お靜は手ランプを持ちたるまゝ門口まで見送り、ふと空を打眺むれば、何時しか銀河流をとゞめ、星の光も絶え〴〵に、雨さへ降らん光景なりければ、いとゞ悲しく立歸り、ほの暗き孤燈の下に愁然と坐を占めて、傍にありし手箱引よせ、一通の封書取り出でけるが、封筒の所に塗抹して定かに見えねど、渠はいとなつかしき態にて、文を膝の上に置き、左手をあて、右手にてそが上膊をしめ、はふり落つる涙を拭はんともせで、霎時さしうつむきてぞありけるが、太息つきて面をあげ、鬢のほつれを左右にかきなで、

あゝ貧は諸道の妨ときゝけるが、我身にとりては、いやます苦悶なりけり、あゝ遣瀬なき此身の浮沈、世に浮ばんとすれば、心は奈落の淵に沈まんとす、思はぬ人の片思ひ、他し人に心をよするにくさよ、とはいへ重なる恩義、これも貧ゆゑ、今更思へば、我夫の落魄も、もしやそれかと察しては、怨めしさもいやますものを、貧と義理とに責められて、此身の立てし澪標も、思はぬ淵瀬にかゝりぬ、それとも知らで幼氣に、父を慕ふ餘り、他し人を慕ふ心の不憫さよ、

と打かこちつゝ、無邪氣に眠る幼子をすかして見て、お前さんの父樣は、浦鹽にお出でなさるとばかり、はか〴〵しいお便りもないが、千里へだゝつても、これほどの思ひが通はぬ事もあるまいに、

幽かにひゞく泣く音につれて、きえゆく燈火の影うすらみ、田畔の蛙の鳴く音さへ、いと蕭然になりけるが、『母樣、怖い彼兒が』晝の惡戯におびへしか、此の聲の鼓膜を撲ちて、ふしたる母は我にかへり、『ヲヽ、可愛さうに、蚊がくッたらう』、といひつゝ手許の團扇をとりて、幼女の身により添へば、渠はちゝよと發虫の、身の隱家と我母の、やぶれ衣に包まれて、乳房にすがりければ、母は可愛さいやまして、温かなる

手もて抱きしめしが、渠を筧に心より湧き出づる瀧つ瀬を、何處に通はせしや、夜もいたく更けわたりぬれば、東叡山の鐘の音に、別れし夫の音信を夢にや見つらん、蚊屋もなければそのまゝにまどろみて、折々は澁團扇の緩やかに音しけるが、やがて短夜はしらみわたりぬ、

懸賞小說　壹等

十年振

東京　長島喜美子

酒井爲子は、今新任事務官太田貢氏が官舍の門を潜ツて、新たに障子も張り替へられ、式臺も淨く拭き込まれたる玄關に立ッた。夫れは元の學友、今の太田氏夫人桑子に十年振りに面會せんが爲で——爲子はこの門を潜ッてこの玄關に立つまでには、幾度か沈思もし、躊躇もしたのである。と云ふのは同一學校を卒業してからは、互ひに懸け隔れて面を合すことなく、僅かに手紙の往復をして、樂しみ多かりし學校時代の舊交を温めて居たのであるが、それも桑子が太田氏に縁附いてからはハタと絕えて、面を合はさゝること茲に十年。花につけ月につけ、桑子のことを思ひ出さぬ時はないが、彼方は行政官の夫人として、此方は育英の人として、學むだことも同じなれば、卒業したのも同じ年であるが、其の爲すべき事は方面を異にして、また居所さへも東西遠く隔ッて、相逢ふて昔を語るの機會がなかッたのである。然るに今回太田氏はこの縣の事務官として赴任することになッた。それを爲子が始めて官報で見て知ッた時

の悅びは甚麽であッたらう。常から心に深く刻み込まれて忘れることの出來ぬ桑子に逢ッて、一別以來の事を語りもし聞きもすることが出來ると思ふと、云ふに云はれぬ嬉しさを感じて、茫として其日は生徒に何を教へたやら、課業のことすら忘れて了ふほどであッた。

爲子の瞳の底深く殘ッて居る桑子は、二十二三の令孃。色の白い細面の、鼻の隆い口元の美しい、丈のスラッとした、談話上手な、さうして快活な、卒業の紀念に撮ッた寫眞を出して見ると、直ぐと誰の目にもつく美人である。其頃全校の容色は桑子一人占めとの評さへあッた。桑子は果して今も其の容色を保ッて居るであらうか、別れてから十年。桑子は自分に一ッ年下で、今年は三十二。自分のこの窶れた姿を見るにつけても、桑子とて以前の美しい桑子ではあるまい。母樣と呼ぶものも出來て居るであらう。それは一人であるか、二人であるかは分らないが、子を持つと女は老ける、窶れると云ふ。ともすると自分よりは老けた、人になッて居るかも知れない。太田氏に嫁附かれた時に、何んな美しい奧樣が出來たか、陰からでも見たいと祝ひの手紙の端に書いて遣ッた返事に、三國一の花婿に日本一の花嫁、後光が射すほど美しい。と例の快活な氣象で、恥し氣もなく筆の肉も太く返事を寄されたこともあッた。桑子は果して今も以前の如き活快な、苦勞と云ふことのない奧樣であらうか。

と、斯ンなことを考へて、太田氏の赴任して來るのを一日も早かれと待ちに待ッた。爲子は生みの親が幼稚い時に他に呉れて遣ッた子の久し振りで歸ッて來るのを待つかのやうに、逢ッて見るまでのことを種々と想像して見るのであッた。自分の教へて居る生徒のうちに、後藤才子と云ふのがある。色の白い面長な、後から見た恰好は、桑子の若い時其儘そッくりである。この生徒と學校の歸りなどに一所になッて、話しながらに歩いて居ると、自分が教師で對者が生徒であると云ふことも忘れて了ッて、十年の昔、桑子

と話しながらに學校から戻ッて來て居るやうな氣がして、妙に若々しい心地になり、結ばれた心も解けて了ふのであッた。

以前はさうでもなかッたが、爲子は近來多く鬱ぎ勝であッたのである。其の原因は誰に語ッたこともないから分らぬが、何にか氣に染まぬことがあッて、この高等女學校に敎鞭を執ることが厭になッたのであらうとは、職員仲間の何れもが一致した鑑定であッた。それが太田氏が赴任して來ると云ふ官報を見た日から、急に生々して、顏の色艶さへ人目に立つほど好くなッたのである。さうして太田事務官は何時赴任して來られるのであらうなどと、近頃餘り言葉も交へなかッた同僚にまで話しかけるので。まだ幅の廣い元祿模樣のリボンを嬉しがッたり、耳の後に粘いた白粉の塊を落すのを忘れて居りながら、口紅を脂いて登校するやうな同僚には、爲子と太田事務官とは昔し甘い戀を仕合ッた間ではないかなどの、若い者には有り勝な想像をさへ喚起さすのであッた。

爲子が近來鬱ぎ勝であると云ふのは、同僚の觀察通り、無味單調なる敎授の生活に厭たのも慥かに其の一ッではあるが、それは其の身の天職として、勤めるに勤められぬことはない。初めて職に就いた時ほどの興味は有たぬまでも、去ッて他の職に就いて見やうと云ふほどに厭て居るのではない。厭て居らねばこそ斯うして勤めて居られるので。鬱ぎ込む重なる原因と云ふは、老孃には能くある慣ひの、後から後からと若い同僚が殖へて來て、さうして其の人達が面白さうに、語ッたり笑ッたりして、苦勞なくして日を送るのを見ると、自分も今一度あんな希望に充ちて居る、愉快な生涯に返つて見たい。と思ふと樂しみ多かりし既往を追懷して、自然に鬱ぎ込むで了ふ。時には高等な敎育を受けながら、其の人達の爲すことを羨ましくも、嫉ましくも思ふこともある。自分は何故に斯んな卑しい心を起すのか、女は何故斯う狹い量見

を持つものか、女とさへ生れて來なかつたならばと、云ふて返らぬ愚痴をこぼして、廣い世の中を自分で狹めて居るのであつた。

この落寞を破つて爲子に慰安を與へるものと云つては、僅かに『タマ』ト呼ぶ手飼の小猫があるばかりで、爲子はこの『タマ』を綾して遊むで居る時ほど心の平かなる時はないので、『タマ』は爲子にとつて無二の親友であつた。爲子の心は唯だこの一小動物の夢に依ツて、春ともなり、秋ともなるのであツた。所へ十年相見ざる追懷多き昔の親しい友に逢ふべき機會が、今眼前に現はれて來たのであるから、爲子は荒寥たる暗い林の中から、俄に花開らき、禽うたふ、美しい花園に辿り出でた想ひがするのであツた。

斯くて待ちに待ツた太田事務官は赴任して來た。出迎ひに行ツた校長が歸ツての話に、夫人はまだお年齡は若いがなか〳〵捌けた方で、私が高等女學校の校長であると云ふので、他の出迎ひの人より別けて私に種々な談話を交へられたが、初めて逢ツた人のやうでない、誠に心の置けない方であると云ツた。桑子は今年三十二である。女として若いと云はれる年齡ではない。萬一や其の夫人は自分の焦れて居る桑子でなくて、他の人ではなからうか。桑子が太田氏に緣附かれたのは事實であるが、十年の長い星霜、其の間に甚麽不幸が出來て、今の夫人は二度目の夫人ではあるまいか。と年齡は若いがと云ツた校長の言葉が氣になツて仕方がない。

『あの何んですが、其の方のお名前は御承知ぢやありますまいか。』

と聞いて見た。校長は首を傾げて

『左樣、何んとか云はれましたツけ、お名前を被仰られたのですが、烏渡と思ひ出されませんが、貴女のお知己か何んかで。』

と今度は校長から逆に聞かれて

『ハイ、桑子さんと被仰る方なら私の同窓の方なのですが、お年齢が若いと聞きますから萬一かすると異ッて居る方かも知れません。』

校長は卓子をトンと叩いて『さう〳〵桑子さん〳〵、夫れで思ひ出しました。桑子さんと被仰る。さうですか。同窓の方ですか。ぢやア貴女もお出迎ひに行ッたら宜かッたでせうに。』

『それが貴方、モウ十年から音信もなにも絶えて居るのですから、突然出ては何うかと思ひましてネ。』

『へエーさうですか、夫れにしても貴女が迎へて進げたら、千人の知らぬ人に出迎へて貰ッたよりも、夫人は甚麼にか喜ばれたであらう。まア早く行ッて逢ッてお進げなさい、實に奇遇ですね。』

と校長は速かに太田氏の夫人を訪ふべく勸めたのである。

爲子は太田氏の來たるのを一日千秋の形容詞を以ッてするも猶ほ足らぬ思ひをして待ッたのである。さうして其の人の夫人はいよ〳〵自分の慕ッて居る、懐かしい親友桑子であると知れた上は、何を差措いても直ぐに訪問する筈であつたが、また例の老嬢の習癖が出て、お年齢は若いがと云ッた校長の言葉に妙な考へを起して、桑子は以前とおんなじやうな艶のある顔をして居るであらう。さうして自分のこの血色のない、窶れた姿を見たら、自分が學校時代に盛んに主張した獨身主義の哀れの末路を冷笑するであらう。舊知を訪ふて慰めを得んとして、却ッて煩悶の種を播きはすまいか。桑子は今でも自分を親友として迎へるであらか――

斯ンなことでツイうか〳〵と一週間ばかりを過して了ッた。併し矢張り昔の親しい友である。況んや其の夫たる人は事務官として、直接間接に自分等の職務を是れから視る人である。知らぬ顔をして過す譯に

は行かぬ。幸ひ今日は日曜である。思ひ切ッて、世慣れぬ少女の人を訪ふ如き思ひをしてこゝに來たのである。

『お頼み申します。』

と訪ふたが、夫れは口の中で、自分にすら聞き取れないほどの低聲であッた。重ねて『お頼み申します。』と今度は稍や高い調子で訪れた。スルと小肥りのした、愛嬌のある下女が出て來た。

『奥樣はお在宅で御座いませうか。』と畏しさうにして尋ねた。さうして『御在宅で御座いますなら如斯ふものがお目に懸りたいとお執次を――。』と云ッて、小形の名刺を出して下女に渡した。

下女がそれを持ッて奥へ行ッた。と思ふと急しさうな跫音がして、驅けて其處へ出て來たのは、丸髷に結ッた太田氏の夫人。この十四五日間絶えず爲子の胸裡に描かれた桑子その人であッた。

『まアお珍らしい爲子さん。』

と云ッて、桑子は爲子の手を執ッてさも懐しさうに、瞻仰げた眼には無量の喜しさが充ちて居た。爲子は十年振りで其の人に逢ッて、手を執られて、先に言葉をかけられて、モウ胸が一抔になッて口が利かれなかッた。

手を執ッたまゝに案内せられて通ッたは、廣い庭園に面した八疊の座敷である。無沙汰をしたはお互ひ樣。まア何により變りがなくて結構。斯ンな所で逢はふとは思はなかッた。矢張り二人の縁が深いのです子ーなどの言葉が幾度となく二人の間に取り交されてから、桑子はこの珍客を欵待すべく、其の支度の爲めにこの間を出て行ッた。

庭園の樹木は四面小暗きまでに若葉の衣を着けて燃るやうな杜鵑花が所々に點綴せられた美しさ、小禽

の長閑に面白さうな聲さへ其の裡から漏れて、廣い邸内は森閑として人に物を思はせる。床の花瓶には折柄の心字花幽しく、挿けた人の品高い心を語ッて居るかのやう、同じ床の間に立て懸けた琴の袋も除られて、耳を澄ませば、何所からとなく微妙な音が響いて來るやうな。爲子は默然として椽側の半ば開いた障子に身を凭せて、この靜寂な光景に對して恍乎として、少時は何事も考へて居なかッたのである。爽心した人のやうに我を忘れて居たのである。

『まア長いこと失禮をして、退屈だッたでせう爲子さん。』

と快活に云ッて桑子は入ッて來た。十年逢はねど桑子の氣の輕いこと、心の措けないこと、今も昔に變らぬのである。校長が心の措けない方と云ッたはこゝであらう。お年齡の若いと云ッたも無理ではない。今身粧ひをして出て來たところを見ると、まだ二十五か、六とは何うしても見られない美しさ。日本一の花嫁と云ッたことも思ひ合はされて、爲子は密かに微笑みを禁じ得なかッた。桑子に續いて十六七の、矢絣の、小間使らしいのが膳部を運んで來た。』

『私の手料理で、召し食がられるやうなものではありませんよ、久し振りですから思ひ切り御馳走をせねば濟まないのですけれど、まア我慢して食がッて下さい、私も御一所に頂きますから。』と馴々しう

『アラ斯ンな御心配をかけては濟みませんネ。唯だ鳥渡とお目に懸ッて置かうと思ッて來たばかしですのに。』

と云ふのを抑へて『オヤ十年逢はぬ間に大層義理堅い方におなりですネー。不可ませんよ、年を老ると皆ンな什麼になッて了ふから。ホヽヽ。』と桑子は若い人でもあるかのやうに

年を老ると皆ンな什麼になッて了ふから――。アヽ、自分は桑子に僅た一ッの年上である、一ッ違ひで自

分は什麽に老年に見えるのか、自分が老年なら桑子も老年である、否な自分より桑子の方が老年と云ふべきである、桑子はモウ人の妻、一家の主婦である、自分はまだ處女である――。とまたしても老孃の惡い僻み根性は、爲子の胸を衝いて來る。

『本當に、私はモウ斯ンなにして朽ちて了ふのですよ。』と淋しく云ふ

『あんな事を、今から朽ちて何うします、私なんどこそモウ二人の子持ちで、朽ちて了ッたッて宜いのですけれど、朽ちまい、衰へまいと思ッて、氣分は今でも昔と變りませんよ、それに貴女なんかまだ……

……。』と俄かに氣附いたやうに言葉を切ッて、またオホヽヽヽと笑ッて

『まア冷へないうち食かッて下さいな。』と附け加へたやうに云ふ

『ぢやア御遠慮なしに折角ですから頂きます。』と云ッて爲子は箸を取上げたが、食事をしながら話しを續ける『お二人お有ンなさのるですか、早いものですチー。』と何にか感じたやうな物の云ひやう

『早いものですか、年齢から云へばまだ一人ぐらゐは有ッても宜いのです、貴女なんか澤山なお子持ちぢやありませんか、お羨ましいですよ。』

『アノ私が澤山な子持ち？。』と爲子は訝んな顔

『さうぢやありませんか、貴女はアノ時分から私の一生は教育事業に捧げて、澤山に良妻賢母を作ッて見せるッてのが理想なり又主義ぢやなかッたのですか、其の理想通りに行ッて主義を實行されつゝお在ンなさる、何んなにかお嬉しいでおらうと思ひますよ、幾千と數限りのない未來の良妻賢母の母、貴女は能くそれを成し遂げなさいました、私は感心いたしますよ。』

斯う云はれて爲子の虛榮心は一時パッと燃へたのである。自分は慥に桑子に云はれる如く、理想通りの

ことを今日行ッて居るのである。學校を卒業當時、幾らもあッた緣談を皆ンな斷ッて了ッて、岐路に外れず今日まで其の理想を實行して來たと云ふことは、大いに誇りとするに足ると思ッた。と同時にまた桑子は斯ンなことを云ッて、暗に自分の獨身を嘲ッて居るのではあるまいか。とも思はれた。實際自分は其の理想を現實にして居るとは云ふもの丶、今更らそれは餘儀なくして遣ッて居るやうなもので、教授に何んの興味も有たねば、前途にまた何んの希望があるでもない。孤獨の身には何んの慰めもなく、落寞い想ひに懊惱まされて居る此頃に於ては、別してさう思はれるので、折角の桑子の手料理も更らに味がない。爲子は匆々に食事を濟まして歸らうとして居る折柄、庭園の若葉の茂みのなか丶ら、青葉しげれる櫻井のと、可愛らしい唱歌の聲が聞えて、ひよッこり椽頭に現はれたのは八歳ばかしの男の子、桑子はそれを見ると手招きして

『潔さん、こ丶へ來て叔母さんに御挨拶をなさい。』と云ッて、更らに爲子の方を向いて『是れが總領なんですが、モウ〳〵惡戯兒でせうがないんですよ。』と附加へた

潔は人見知りもしないで椽頭に立ッたま丶で、海軍帽の廂に手をかけて

『失敬！。』

とばかり、また青葉しげれるを繰り返へしてさッさと彼方に行ッて了ッた。

爲子は十年振りで桑子に逢ッて、いろ〳〵談話もし、自分も慰めを得やうとして來たのであるが、昔に變らぬ桑子の快活な態度や、二人の子持ちであると云ふのにまだ若々しい血色のい丶顏をして居るのを見ると、妙に夫れが羨ましくもあッたり、自分を輕侮めて居るのではあるまいかとも思はれたりして、初めて玄關で桑子の姿を見て、桑子に手を執られて嬉しさに胸が塞ッて口の利けなかッた愉快と云ふものが少

しもなくなッて了ッた。さうして折角の御馳走も匆々にして歸らうとして居る所へ、幻影のやうに鳥渡と出て直ぐ消えて了つた潔までか、態々自分を嘲りにでも出て來たやうに思はれて、爲子はモウ其座に落着いて居られなくなッたのである。

『悠くりお話しをして行きたいのですが、餘りお久振りで何にからお話しゝて宜いか話しの端緒が見附かりませんから、また其のうちお伺い致します。』と歸り支度

『まゝ宜いぢやありませんか、私はこの知らぬ土地へ來て思ひもかけぬ昔の親い方に逢ッて、全で死んだ人の甦ッたのに逢ふやうな氣がした本當に嬉しいのですよ。モウ少し話していらッしやいな、今日は日曜ぢやありませんか。』

と桑子は引き留めたが、其の死んだ人の甦ッたのに逢ふやうな氣がしてと云ッたのが、また少からず爲子の神經を刺激して、爲子には「貴子は死んだ人のやうだ」と云ッたやうに聞きとれたのである。爲子はモウ片時も开處に居たくなくなッた。

开處でいろ〳〵に云ッて桑子は引き留めて見たのであるか、また近いうちにお伺ひ致しますと云ッて爲子は到底座を立ッた。

門の外まで桑子に送られて歸路についた爲子は、家に無二の親友「タマ」の歸りを待ッて居ることも忘れて了ッて、夢路を辿る人のやうに、後振り返ッて見もしなければ、側目も觸らず、人通りの少い夕暮れの屋敷町を、悄然として歸ッて行くのであッた。

老嬢酒井爲子は、斯くて十年振りで逢ッた昔の友、夢寐の間もこの人のみはと忘れなかッた親友をも捨てたのである。

（をはり）

懸賞小説　選外　秀逸

白萩

石見　青柳秀子

元は某省の高等官なりし長官の御機嫌もとらねば御用商人の賄賂もとらず、萩村清忠の名は剛直官吏として名高かりしが、今の世に方正なるは時世後れと、生意氣な書生が悟ったらしくいひしが眞理なるにや、長官と爭論したが原因にて遂に職を免ぜられつ、其よりは芝山内に閑靜なる家を持ち、生活に難儀せねばなす事もなく遊び居る。今迄御機嫌伺ひに來りし下役の輩も訪はず、稀に來れば晝食を食逃げして行くが目的にて、腹が滿つれば物いふが嫌だといふ顔して歸る男許りなるは、清忠今は妻と共に、芳雄とて高等學校に通へる長男と其妹の松江とを力にして世を無事に送りぬ。萩村の隣りは、此邊の財産家といはれ居る家にて、其主人の名は豊田常秋といひ、萩村の主人とは碁の好き相手とて交際淺からざりしが、明日は愈郷里へ歸るとかにて、萩村の家へ、妻と獨娘なるお八重を連れて告別に來りぬ、日頃快活なりし常秋は今日も變りなげに笑ひ乍ら、もう東京へは來ない積りです、田舍へ行ったら一生百姓で終る積り、生馬の眼を抜くといふ此東京には私の様な馬鹿は居られませぬ、矢張私には毎日大根や芋を作って居る方が適當ですといふ心の中には如何なる恨を包めるにか、常秋の妻も表に笑めど、眉に潜める愁は隱さむ由もなき樣子、貴君方と親しく致しましてから、彼是五年にもなりますが、誠に親類の様な心持が致します、斯うなるのも詮方が御座いませんが、東京を遠く離れたといっても滊車のある神戸から僅に二里離れた處で御座います、若しや彼方にお出でなさいましたら、何卒御寄りなさいませ、百姓の手料理でも御馳走致しませうと淋しげに笑はるゝも果敢なし。明日は何時の滊車で御出發ですかと萩村のとへば、午後一時の滊車で出發する積りですが見送りは御無用ですと流石に常秋が聲は曇りぬ。

私はよい碁の相手をなくして、誠に淋しくなります貴君に戴いた菊を今年は見事に作って自慢致したいと思って居ましたが、といひかけて萩村の默すれば降り出でたる雨の音しめやかに聞えて、櫻淋しく椽先に散懸る、あゝ忘れて居ました、是れ八重やと、常秋は娘を呼びて、清忠の後の方にうち沈める芳男を見、芳男さん、娘も色々御世話になりました、是は娘が編んだ物です、置土産といふのも笑止しう御座いますがと、色美しき毛糸細工を前に置く、芳男は唯、

難有う御座いますと許り、日頃内氣な性とて碌に禮もいへぬを清忠は子にかはりて禮いふ。お八重が母の傍にうつむきて惘乎せる樣いたく萩村の妻が心に沁みぬ。それから是は松江さんに何卒上げて下さい、……松江さん、八重も汝と、もう遊ばれぬかも知れませぬ。

雨はや〻風さへ誘ひ來つ、清忠は椽の方を眺め、豊田さん一緒に碁を打つ事も、もう出來ませんな、去年此宅で月を見ながら願つた事もありましたが、世の中の事といふものは如何なるか知れぬものですなと、庭を眺むる眼は曇れり。一座しめり勝ちなる中に、松江は豊田の娘を彼方に誘ひ行くまで何やら語りつゝ二人とも泣き居るは、明日より逢れぬとかで、芳男は不圖それを眺めしが、眼を庭の方へそらしぬ。それなら、何卒何時か御立寄を願ひます。はい參ります、何卒彼地に御出になりましたら、御閑な折に御手紙下さいませと萩村の妻の答ふる中、豊田ははや立ち出づるに、萩村の一家は御機嫌よろしくと門の外まで雨に濡るゝもいとはで送りつ。

隣の主人は誠によき人物なるに聞けば如何した譯か財産も餘程傾いたとのこと、成程、東京にはあんな正直な、深切な人は住めぬだらう、如何やら私は郷里へ歸りたくなつたと父のいはるゝも無理ならずと、芳男はつく〴〵思案にくれたり、芳男は學校がある、私だけは是非明日見送りに行かむと思ふがお前も行かないか、と妻を顧れば、はい參ります。是きりの別れかも知れないのですから、もう一度御目にかゝりたう御座いますと、常は出嫌なる人も心地よく承知しぬ。

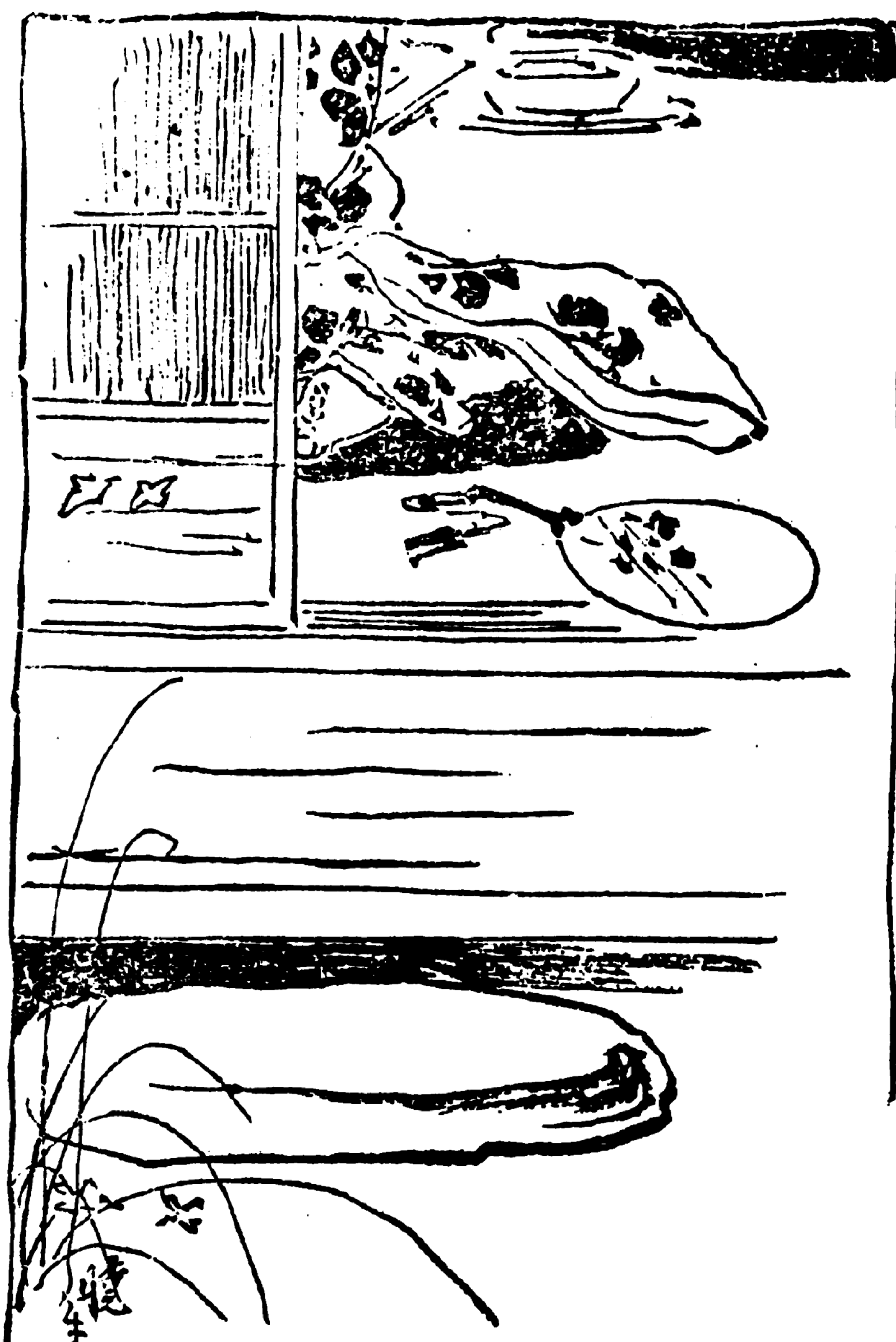
明くる朝、芳男豊田の前を通れば、荷造も終りしにや家内寂として音もせず、是が名殘かと二階のあたりを見返り〳〵學校へ行しが、何も身が入らず、歸りにははや其家の門閉されて、唯貸札の跡許り殘れるも悲し。よく此門を入つて遊びに行つたがと、うつゝ心に我家へ歸れば、母は見るより見送りの事を語出しぬ、日頃出入の多い、御隣なるに見送り人は私達許り、豊田さんが、外方には知らせなさらなかつたのか知らぬが、河上さんなぞは一昨日も來て居らしつたのだから、知らない道理はないが、それに一人も來ないとは、いくら東京でも餘りの事と情無かつたよ。未た漸く十七なるに、苦勞を御知りなさるのは、眞實に可愛想だねと母の聲は濕りつゝ芳男は言葉もなくてうつむきぬ。

我が部屋に行けば丸窓より見ゆる隣家の二階、戸は閉ちて櫻散る庭に雀のこえのみぞする。芳男呆然と思に沈む中、日はいつしか暮て、空の色暗くなり行きつ、汽車の笛一聲二聲、彼方の森陰より響くに今頃は何處らあたりまで行かれしやと、我ながらそれのみ氣になるを芳男は怪しみぬ。

今頃になると、いつもお八重さんの琴の音がしたのだが、もう聞かれぬ、お八重さんは妹をよく可愛がつてくれた、豊田さんも自分をよく可愛がつてくれたが、又二度と逢へるか知らん、世の中はつ

まらぬものだと、芳男は隣の娘より貰ひし毛糸細工を見やりつゝ。

其翌日萩村の家に日頃出入する洗濯婆来りしが、話好きとて時の絶つも知らで、何彼と萩村の妻と語り續けつ、奥様愈お隣りは御移轉でございましたれ私共も陰で御氣の毒と申して居ります御夫婦は好い御方で御座いましたが、世の中は人が善くても甘く行かぬと見えまして、……あなたも御存じで在らつしやいませうが、人に欺まされて大相の金の證文に判をば押しなさつたとの事、みんな御氣毒だと申して居ります。……それにあのお嬢様、彼方はお可愛想でなりませぬ、御存じの通り獨りの御嬢様で、御養子にも定まりかゝつた事があるさうで厶いますが、御當人も御夫婦もお進みなさらぬので、とうと破談になりましたさうで厶いますよ、それが、あなた、何時か御夫婦で御嬢様を呼んで、かういふことを仰有つて在らしつた事があるさうで厶います……あの、萩村の芳男さんは、——此方の若様で御座いますね——私達の氣にも入り、お前も望んで居り、なることなら是非養子に貰ひたいが、何ないつても長男に獨娘、とても出来ぬことだからあきらめてくれ、と仰有つて、御夫婦は涙含んで在しやる、御嬢様は泣いて在らしやつたと、女中のお梅さんが話して涙を零して居ました、斯う申しては何で御座いますが、こちらの若様とお隣の御嬢様とは眞實にお似合ひなさいますでせうのに、世の中は甘く行かいもので……とやゝ打て濕りて語れば、聞く人は太息して、まあ左様だつたかい、とばかりそと眼元を拭ひぬ。



美術

日本音樂に就て

理學博士　田中正平

◎日本國風と音樂　日本國風と、歐米風を調和せんことは、現今各方面に行はれつゝあり、衣服住宅を始め、繪畫其他の美術品及び飲食物等に至る迄、漸次洋風の流行を見んとするの形勢なるが、未だ完全なる和洋折衷の成功したるものあるを見ず、洋風にも各種の長所あらんも、日本風にも亦大に取るべきの美點あり、洋風を以て、總ての點に於て、直に善美なるものと思惟するは大なる誤解にして、吾邦音樂の如きも、種々の理由により、大體に於て、進歩に遲れたるの傾あるも、その內又一種言ふべからざる妙味のあるありて、未だ俄に洋樂を以て日本樂に優れりとなすべからざるの特徵を含有せり、洋樂に比して、日本樂は悲哀の調に富めりとは一斑の評なるが、彼の『かつぽれ』の如き日本人に取りては最も浮きたる調子と言はるゝも、歐米人は之を聞きて、却つて悲哀となし、調子に合せて面白く躍るを見て、不審を懷く位なり、日本に於て最も浮きたる音樂が、洋樂に比すれば、悲哀の部に屬すとせらる

◎日本音樂の缺點　西洋樂は數十種の異なる樂器を以て、調子を合せて合奏するに、何等の困難を感ぜざれども、日本樂は、合奏に於て不便尠からず、加ふるに同じ樂器の中にも、各自流派を設け、甚しきは藩籬を設けて、互に相容れざるの傾あるを以て、其の進歩發達も從つて停滯し、且つ日本の社會狀態は、多數一同に會合して交觀するの風に乏しく、音樂なるものも、單に酒席の興を助くるに用ひられ、若しくは夜風蕭々たる小室にありて、自ら奏して樂むに過ぎざりしを以て、音樂を以て社會交際の一要

素となすに至らず、從つて國民の音樂の大に發達せざるは、是等の習慣に基くものなり、元來音樂は繪畫其他の美術の如く、模倣すべき自然の物なきを以て、之が發達は、要するに人の音樂思想の發達に待たざる可らず、日本人が歐米人に比し、音樂思想に缺如せるは爭ふべからざる所なり、

◎和洋音樂の調和　和洋音樂の調和に付ては、今現に研究中にして、バイオリンに日本歌を上さんことを試みつゝある人あれども、未だ良好の成績を得ざるが、風韻を異にするを以て、果して完全なる折衷をもなし得べきや、否や、一個の問題なり、兎に角日本には日本の特徴あるを以て、之を沒却するは不可なるべく、思ふに今後共に其特徴を持して並進することとなるべし、

◎家庭音樂　日本樂器の中にて、最も發達したるは三味線なり、恐らく世界に於て最も進歩したるもの丶一ならん、然れども三味線は如何なる方面にも使用され、其多くは下等社會に流行するの有樣にして、乞食等の使用するもの尠からず、加ふるに今日迄三味線は花柳社會と密接の關係を有し、その大部分は、花柳社會に使用され居るを以て、上流人士は之を下等視して、家庭に於て之を彈ずるを喜ばざるものあり、琴その他の樂器の如き、家庭音樂として趣味を添ふるもの尠からざれども、日本人は音樂思想乏しく、一人之を彈じて、一人之を樂むに過ぎず先づ家庭音樂には、在來行はれ居る歌の文句は多くは卑猥なるを以て、之を改正するを要すべく、次に少くとも一家族皆多少の音樂趣味を要す、主人謠を歌へば妻君鼓を打ち、娘は起つて舞ふ位の素養あるを要す、かくすれば音樂の趣味は益々感せらるゝに至るべく、從つて音樂の進歩も著しかるべし、歐米人は多くは音樂の素養を有し、家毎に樂器を備付けざるは少し、家庭趣味を深からしめんとならば、音樂思想を養成せざる可らず、日本音樂家は指頭若くは喉頭の訓練は行屆き居るも、音樂そのもの丶思想に乏し、これ音樂界の一大缺點とせざる可らず、

繪畫と流派

中島春郊

繪畫に限らず、日本の美術には流派といふものがある、例へば花を活けるにしても、そのまゝ投入れたのは一番天眞に近い譯であるが、それでは赤裸々で趣味といふものがない、そこでかういふ枝ぶりにしたらば面白いと云ふのでその枝ぶりが菊を挿すにも桃を挿すにも同じことになつて、それが池の坊流といふものにも、古流といふものにもなる繪畫も同じことで、各派の祖が、かういふ風の所に趣があるとなると、それが畫風といふものになる、



たとへば、鶴を描くにも、唐畫は南北を通じて、首の短い嘴の太い、蹈立つて居る所を腿の所より狹く描き、狩野派は、首が長くて、腿の所より蹈立つて居る所が廣い、それは流祖が形のよい所を見立てたに始つたので、唐畫は片足を上げて、これから前へ出さうとする所に着眼したものであるから、足を上げやうとする時、蹈立つ所が狹くなり其勢で首が自然に縮まるので、首が短く見え、隨つて嘴もそれに釣合ふやうにする爲に太くする、然るに狩野の方では、足を上げて蹈出した所をよしと見たものであるから、足も下の方で廣く、首も隨つて前へ出、嘴も實物より長く

見するやうに描く、かういふ風に動作に趣を採り、これでよいとなると、それが畫風になり、唐畫の鶴は腿より踏立つた所が狹く、狩野派はそれと反對に畫くといふのが畫風になつた、寫生一點張から云ふと少し眼界の狹いやうな話であるが、そこがまた趣味の存する所である、さりながら四條派は、圓山應擧に至つて、寫生といふ事に重きを置き、これを畫法によつて描くといふ風にしたものであるから、鶴を描くにしても不道理の事なく、動物を描く上にはその成功したものである、然るに今日に至りては、その應擧さへ、實物とはこれ程の相違があるなどゝ、重箱の隅を楊枝でほじくる如き詮議立をするものがある、さうなつたらば寫眞のお伴をするやうなもので美術としては實に價値のない話になつて仕舞ふ、油畫ならばいざ知らず、日本の繪畫は一定の法式による事が必要の條件である、

猶流派に就ての一例をいへば、鼠を描くに、唐畫のは頭が長く、狩野派のは頭が丸い、それは前者は、鼠の駈出した所を善と見たものであるから、顔も尖らすやうに描き すべて長目にするが、狩野のはうづくまつて物を食ふ所へ着眼したるものであるから自然丸く見える形である、近世では猩々曉齋の如きは、形を實物に採り、畫法を狩野にとるといふやうにして一機軸を出したのであるが、應擧が四條派に一生面を開いたと同じやうに、狩野派に大貢献をしたものである、

尚一例を擧れば、人物を描くに、唐畫は全身の八分の一を顔にして 狩野派は全身の六分の一を顔にしたものである、實物は或は五分の一のも七分の一のものもあらうが、さう極めたのも亦畫といふ上の見識で之は或は流祖の身長から割出た物ではあるまいか、

◎女子夏期音樂講習會　本月廿五日より向ふ三週間神田今川小路二丁目十二番地、東京音樂院内に開催、講習科目は唱歌、ピアノ、オルガン、ヴアイオリン、東京音樂學校受驗科等にして、講師は東京音樂學校教授天谷秀、岡野貞一外名手數名にして、講習志望者は本月廿日迄に申込むべしと

葉物十種の組方

未生流にて體用留の三姿より成る

新瓢庵宗水

◎唐茱苜 の出生は、葉十方へ出で、實の出る處其の眞中にあらざるを以て、葉にて姿を調ふ、尤も添たて不揃い堺葉を遣ひ、五葉か七葉か九葉迄組み實の遣ひ處は體の葉の後より一本、用の葉の下より一本、堺葉の後より一本、かくて組葉の外より實を遣ふなり、尤も葉の丈に准じて實を高くつかふなり、

◎岩蕗 の挿方は、用に大葉を入れ、體に少し小さき葉を遣ひ、體用の添に小葉を遣ふ、此小葉を力葉と唱ふ、大葉々々の間に小葉を遣はざれば、風流の姿出難し、花は組葉の中に加はふ、五葉一花、七葉二花、九葉三花の割合なり、尤も常盤物なる故に花なき時も、美しき草花をあしらひて生てよし、唐岩蕗は大なる故に、葉數十枚餘も遣ふ、朝鮮岩蕗しかみて小也、深山岩蕗は花葉共三尺餘も伸る、葉先八ツ手の如く細かに切れたり、俗に一名して草といふ何れも挿方同樣なり、

◎寶子 の出生挿方は岩蕗と同じ、一名般若草とも云ふ、

◎擬寶珠 の出生も葉十方へ出て、花は眞中より生れ出づる葉にて姿を調ふ、尤も添たて不揃ひの葉、堺葉をつかふて株を分け、花は組葉の中に遣ふ、先づ九葉三花迄を挿すを得べし、大中小、春秋夏冬咲けるを見る、

◎水芭蕉 は小なる物故七葉二花まで挿すべし、組方前に同じ、上品のものなり、

◎紫苑 の出生は葉向合つて生れ出づる故、拜み葉と唱ふ、挿方は用に大葉を入れ、此上に拜み葉を入れる、尤も左右同性の葉にては惡しゝ、一枚は直にて二枚は曲りたるを遣ふ、此中に用の花を入れる又體も合爪葉を遣うて其中に體の花を入る、留も是に准す、五葉二株、七葉二株、九葉三株まで挿るなり、元來一花三葉の出生なれば、五葉にても一花、七葉にて二花遣ふ定あれども、此類は大葉にて、力

強き故に堺葉も遣ひ、株を分て五葉二花、七葉三花を遣ふこともあるなり、

◎葉蘭の挿方は、三葉、五葉、七葉、九葉より葉の丈に随ひ奇數にて五十枚餘も挿るなり、まづ七葉の組方は、堺葉一枚遣ひ二株に組む、此上數挿す時も堺葉を多く遣ひ、株を分けて挿すなり、尤も添たて不揃の葉も數を限らず、程よく遣うてよし、又常盤草なる故に、時候の草花をさし合すべし、且つ葉蘭に挿交、應合の遣ひ方あり、しま葉蘭などを十三五葉位常の如く挿して、體用の間、體の間、用々の間抔へ、瞿麥、仙翁の類をちら〳〵と遣ふことあり、至極麗はし、又葉蘭の花は三月より四月にかけて咲く、廣口等へ挿る時は、大葉二株三株も入れ、其間へ尖葉に花を添へて應合すべし、尤も砂留にて三才の石を飾る、大廣口ならば、天一地六の割合を以て小石を据ゑる、是れ飛石の景なり、尚又二間三間の座敷抔にて、次の間には成長の葉蘭を挿し、奥の床には薄廣口に石を飾り、尖葉に花を添へて、一株三株も挿し、出生を見せるも働きあり、又茶席の席抔へも、右の如く未生の姿を挿してよし、

◎濱藜蘆の出生、組方、花のつかひ、次に記す萬年青に同じ

◎萬年青の出生は、初に二葉陰陽と組みて出で又中より陰陽と組みて出る、此の四葉東西南北さしひらく、其中より三葉を生じ、一體に七葉定まりて花を生ず、これに依つて挿花に對する時も、七葉に實一本添えて一株と組む、體々用、用留と五葉に姿をとゝのふ、體用の間へ若葉二枚、これにて七葉なり體添の葉は霜圍ひ、用添の葉は風圍ひ、留の葉は實圍なり、九葉、十一葉、十三葉までは、右三役の葉を遣ひ、一株に組むべし、實圍ひの葉は枯葉を交へ二三枚もつかひてよし、九十二三葉も一株にいさいきと榮えたる萬年青もあるものなり、又十五葉の組方は七葉五葉の二株を一つに寄せ、實圍ひ三葉にて根元を包む、尤も實は二本遣ふ、是れ七五三の傳の組方也、花のころより實のある間は客席へ用ひてよ

し、廣口等へ挿る時は、時候の花車なる草花をさし合すべし、大廣口に挿る時は、いろ〳〵の萬年青を取交せ、五株七株も挿るなり、

有樂流茶道

田畑夏子

濃茶と薄茶

濃茶は來客一同互に知り合ひて、無病の人のみに用ふるなり、古へは此點に注意なく、大に濃茶流行したるが、今日に至りては、醫術の進歩につれて衛生の重んずべきを知り、自然濃茶を點つる場合少くなれり、併し無病の人のみにて濃茶する時は、友誼を深からしめ、甚だ快樂多きものなり、之に反して客互ひに初めて會席なしたる等の時は、もしや先方の客に悪しき病はありはせぬかと、懸念しては茶の味も何もあつたものでなく、かゝる時は薄茶の方馳走となるなり、其故は濃茶は其美味薄茶に比ぶべくもあらねど、其の手前、法式は、濃茶は大の茶碗を用ひて、客三人あるも五人あるも、多き時はそれ以上あるも、其の大の茶碗へ、濃茶一人に茶杓子に二さじづゝを移し、湯も一人に二口半づゝの割合に入れ一度に點茶し、正客に向つて出す、正客は進み出でゝ之を受け、二口半をのみ二客へ廻す、二客より三客四客と廻はす故に、つめ客はそのお餘りを頂戴するといふ有様なればなり、

然るに薄茶は、一人づゝ、茶も湯も入れて點つる故決して茶碗より如何なる傳染病にても傳染する恐れなし、而して古より茶は悪しき病氣あれば去る、又如何なる傳染病流行の時も、斯道の茶を常に用ひなば、其家に入るの恐れなしとさへ云傳へられたれば猶更の事と思はる、

席入の挨拶

客一同席入をなせば、主人水屋口より靜かに下座の方より進み出で、右左と引退りて座に就き、これよ

り挨拶始まる、
其例を擧ぐれば、
主人『御一同樣ようこそ御光來下されました、
正客『今日は御茶の湯の御會をお催しになり、お招きにあづかり、有難うぞんじます、
主人『御遠方の所御いとひもなく御出下さいまして有難うぞんじます、
正客『不束の手前を御正客に御進め下さいまして恐れ入ります、何卒とゞかない分は御指圖を願ひます
主人『こなたこそ未熟の御茶道を御笑覽に供します、
次客『きのふは御こま〳〵との御手紙有がたう拜見いたしました、
主人『まことに失禮の書き方で、さぞ御解りにくうござりましたでしよう、
次客『仰にしたがひ、何事もそのまゝに伺ひました、
主人『御繁忙中よく御光來下さりました、
三客『けふは御茶の湯の御席へ御招きにあづかりまして有難うぞんじます、
主人『至急な事を申上げましたのに、よく御都合遊ばして御光來下さりました、
四客『昨日はわざ〳〵御使を下さいまして有難うぞんじます、御遠慮なく御伺ひいたしました、
主人『田舍出の女中で御坐りますから、さぞお解りにくうござりましたでしようと、後で心配いたして居りましたが、よう御光來下さいました、
諸客『今日は御茶の湯の御席へ、手前迄御招き下さいまして有がたうぞんじます、
主人『御多忙中もかへりみず、御つめやくを御願ひ申上げた次第にござります、何分ともに宜しくお願ひ申します、

先づ以上の如き挨拶が一順され、最初主人が一同に挨拶したる時、及び一段挨拶の終りたる時、主客ともに眞の禮あり、

次に正客より床の掛物、置物、生花、風爐、釜、或は敷板、爐緣、自在、鎖、並に庭園等を拜見、挨拶は掛物に花位に止むる方宜し、

女鑑新聞

紀元二千五百六十六年　西暦一千九百六年　清國光緒三十二年
明治三十九年七月一日日曜日　ひのえうま

▼投稿　この新聞紙面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　女鑑の投稿にて女鑑の讀者には月然口へで見らる、
▽廣告　一行十五字詰金二十錢但し四面に限る

發行人　紫式部　編輯人　清少納言　印刷人　赤染衛門

發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社

時言

夏の朝

晴空澄みて輕風徴かに樹梢に動き白露未だ其姿を沒せず、即ち出で屋外を歩すれば、爽氣身に伴ひて趣味津々たる靈界に逍遥せしむ、夏の朝、此清爽を樂むを得べし、此清境に處して冥想すれば、恍然自然と同化す、予は既に予にあらず、惟り存するものは自然のみ、縹緲たる神韶のみ、普遍なる精氣のみ。

夏の夕

日既に西に傾き、烏空天に横ぎりて歸り、戸々水を灑ぎて庭前を洗ふ時に至れば、涼風忽然として來る、此に於て草木蘇し、人また活く、童は走り、少年は散歩し、老たるは裳をかゝげて息ふ、彼等全日必ずしも働きしにあらず、然れども、今や初めて休みたるが如し、否暑氣の爲に終日休みたるもあるべし、然れども晩景氣清きの時に至りて、彼等初めて眞に休みたるが如し、蓋し天の苦熱を下すや、亦清風を以て拭ふ、夏の夕は實に一刻千金なり、

各國の婦人氣質

獨逸の婦人は桃花の如し、質朴にして世帶もちに長ず、英國の婦人は梅花の如し、沈重にして溫良の德あり、米國の婦人に至りては、活潑輕淡、喩へば櫻花の爛熳として春光に香ふが如し、其國により斯の如く女風の異るものは、即ち其國々の氣風時好の相異るによる、換言すれば彼の婦女子を愛するもの、理想、國によりて趣を異にするによる、獨逸の男子は頑强なり、獨逸婦人の自ら質朴なるは之が爲なり、英國の男子は尊大なり、英國婦人の自重なるは之が爲なり、米國男子は有爲快活なり、米國婦人の活潑輕淡なる、亦自ら之に因るなり、

◉赤十字總會紀念繪葉書　赤十字發行所にて發行、購求者十數萬に上り未曾有の好景氣なりき



文苑

ある人の小照に題す

阿井　飛洋

心をいへば山路の野菊
誇らぬ花の色香床しく
姿をいへば軒のしら梅
飾らぬ枝に自ら振あり
花ならずとも此こゝろ
花ならずとも此すがた
なまめく花の色ならで
人の花とも見んは此花

蚊遣火

同

すゞしさ誘ふゆふ月の
影はひさしを洩ながら
蚊遣たく火の煙りにて
あたりをくらし庭の面

百

雜錄

宮家の忠婢

今年は丙午の火災多しと、京都洛西愛宕山へ火難除の參詣者引きも切らず、先頃の丙午の當日の如きは、實に二萬三千人といふ多數の登山者ありたる爲め、愛宕神社々務所にては、一時神符の品切れを告ぐる程なりしが、先月の中ごろ、此多數の參詣者に打交りて、見るもよほ〳〵とせる七十餘りの老婦二人登山せるより、何れも其元氣の程に舌を卷きて、何人ぞと聞きしに、是ぞ賀陽宮の老婢清水とめ(七十二)久邇宮の老婢山本智照尼(七十一)とて、兩宮家の忠婢とは知られたるが、同人等は六十一年前の丙午の經驗もあり、殊に本年は東京にても、閑院宮家御火災の事さへありしかば、密かに兩人申合せ、人知れず愛宕神社に祈願を凝さんとて、共に一日の御暇を乞ひ得て、老足ながら勇を鼓して、登山せしものと知られたるが、參詣者中見知るものありて、兩宮樣の御代參なるべしと、早くも社務所に告げたるより、神職野路井某恭しく兩老女を迎へて、篤く待遇をなし、火災消除の祕符を授けたる由にて、二老女は宮樣の御代參にはあらで、唯だ心安めまでに參詣せしなりと述べたるが、同社は一人の僕を附して、兩宮御邸まで送り届けたりとは、老忠婢の心懸けこそ殊勝なれ、



◎婦人界雜俎　跡見玉枝女史が米國より土產に持歸つた焦き畫は、同女史の工夫により、近時我美術界にも流行せんとせり▽近頃何々夫人の序又著として食パン製造法の小冊子が續々發刊せらる、そはパン種の廣告と知らずに買つた人こそ災難△鍋島侯夫人は相變らず交際場裡の花として、日々多忙を極めたる中に、名歌が續々出來るとのこと△中山幸子刀自は、日夜愛國婦人會と育兒會々員の勸誘で、席暖まる暇もない有樣

流行の髮飾

◉櫛　黑鼈甲又は金地に青貝入の元祿形にして、模樣は朱塗の市松、草花の蔦、菊、牡丹、秋草等の華美なるもの價は六圓乃至十圓

◉笄　大形六分丸の平打、金製に眞珠入擬刻の透彫、水に槌車の彫出し大流行にて、二十三圓乃至四十六圓、銀製一寸丸平打、桐に鳳凰、牡丹などの高彫にて、價は二圓五十錢より三四圓まで色々

◎束髮用三枚櫛　ゴム製全地彫にて、七八圓乃至十圓、其上限なし

◎リボン　夏向は白、水色、鴇色地上枠の織出しにて花模樣あり一吋半巾一ヤード七十五錢、一吋巾同四十錢、和製にて同二三十錢

◎寶石入ピン　二十金ハート形に菫模樣の匂ひに眞珠を入れたるもの二十圓、櫻花に眞珠、ルビーなどを入れしもの二十圓、蝶形の翅を透にして、胴にダイヤモンドを四個入れて、價四十圓位なりと

通信

在京女學生總數

東京に於ける女學生の數は、約一萬二千と數へらるゝも、开は實際の調査にあらざるは勿論なり、今東京なる重なる女學校に就きて、昨今最も精細に調査中なるが、既に判然せし東京裁縫女學校、府立第一高等女學校、女子高等師範學校及び同校附屬高等女學校、神田共立女學校、三輪田高等女學校、弓町女子美術學校、跡見女學校、東京高等女學校、東京女藝學校、上野女學校女子大學（附屬高等女學校を含まず）の十二校にて、現在學生四千七百八十名にて、元より全學生を見る能はざるも、如上十二女學校に、千六百七十四名の東京を見、千葉縣の二百三十六、茨城縣の百六十七、神奈川縣の百六十二、埼玉の百四十三は、共に東京に接近して、交通至便なるに依る可く、次ぎて長野縣の百三十八、靜岡縣の百三十六は最も女子教育者が注意を拂ふの價あり、又大阪の六五、京都の四五に對して北海道の八十二は注意を要す可く、更に又岩手の八に青森の三に對しても、北海道が殊に文明の域に進み居ることをも推し得らる可し、

◎商店と女子　近來商店の店番に婦人の賣子を使用し成蹟好き由なるが、東京堂書店小賣部にては、三年前より繼續し居り、其標準として雇入るゝ年齡は、小學校卒業位となし、一日の給料は十三錢より、廿錢迄なるも、別に被服と晝と夕の二食を給し、朝九時より夜九時までと爲し居るが、女子職業としては適當のものなるべし、

◎理想の良人　某女學校にて、此ほど七十二名の女學生が、將來良人とせんとする理想を調査したるに、軍人、外交官、豪商、文學士、文學者、醫師、宗教家、小說家、小學教師の七種にて軍人の妻を理想にする者廿一、教育家とならんとする者十七が多く、中には獨身にて牧師たらんとするものもありと、

新女醫

本年東京にて施行したる第一回醫師開業試驗後期の實地試驗の受驗者總數五百四十二名、及第したるは百四十名にて、其中左記三名の婦人あり、

◎油川たか子　去る廿七八年の頃郷里滋賀縣にて看護婦となり後赤十字社病院に轉じて職務を勵精中、深く心に感ずる所ありて、醫師とならんと思ひ立ち、熱心に研究して、去る卅五年五月大阪府にて前期試驗に及第したる後は、益す心も勇み立ち、昨年六月出京して、神田區淡路町日本醫學校に入りて、勉强の結果空しからず首尾よく此度開業試驗に及第したるにて、當分同醫學校の女教師として、外來患者の診察に從事すと云ふ、當年廿八年

◎久恒靜枝子　は油川女史と同校同級生にて、大阪北區上福島二の四百四十、醫師久恒彥一氏の長女なる、去る三十四年頃大阪府にて、前期試驗に合格し、昨年の暮には東京市にて後期學說試驗に及第して、今回實地試驗に及第し、目下實父の許へ歸省中なりと云ふ

◎平澤房子　は長野縣上伊那郡赤穗村平澤宗之助の長女にて、郷里の高等女學校卒業後、醫學を修めんと志し、兩親の許しを得て、去る卅三年上京し、神田區三崎町の女子醫學研修所、日本醫學校等にて研究を重ねつゝ、卅六年の十月前期試驗に及第し、更に此度實地開業試驗に及第したるなりと云ふ、當年廿四歲、

社會

生死と婚嫁

内務省の最近調査によれば、三十七年度中の、日本全國人口動態統計概要左の如し

○出生　一、四九二、三三九
（最多數　三六、七七六……愛媛
（最少數　一一、四六一……鳥取
○死産　一四六、七四〇
（最多數　八、〇一八……茨城
（最少數　八……沖繩
○死亡　九九二、六四六
（最多數　四五、二八五……東京
（最少數　八、一〇九……沖繩

右の統計によれば、出生に對する死産の比例は、一割弱にして、之を平均すれば三千一百強なり、これ實に少數なりとせんや、殊に茨城縣の如きは、府縣平均數に對し約二倍半の多數なり、是等は氣候上の關係もあるべく、衞生思想の如何にも依るなるべしと雖も、吾人は更に一の原因の伏在するを思ふものなり、更に婚家に關する統計を見よ、

○結婚件數　四〇一、七八四
（最多數　一七、三三七……新潟
（最少數　三、四〇一……沖繩
○離婚件數　六四、九〇八
（最多數　三、八〇五……新潟
（最少數　六一八……宮城

右の統計を算すれば、結婚數は一府縣平均八千五百四十八強、離婚數は一千四百八十五弱即ち約六分の一は離婚者たり、これ亦た鮮少と云ふべからず殊に結婚離婚共に多數なる新潟縣を見よ、結婚數は全國平均數の約二倍にして、離婚數に約二倍半なり之を宮崎縣に見るに、同縣の結婚數全國平均の三分の一弱にして離婚數は五分の一弱に過ぎず、之を以て是を見れば、新潟縣の如何に離婚數の多きかを知り得べし

以上唯だ概數を示したるに過ぎざれど、如何に死産及び離婚の多きかを察せらるべし統計學者は云へり『死産、離婚の多少は以て其國の文明の程度を測度する計數器なり』と、當局者は勿論、有識者は深く是等の點に注意する所なかるべからず、又た各家庭に於ても、人事の大問題を等閑視せず、慢に婚嫁せず、又た徒らに物質的に結婚せしめざらんことを希ふもの也

雜錄

人の務

文學博士　村上專精

これは記者が、去る七日巣鴨病院を訪ふた時、折ふし村上博士が患者を集めてお話があつた、誰も筆記して居る樣子も見えぬので、一席を借受け、その話を手帳中のものとしたが、精神病者の話を、本誌の讀者諸嬢に受賣するは少し妙なれど、其話し振に興味があるので、成るべくは口吻もそのまゝにこゝに寫して、精神病者ならぬ人も服膺して貰ひたいと思ふ(折柴園)

今日は私の方から御話をするより、あなた方に答へて貰ひたいと思ふ、我々は天地萬物といろ〳〵の中に、どういふ名前のついて居るものであるか、しかしそれを一々口で答へられたら、八釜しうて困るから、心で答へて貰ひたい、そこで我々は石でもない、瓦でもない、犬でもない、猫でもない、云ふまでもない人間であるといふことは、いかなものでも直に答へられるであらう、

まづ此問題はこれで片付いた、が人間はどんなものか、と問ふたらば、或は見た通りのものである、と答へるものもあらう、茲にあるコップ、こんな物は以前は無かつたので、その時に水を飲むものとも湯を飲むものとも知らず、これは何にするかと問ふた時に、こんな物、見た通りのものでは、答辯にも、說明にもならない、人に對しての事もそれと同じである、見た通りのものでは解らない、

昔からいろ〳〵の敎があつて、人といふものについてはチャンと說明が出來て居る、或人は人は人糞をつくる機械であるなど云うて居るが、これも道理のあることで、馬糞は馬、犬糞は犬、人糞は人でなければ製造が出來ぬ、誠に尾籠なお話であるが、生れるから死ぬるまで、二六時中、絶えず人糞を作つて居るには相違ない、然らば人といふものは人糞を

作る機械と定めることが出來るかといへば、それは肉體から見た話で、唯糞をつくる丈ならば、形こそかはれ、犬にでも馬にでも出來る、

精神といひ、魂といひ、心といふ方面の人とならねばならぬ、そこで色々の敎があり、物の道理が解つて、恩義といふ事も知れば、禮節といふことも知る天地間の萬物の中で、一番勝れたものとなつて居る、それであるから畜生奴といふやうな事をいはれると誰でも怒るに違ひない、實に人はどうしても他の動物が肩を並べやうと思ふても、兎ても其足元へも及ぶものではない、譬を引くも畏れ多いが、我々の肩の並べることの出來ぬ尊いお方はといへば　天皇陛下と答へる如く、大に立優つたものである、

實に人といふものは、萬物中右の如きえらきものである、この人は二つの考を有たねばならぬ、それは自己より下の者に對する考、自己より上の者に對する考、人より下のものといへば動物、以上のものといへば神佛である、劣つたものは優つたものに追使はれると同じやうに、劣つたものに向つては責任がある、義務がある、それは年齢の上にも、身體、智識、力量の上に優劣があつて、優つたものは、それ丈の責任がある、兵卒と將校と並べると、將校は餘程仕事が樂に見える、所がさう見える丈の責任があり、仕てゐること、控えねばならぬといふことが多い、であるから人は動物の眞似をして、糞をつくることを能事としてはいかぬ、動物に對して大に異る生活をし、動物を憫む心にならねばならぬ、又上に對しては、宗敎の信仰であつて、敎はいろ〳〵あるが、歸着する所は同じことで、我々の心に結び付く、我々が我々以上とする神佛の眞似をする、神佛の精神を以て神佛にます〳〵近寄るやうにし、行が神佛の心にならねばならぬ、さればその神佛は何處に御座るかと云へば、顯微鏡でも見られねば、望遠鏡でも見られぬ、そんな遠方に御座るかと思へば、手の動く所にも足の踏む所にも、神佛は充滿て居る、空氣と同じやうに、起臥にも伴ひ、浴場にも、散歩

にも、必ず神佛は離れて居らぬのである、

しかし肉眼では見えぬ、見えぬが神佛は光明を放つて居るもの、赤い顏をしてゞも居るものゝやうに思うて居る人もある、それは心の持ち方で、神佛の身邊を離れて居らぬ事は、芋の種を蒔けば芋が生る、よい事をすればよい報ひが來る、

佛教では自力と他力とを說き、基督は他力を說いて居る、そこで物に譬へて見れば、耕作をするといふ事は自力であつて、天地の氣候、土地の力、これは他力である、しかし自力は他力を呼起すことが出來るのであるから、神佛の他力を、精神と勞働の自力より呼起して、神佛の心と脊合せにならぬやうにせねばならぬ、決して因果の道理はどこまでも變更せず、影法師の如く附いて廻るものである、

あなた方が病院に在つての心掛は、我儘を云はぬ、腹を立てるといふことをせぬやうに、成るべく袖ふり合ふも他生の緣、因緣のないものゝ世話になつて居るも、神佛が人となつて救うて下さるのであるから、それらの事を思ひ合せて、よい心掛にならねばならぬ、神佛は決して人を捨るものではない、人が神佛を捨てぬやうにして貰ひたいものである、

經濟上手の夫婦

文學士　伊藤南陽

經濟上手なる妻は家の寶なりと云ふ、夫れにひきかへ、浪費して奢を好む妻は、身代潰しの大敵と知るべし、其妻、經濟の心掛あれば、身上手薄なりとも、妻の働によりて、勝手向きをゆるりとさせ、なほ其上に、人よりも安樂に暮すを得べし、經濟上手の妻は、時と物の價を知りて、みだりに大切の時を費さず、みだりに有用の物を使はず、何事も遠く思ひ計りて先を考へ、明日のことは今日より心積りして、前夜のうちに仕事の手順を運びおくが故に、いつも狼狽へさわぐことなし、加之、病氣其他のことに就きても、常々の心がけよければ、五日十日床に就く

とも、さまで手順の狂ふことなし、衣類食物等は、時によりて値段の高下あり、經濟上手の妻は、之を知りて、最も安き時を考へ、自ら町に行きて入用の品々買ひとゝのへ、財布の重みに従ひて買物の額をはかり、入ると出るとの權衡を失はぬやう注意す斯樣に妻が心がくれば、富貴になるを好まずとも、其家おのづから富み榮ゆべし、家具調度など、些細の品も、注意とゞけば、常に清潔にして缺損じ少なく、いつ迄も新らしく重寶するも、妻の經濟に巧みなる故なるを知れ、



あまだりも集りては小川をなし、小川の流も集れば海となる、少しの浪費も、氣を付けて省けば、大いなる儉約となるべし、されど不熟練の輩、やゝもすれば儉約と吝嗇と取違へ、儉約すべからざる處に儉約して、吝嗇家の誹をとることあり、儉約とは無駄を省くこと、吝嗇とは只管にもの惜みすることとなり、就中食物は、人間の一命をつなぎ、身體を養ふ大切のものなれば、食物にものをしみするは、我が肉を削り、一命を縮むるに異ならず、扨某處に夫妻共稼ぎの者有りて、互に劣らず、能く

稼げば、身代おのづとたまるべき筈なるに、毎年大三十日の帳〆は、辛く借金を免る丶のみ、遺る程には却々ゆかず、然るに、其隣に同じ年輩の夫妻有て、主人の名をジョウヂと呼べり、此ジョッヂ、あへて怠惰者といふほどならねど、格別目に立つ稼人にもあらず、到底隣の夫婦よりは稼ぎの薄き方なれば、随ひて収入も薄し、されど、年の終りの帳〆には、いつも二三百圓を遺すゆゑ、隣家の夫婦は不審に思ひ、必定主人ジョウヂの、經濟に巧なる故ならん、我等夫妻も隣のやうに、どうか金子を殘したしと、次の安息日に隣に行き、ジョウヂに逢つて仔細を問へば、我等方の生活法は、食物に儉約して、可及的無益な奢を省き、たゞ饑を凌げばよしとし、甘いもの喰やうとは少しも思ふたことは無しと云ふ、隣りの男、げにもとうなづき、其翌日よりジョウヂにならひ、紅茶を廢し、食事をもジョウヂ方よりは安上りとし、晝は野菜と肉類、晩は汁物と冷肉を用ひ、スポタ大祭日の外は、第三の一皿と後膳の菓子をも廢したり、然るに妻は不平顏にて、儉約するはよけれ共、かやうに喰物に儉約しては、自然と身體に障るべければ、せめて晝だけも三皿づゝ食すべしといへば、遂に其言葉に随ひて晝だけ一皿増すことゝしたり、此の儉約にて年末の帳〆、奈何にと樂みたるに、矢張やう〳〵借金なしに、新年を迎へたるばかりなりしが、隣家はジョウヂの才覺にて亦二三百のこしたり、夫婦は此よしを洩れきゝて、さては我々の儉約は、まだジョウヂに及ばぬ處有るべしとて、再び行きて尋ぬれば、食物の儉約も肝心なれど、其外に、尙時の儉約が肝要なり、我々は、朝五時に起き、七時に朝食をなし、正午に晝食、午後七時に夕食、晩は九時まで仕事をなし、夏冬ともに、此の時間を少しも違へず、其外何事もきまりを能くして、少しも無益に時を使はず、鍵にもせよ、鋏にもせよ、置き處を定めおけば、何がない彼が知れぬと、さがし物に時を費したることなく、暗黒にても知れる程ゆゑ、働く時間は少く共、仕事の捗行きは、貴君方

より宜いと云ふ、此の言葉に、隣の亭主は感服し、女房に其よしを告ぐれば、時間きめて働いたり、鍵や鋏の置處をきめる位は、誰にでも出來ることなりと、ことも無げに云ひ放ち、其四五日は、凡て隣家の通りに働き、朝も早くから起き、物の置處も定め、大いに便利を感じたるが、軈て次第に怠りて、また〳〵探し物に時間を費すやうになりたれば、さツぱり勉强の効能見えず、其年も亦、隣の二三百圓殘したるを羨みつゝ越したり、夫婦はつく〴〵歎息し、我々二人が、斯くまで心盡せども、尙殘すことのできぬは、何かまだ、外に秘傳のあるにあらずやと、今度は、夫婦伴れにて尋ねにゆきたるに、ジヨウヂは夫婦の者に向ひ、金といふものは、一概に溜めやうと、あがくのみにては溜るものに非ず、一方にてはため、一方にては使ふが、貯金の口傳なり、以前我々は、隨分外あそびをして、時には飮食もしたれど、妻を持つてからは夫れを止め、冬は火鉢の傍にて老人子供を相手にして、世間話しに晝のうさを忘れ、春秋の時候の良い頃には、子供や老人の手を引いて遊歩に出で、分相應の樂をなし、同じものを使ふにも一家打よりてあそぶを旨とし、家族の者をよろこばするが、樂深くして入費少なく、夫れが張合になつて、一家氣を揃へ、よく働くが故に、自然と利分も餘計にありて、年々殘るやうになるなりと告げたり、夫婦はなるほどゝ我を折り、家に歸りて、其次の日、ジヨウヂの敎訓を忘れぬため、左の文字を筆太に書いて、壁に張りつけたりとぞ、

第一　勉强　第二　順序を調へること　第三　節儉　第四　一家の和合　第五　辛抱

長壽の方法

工學士　長橋芝翁

壽命を短かくするもの

兎角非常に恐ろしいものは眼にも見えないし、耳にも聞えないものだ、イヤ眼に見えない耳に聞えない

から却て恐ろしいので、眼や耳でわかれば誰れでも之を豫防するに違ひない、たとへわかつたところで斯様なものは原因が深くて最早や手も足もつけられないが常だ、丁度雨が一滴〳〵落ちていつか知らぬ間に堅い石に孔をあけると同然であるから、何んでも其原因を早く知つて相當の手當をして置かねばならぬ、誰でも長壽を欲しないものはないのに皆短命であるのは、ナーニかまうことか、此位のことがどうならう、と天然の理法に注意しないから、ついこんな恐ろしい結果となるのだ、其時になつて驚いた様に吾は不幸だ薄命だと喞つのは、恰も雨滴の下に石を置いて孔が開いたので天を恨むと同じことだ、何んといふ馬鹿々々しさであらう、そこで壽命を短かくする者は何であるかといふに、その原因はいろ〳〵あるが、精神上道德上及び科學上諸大家の説を參考すると先づ次の如くである、老いて増々矍鑠たるを望み、いつも活き〳〵として年よりたくないものは、是非避けねばならぬ事柄である、

▽過食▽早食▽變情▽肉慾▽忿怒▽心配▽不潔▽過烟▽小心▽早婚▽猜忌▽煩悶▽過勞▽悲嘆▽憎惡▽遊惰▽無性▽放恣▽悋氣▽心の張り▽不安の念▽運動不足▽不潔の空氣▽睡眠の不足▽藥材の誤用▽感情の劇動▽晩き就眠▽晩き夜飯▽食事の不規則▽劇しき喜び▽穢たない食物▽不健康の空氣▽不健康の職業▽不健康の習慣▽空氣の流通せざる室

壽命を長くするもの

壽命を短くするものさへ避くれば、おのづから長壽になるは知れ切つたことであるが、尚ほ壽命を長くするものを擧ぐれば

▽衞生食物▽充分の咀嚼▽飲食の適度▽充分の睡眠時節柄の果物及植物をとること▽空氣の流通好き住居寢室▽周圍の物の衞生的なること▽日毎の運動▽健康の氣候▽健康の職業▽適當なる休養▽清潔▽節制▽早起▽快活▽歡喜▽公平の情▽同趣味の伴侶

▽婚姻▽貞節▽希望▽滿足心▽平和の念▽未來の信仰心、

長壽の食事

美しい贅澤な食事をして居るとどうも長生きしそうだが、それは大間違だ、マー長壽者を調べると殆んど凡てが、質素な淡白な食事をとつて、而して飲食の節制家であることは疑はれない、百五十二歳九ケ月の長壽を保つたパールは、牛乳、古い乾酪、粗造のパン、小量のビール及び乳精を食事とし、又百六十九歳の高齢で死んだヘンリー、チエンキンスの常食は最も質素であつたといふことだ、それからポールは四十歳までナツメジユロの實と水で生活し、其後はパンと水の外は何も食はなかつたが、それでも百十五歳まで生き、セント、アンソニーは八十歳までパンと水と小量のサラツドで暮らした人だ、之も百五歳まで生きたのだ、こんな樣な簡單な食事をして居ても、隱者ジニームスは百四歳、アーカデアス帝の師傅アレセニアスは百二十歳、ロムバルドは百二十歳、セント、エピフアニアスは百十五歳、シメオンは百十二歳まで長生した、まだこんな例は何程もあるのだ、

ドクトル、ゴルドスミスはかういつた『東洋の昔しの基督信者で、迫害を避けてアラビアの荒野へ逃れたものが非常な長命を保つたのは驚くべきである、食事は二十四時間僅かに十二オンスのパンと水計りであるが、彼等の健康と元氣は青年を凌ぎ、節慾の嚴格なるはとても想像が出來ない程だ』プロタークは『昔しのブリトン人は大に節制を守りて、百二十歳位になつてから始めて老人らしくなる、食事は大抵櫧子、漿果、及び水であつた』と記してある、又ヘロドタスはエシオピア人の話を述べて『彼等の食事は全く焙り魚と牛乳丈けであるが、その美しさと百二十歳以上の長壽を有つたことは著しき事實である』といつて居る

ローボサム曰く『昔時印度の遊行仙人等は宗教上の敎義によりて、ナンデモ太陽が熱さしたもの丶外は

食ふべからずとし、菓物と新鮮な植物のみをとりて別に料理はしなかつた、が、いづれも皆達者で百十五歳乃至二百歳まで生き延びたそうだ』

サー、ウヰリアム、テムプル曰く『ブラーミン人の倫理哲學は重もに身體の病氣煩悶を防ぐにあつた、之はそれが爲に起る精神の擾亂を恐るゝので、之に對し凡ての注意心配を避け、常に精神の確固を望むからだ、而して其節制は甚しいもので、米と草の外は何んでも食べない、もし病氣にもなるとこれは不節制の結果だと考へ、不倫を恥ぢて悲みの餘り死することが度々ある、併し多くは百七八十歳まで長壽を續けた、

カピテン、リレー曰く『アラビア人の或種族は只駱駝の乳計りで生活して居るが、それでも彼等は病氣もしないし、活潑で元氣で長生きだ、而して壽命は實際二百歳以上といつてもよからう、彼等の暮しは生れて死する迄規則正しく、食物は甚だ質素で滋養ありその上變化がない、氣候も乾燥で不變である、困難なる勞働はしないが健康に必要な運動は充分する、而して酒類は一切飲まない、之は宗教の禁制物であるからだ』ロード、ベーコン曰く『實驗上どうもピサゴリアン的食物、即ち隱者や坊主のとる質素なる食物が最も長生に適する樣だ、

フーフランド曰く『質素で淡白な食事は壽命を長くするし、複雜で贅澤なのは壽命を短くするものだ、長壽者は一般に勞働し、新鮮なる空氣を吸ひ、生活簡單にして天然と合一するものに存し、例へば百姓、植木屋、銃獵者等の如しだ、換言せば天然に從ひ其理法に忠實なるものは長壽し、之に反するものは短命である、で、比較的長壽者の多いのは、若い時から規則正しく菜食する人にあるを見ても思當るであらう、徒らに奢れる食事が長壽を助けると思はゞ大誤りである、

ドクトル、エヴアン曰く、『百歳以上の長壽者につき、殆んど二千程の材料を集めて、いろ〳〵考へたが、どうも其範圍が廣く、酒を飲むものも、飲まぬもの

も、肉食家も菜食家も、學者も勞働者も、貧人も富人もあるけれども、此材料を一括して斷案を下せば、長壽の大原因は食量を程好くするにあるのだ、ドクトル、フオルダイス曰く『長生がしたければ食事をつゝしみ、酒類を飲むことなかれ、兎角人は必要の倍、或は時によると四倍も五倍も食過ぎをする、もしほんとうに必要の食事さへ取つて居れば、消化の爲だといつて、酒類や刺劇物を入れる機會がない筈である、過食は少しも助けにならないで、却つて身體を傷ふばかりだから、大に注意せねばならぬ、古の大醫が『美食なれば人間に最も大切な滋養劑で、どの點から見ても之に優る有益な液體はない』といつたのは、大に面白い言葉ではないか、もう此位大家名醫の説を列擧したら、こゝで別に長壽と食事の關係を事新しく結論するまでもなく、讀者の胸中にはおのづからお解りだらうと思はれる、西洋の諺に『人間は歯で墓を堀る』といつてあるが、寓意する所頗る妙である、

百歳に達するのには

或有名なる醫者が臨終に及びし時、弟子達多く集まりて、師の死を嘆き悲しみけるが、ヤオラ師は重き頭をもたげていふ樣、『諸君嘆くまい、我が死んだとて、後に三人の大醫が居るではないか』と、餘りの言葉に、弟子達合點せず、互に顔と顔を見合せしが、其の一人『今天下に師に如くもの一人もある筈なし、三人の大醫とはそれ誰の事に候や』と問返せば、師は滿面に笑を湛へて『いざ三人の大醫を知らせ置かん、能く心して覺えられよ、一に曰く清潔、二に曰く運動、三に曰く節制』と答へたることあるが、さすが名醫だけあるといふものである、此大醫にさへ從つて行けば決して百歳に達せられぬことはない、生物界の大法則として、成熟する年齢に五倍したものが即ち壽命との事であるから、人間が廿一歳で成熟するとすれば、人間の壽命は百五歳に達することは不可能ではあるまい、ましてドクトル、マンローは其解剖學講義に『先づ自分の觀察した所では、人

體は機械の如く完全に出來て居て、體肉どこを見ても恐らく滅亡する痕跡がない、明かに永久持續する樣に計算せらるゝが、只管實驗上身體がそれを望まないことを知つた』と云つて居る位である、百歲に達したいならば、眞面目に之を人生の事業と考へねばならぬ。『蠟燭の兩端に火を點ずる』的の仕方は、靑年のとる道ではない、先づ健康を充分研究して、熱心に之を早年より實行すべきである、天然の理法に逆へば、其度每に自分の壽命から、時日、歲月を奪去ると等しいものである、長壽法は近道なしとは、サー、ブラオンと云つて居る、百歲になるにはさう容易いことではない、兎も角も嚴格に攝生する外はない、尤も醫藥で一時の急を救ふことは出來やうが、之で長壽を得らるゝものでないことも知つて居らねばならぬ、それよりか精神的療法の原理によりて、大危險を除くことは、慥かに出來るのであるから、はじめから陳べたところを充分熱考してもらひたい、

ドクトル、スミス曰く、『人の晩年と老衰とは普通同意義に考へられて居る、又晩年はザット虛弱と苦痛の時代を引延ばしたものゝ樣に想像されて、而して其時代には追々知覺衰へ、從つて面白いこともだん〳〵失せ、齒なく、眼なく、味なく、何もなしといふけれども、之が果して正しいであらうか、なるほど此時代は、肉體上の變化が一日々々と生活機能を妨げ、得るものも得させず、養ふべきものもとらせず。終に人生の焰が消える通り、老年を長くするとは出來るのである、つまり長壽といふのは、常人の考ふる如く、老衰及廢朽の時代を延ばすのではなくて、人間が充分生存の幸福を覺り、眞の面白味を多く感じ得、又同胞の爲に貢獻するに足る時代を擴げることである、であるから長壽は第一、喜びを持るしるしで、第二喜が増す道理で、誰も彼も長壽を希ふは、天然の本能と見て尤な次第である、

朝がほのつぼみ數ふる月夜かな

晝がほや岡にくちたる捨をぶね

日本赤十字社總會

日本赤十字社にては、去十二日午前十時より上野公園博物館構内に於て、戰後の臨時總會並に第十四回總會を開き、松方社長を始め、同社職員並に社員、有功者、支部員、病院職員、篤志看護婦人會員等無慮四萬三千餘名は、九時迄に參着し、招待員及社長以下、特別社員迄は、式場の右方に、又篤志看護婦人會員等は左方に、又一般社員は前面廣場に整列したるが、十時三十分皇后陛下式場着御、御先着の閑院總裁宮同妃兩殿下、其他各殿下を始め奉り、松方社長以下職員一同は、君が代の奏樂中御車寄に奉迎し、松方社長の御先導に依り、便殿に入御暫時御休憩中、松方社長は御前に進み、報告書其他の書類を上り、尚本社の現況を奏上したるに　陛下には一々御嘉納あらせられ、尚ほ香川大夫を經て、左の御沙汰を賜りたり、

御沙汰　明治三十七八年戰役に際し、赤十字社救護事業に盡力の段苦勞に存す、

松方社長は再び奏樂中に御先導　陛下には諸員最敬禮中に式場に臨御。各親王、同妃、王、同妃各殿下侍列、松方社長開會の辭を述べたるに、左の令旨を賜りたり、

令旨

本日日本赤十字社戰後臨時總會、並に第十四回總會に臨み、各員を見るを喜ぶ、殊に三十七八年の戰役に際し、能く救護の功を奏したるは、滿足の至りなり、尚將來社業の益々盛大ならこんとを望む、

右の令旨は閑院總裁宮殿下親しく拜受し、更に之を松方社長に授け、閑院總裁宮殿下には右の令旨に對し奉り、左の奉答を捧げらる、

茲に日本赤十字社戰後臨時總會並第十四回總會を開くに方り、畏くも
陛下の親臨を仰ぎ、優渥なる令旨を拜す、洵に無上の光榮なり、本社は三十七八年の戰役に際し、救護の事業を實施して、幸に蹉跌なく、完結を告ぐるを得たるは、汞社員熱誠の致す所と雖も、抑々亦至仁至慈なる
陛下の庇護を蒙るに由らずんばあらず、實に感激に堪へざるなり、尚將來益々一致協同して、社業の擴張整理に勗め、以て
懿旨に副ひ奉らんことを期す、謹て奉答す、

日本赤十字社追弔祭

赫々の武勳世に知らるゝにもあらず、砲烟彈雨を浴ぶるの危險は、毫も戰鬪員と異なるなく、その職務の重大なるは、戰鬪員に勝るとも劣るなき赤十字救護員の功績は、今さらいふの要なかるべし、この艱難と功績とありながら、非戰鬪員の名の下に隱れて、世に知られざる救護員の中に、陣中に病沒せし人の如きは、殊にその功を表旌し、その死を追弔せざるべからず、日本赤十字社戰後總會の終れる翌十三日を以て、救護員死沒者の追弔を行はれしは、その當を得たりといふべし、祭塲は上野公園大神山の一隅に老杉巨檜を縫いて張りめぐらしたる紅白段々の幕は、五町四方ばかり、塲内には手品太神樂住吉踊軍樂隊等の餘興絶えず催ふされ、來會せるは本部支部の職員委員篤志看護婦人會員赤十字社看護婦等約二千餘名、さしも廣き會塲内も狹隘を感ずるばかりなりき、

祭壇はパノラマを背にして建られし檜皮葺の祭舍、何の裝飾もあらざれど、淨々しく神々しく、樅樫の巨木これを圍みて樹てる、幽邃の趣ありて、大に祭塲の莊嚴を深からしめたり、

摺鉢山の上には皇族席の設けあり、閑院總裁宮殿下、同妃殿下と共に御着あらせられぬ、殿下は戰時裝、妃殿下は黑色の篤志看護婦服を召され、赤十字の記章を佩ばせられたり、

かくて午後四時の定刻となるや、祭壇の左方なる篤志看護婦幹事以上席、遺族席、右方の皇族席親任勅任奏任官席等は空席なく一般列席員は祭塲を環りて、圓を劃せる中に、莊嚴なる追弔祭式は執行はれたり、祭官は靖國神社の石井禰宜主となりて奉仕し、先づ招魂の式に初まり、獻饌を終れば祭主松方社長は靜々として脊弦の階段を登り、恭々しく玉串を捧げて、左の祭文を讀上げたり、

祭文　日露戰役を啓き、王師海陸長征の將に當り、我日本赤十字社は軍衙の命令を奉して、直ちに救護事業を實施し、爾來内外各地に派遣せる救護員五千有七十人の多きに及べり、而して救護員は篤く社旨を體し、艱難に耐へ、困乏を忍び、能く其任務を完うし、彼我の別なく、救護の實績を擧げ、大に中外の賞讚を博し、畏くも天皇皇后兩陛下より優渥なる勅語令旨を賜はりたり、本社の光榮誠に大なりと謂ふべし、顧ふに此間に在りて、獨り傷心に堪へざるは、救護員及船員の中身命を職事に致し、不歸の客となりし諸子是なり、今や諸戰役に於ける救護業務結了を告げ、戰後臨時總會を開くに方り、皇后陛下親臨の榮を賜り、社員の來り會する者數萬人、而して諸子は幽明路を異にし、此の盛典を共にするを得ず、哀哉、茲に、今次の總會を機とし、本日を以て諸子の爲め追弔の典を擧ぐ、嗚呼諸子は寒風膚を裂く時、炎日金を鑠すの候、怒濤激浪の上、傳染病毒の間、種々の困苦を顧みず、日夜勤務に從ひ、其職事に斃れたるは、獨軍人の銃を執て戰場に死したるが如し、其身を致し國に斃れたる、功緒は永く世へて磨滅せざるべし、本日は辱くも總裁殿下、同妃殿下の光臨を賜ひ、又大官貴紳の臨場を得、且つ總會の爲め各地より來會の職員救護員及特別社員の參同せられたるは、諸子身後の光榮にして、庶幾くは靈魂を慰するに足らんか、茲に社員百十六萬餘人に代り、恭しん弔祠を進へ衷誠を表す、魂予其れ來り享けよ、

明治三十九年六月十三日

日本赤十字社長　伯爵　松方正義

瓊子内親王（三）

三島江月

入

小島に着かせ給ひては、先づ後鳥羽院の御遺跡は何方ぞと訪ねさせ給ふにも、それと許りのしるしだになく、況して其の邊りは人の往來もいと稀にて、たゞ目に觸るゝものとては、海人の鹽燒く里ばかりはるかにて、よろづ哀れなるを御覽じやらるゝにも、斯かる侘しき所にて世を盡くし給ひけむことの、如何ばかり御心ぼそう恨めしうも御座しましつらんかと、いと哀れに傷しくおぼさるゝにも、今また我が身も同じさまにて、斯かる所にさすらふも何によりてかは、その上の御遺志をも果して御心慰め奉らむとての業なり。されば苔の下にても憐れとや思さるゝならむと、古につけ今につけ、よろづかき集めていと哀れにも掻き暮れ給ふなりけり。

かゝるほどに佐々木隱岐判官淸高は、海邊より少し入りたる知夫里郡別府村なる國分寺といふを、よろしきさまにとりつくろひて、假りの御所とはなし奉りぬ。

路次の御警固として御供し奉りし數多の武士どもも、今は都へ還り行けば、人げも稀れにて、浪風の音のみぞ荒れまさりつゝ。

かゝる磯邊に蜑の苫屋と軒をならべて、おのづからことゝふものとては、浦に釣する蜑小舟、鹽やく煙のなびくかたをも、我が故鄕のしるべかとばかり眺め過ぐさせ給ふ御住居は、何時までと月日を限りたらむだに、明日をも知れぬ浮き世の侘びしきを、況して何時をはてともしら浪の、立ちてはからき世の中に、めぐり逢ふことさへ難き雲の浪、煙の波の幾重とも知らぬ境に、世を盡くし給ふべき御有樣、思ひまつるも哀れなり。

また或る時は、み空晴れわたりて、風おだやかに浪たゝず、海原とほく目も遙かに、伯耆の山影かすかにも、それかと許り打眺めさせ給ひては、如何ばかり皇女の御身の上をば、御心にかけさせひ給けむ

かし。

九

いとも佗びしき鄙の地に、たゞ一人とゞまり給ひし姫宮は、たゞ如何せんとばかりくれ惑ひ給ひつゝも、なほ過ぎにし方のみ偲ばれて『猛き夷の障りも、可弱き女性の身ながらも、嶮しき山坂はる／＼と、此處まで御供しまつりしは、御父君の傍ちかく侍りて、朝夕に御心慰め奉らん、孝養盡し奉らん爲なるを、今はそれだに叶はぬのみか我が身さへ、賴る方なき伯耆路に、夜啼きわたる雛鶴よ、神も憐れと聞し召せ、憎きは逆臣北條よ、わらは侍りてなどあらむ、千里の山川うち越えて、此處まで下り來しものを』と、來し方ゆく末のことゞも、つく／＼案じ煩らひ給ふにも、こを慰めまつる人だになきぞあはれなる。

かくて姫宮は、花散る晨雨の夜半などは殊更に、小島に御座す御父君のうへ、かつは我が身のことなど、つく／＼思し亂れ給ひしぞ。やゝ暫時して何か心に思し召すことのありけむ、容を正し給ひて御歎きの態打解けて、御氣色さへも麗はしう耀きて『あゝ恨むまじ恨むまじ、朧げながら悟りたり、定めなき世の憂き身ぞと、定めなき身の浮き世ぞと。されば今よりは人をも恨まじ身をも歎かじ、たゞひたすらに浮き世の外の山蔭に、君の御爲、我が身の爲に、黑髮おろし墨染に、法の敎に從ひて、木の花さゝげ閼伽を汲み、御佛に仕へ奉らむこそ、今はなか／＼我が身の願ひなれ』と御心かたく定め給ひしは、いとも尊きことゞもなり。

十

伯耆の海の遠方に、煙か雲かしら浪か、少女の眉をひきなすは、隱岐の小島の影ぞかし。

さても姫宮は、たゞ一人いとも佗しき鄙の地に、浮氣なき世を送らせ給ふものから、花鳥につけ雨風につけ、はた雲まよふ夜半の月影につけても、小島に御在す御父君のことのみ思ひ出させ給なりけり。荒磯に立ちてたゞ一人、冲をはるかに眺むれば、

かすかに見る隱岐の島、あゝ父君戀ひし懷かしと、呼べど叫どよしをなみ、たゞに音なふものとては、荒れまさる浪風の音、巖に碎くる白波や、礒邊にちゝと鳴く千鳥、いづれも涙の種にして、吹き荒さぶ汐風からくも御袖を濡らしまつるぞ傷ましき。さらばよし、せめてあひ見むよすがとて、父君おはす彼の島の、見ゆるあたりに宿らんと、車尾の驛を立ち出でゝ、高きわたりの山市場、住みもならはぬ山蔭に、草の庵をむすびてぞ、み姿かへて御佛に、早く治まる世となりて、還幸あらせ給ふやう、祈り給ふがあはれなる。

あたりに匂ふ八重櫻、今を盛りと見たまふも、過ぎにし都の花の宴、思ひは彼方に通ふらむ。夏の初めになりぬれば、雲間に叫ぶ吐血鳥、垣根に匂ふ卯の花に、軒端に薫る橘に、昔の人ぞ偲ばるゝ。月あきらけき夕まぐれ、憂さをはらさんつま琴の、音にぞ通ふ松風も、いとゞ哀れに聞ゆなる。物あはれなる雨の夜や、いと思ひ出の種ぞかし。

何時しか夏も過ぎゆけば、秋の上葉に音づれて、初秋風の吹き來り、山もやう〳〵紅葉して、さそふ木枯はら〳〵と、木の葉も今は散り失せて、ものゝ哀れを增すものを、況して月影さゆる夜半、天地寂たる折もあれ、鳴きゆく雁の一聲を、聞きつる人や如何ならむ。古里偲ぶ益荒雄も、堪へで涙の袖の上に、月影やどすと聞くものを、まして淋しき山里に一人憂き世をかこつ身の、如何に哀れを感ずらむ。げに姫宮は、遠く聞ゆる浪の音、間近う荒ぶ松の風、隙なく誘ふ哀れさに、小島に御座す御父君のことのみ、案じ煩はさせ給ふなりけり。

或る日の夕暮、この山里に住める一人の翁、いとまめやかにも初栗を献じまつりぬ。姫宮は此の栗の實を眺め給ふにも、過ぎにし方の偲ばれて、われ此の山寺に入りにしは、花咲く春の盛りなりしを、今は何時しか秋ふかく、木の實さへも熟る頃とはなりしや、さるにても御父君は、今や如何にしてか御座すらむ、浪風の音に夜もすがら、露まどろませ給は

ぬこともありとや、あなかしこ、せめてわれ御傍に侍りなば、如何にしてか慰め奉らむものを。さて何時かは都に還り給ふらむ。われ、これをのみ朝夕に、ひたすら祈り奉つれるものを、神も聞し召さぬにや、佛も憐れと思し召さぬにや、ともかくも試みばやと思召しけむ、彼の栗の實一つを取りたまひて、つく／＼と眺めたまひしが、やゝ暫時じてのたまふやう『今この栗を嚙み碎き、植うるこの實の生ひたらば、日來の祈願叶ひなむ、此の栗若し朽ちはてなば、祈願叶はぬ驗ぞ』と、ひたすら御佛に念じたまひつ、斯くして植ゑさせ給ひけり。

何時しか年も暮れぬ。常に眺めたまふ庭に面に、木の芽の春ともろともに、彼の栗の實は、いと勢ひよくも生ひたちにけり。こを見たまふ姫宮の御喜びは如何ばかりなりけん。靈しき驗にたがひなく、早く治まる御代となりて、還幸あらせ給ふやう、やがて／＼と切にこれのみ待ちたまひたりけり。

老女村岡（上）

橘 総子

秋の嵯峨野といひもてはやしたる、あはれ幾世の盛衰のあと、はかなしと見るからに、いとゞ物わびしうなつかしうて、只何となういにしへの事のみぞ忍ばるゝ。一もとの木かげに立ち寄り、一基の石にやすらひてすら、誰がなさけの露に榮ゆる草木ぞや、誰がやさしう作りなしゝ家のいしずゑぞや、と在りしは亡き數に入り、藪も住家も田にかはりゆくおもかげには、そゞろに物のあはれをもよほして、麥秀でゝ漸々たり、など口ずさびて、打ち泣かれぬめり。御幸たえにし小倉山の坤に、嵯峨の帝のみさゝぎはいと高う尾の上に仰がれましましぬ、みな人これを御廟山といひて、其の實名を知らず、月潭和尚が十四勝の詩には屛障峰といへり。紫翠環列して屛風に似たる故なりとぞ。北の方に位して嵯峨野の鎭となれり。

其前に長尾山緑こまやかに裾長う横たはれり、又さらに形とゝのへるがありて、かの二つの山を右左にひかえたるは、さながら大鳥の翼を張りたらんやうなれば、その中なるを祥鳳山とぞいふなる。げに羽根うちかざして天かける姿なりけり。

祥鳳山のふもと、長尾山を前に望みて。たゞ一むねの淋しげなる庵ぞある。ざわ〳〵とそよぐ篁のひゞき、喧しからぬほどに鳴く蟬のもろ聲、いとしめやかにて、岩にせかるゝ谷川の折々松風にかよひて、さら〳〵と音するは、晝も猶心しづまりぬべきを、あしたには白雲の二つ三つ四つ、引きちぎりたるさまして、嵐山の方よりさまよひ來ぬと見れば、此かしこ木立軒端のあたり、薄霧のやうに立ちおほひたる、いとのどやかなり。餌をあさる鳥のねぐらより出でゝ、人あらんともしらず、庭に下りたちてはまた梢にうつりて鳴くこゑのきのふにまさりて新なるに、やがて尼君のあしたのつとめ始まりぬれば、木魚のいとあはれにて、其道に疎きおのれらしも世の外なる心地ぞする。日影西にかたぶきて、人あと絶ゆる頃よりは、淋しさ一きは身にしみて、水鷄のたゝく音のみいとしきりなり。夜ふけて、折り〳〵遠山に稚兒のさけぶやうなるは、古狐にもやといひ定めたるもをかし。名もしらぬ蟲鳥の、所えてさそひ鳴きたる、いたう心にくゝ優しげなるに、いま一たび聞かまほしくおもへば、あやにくに聲をしみして、目なれぬ翼をしのびやかにうちて、谷より山にまよふやうなる、暗夜にはいとものすごし。

長尾山のふもとをたどり、竹藪うちおほひたる穴道を出づれば、この世はなれたる草庵は、かなたの山ぎはに、きはやかに見ゆ。苔むしたる石橋渡り・茶畑にそひて、坂路を分け登れば、直指庵と太う記されたる扁額のまづ目にとまれば、庵の名は問はずしてぞ知らるゝ。黄檗隱元が筆の跡なりけり。此の僧庵は、正保のむかし(今を距ること二百五十年頃)獨照圓尙和の開基にして、初めは沒蹤庵と呼びけるを、後に直指庵とぞ改めたりとぞ。獨照和尙・其德さはめて高かり

ければ、渇仰するもの日につどひて、太上法皇、親王、公主の上々すら、就きて道を問ひたまふに至り諸々の公卿大夫は一たび之にあふことすら、いたく榮と思ふばかりにて、世擧りて眞の古佛といひあへりしにも、つゆ其心動かさず、苟にも其名を衒はじとて、こを寺とはいはで、單に庵の名をまもりたるはいみじき心ばへなりとぞ、今も人々のたゝへあひける。この頃明の隱元來朝して、長崎にありときゝて、獨照自ら行きて之を迎へ、しばし此の庵にすゑたりしが、其後隱元こゝより宇治に移りて、黃檗山の基を開きたるなりとぞ。此には月潭蘭谷など名僧智識衣鉢をつぎて、其ほまれ世に高く、堂塔輪奐をきはめて、其かたき基のいく世へたらんも後にかゆらぐべしとは、人おもひおきてんや。

かくても常住ならぬ世のならひにはもれず、盛極ればまたいかでか衰なからん、法燈影くらくして、誦經のこゑ潛まり、名跡空しく絶えて、遂に只狐狸のすみかとかはりたれば、吹く風に壁落ち、廂かたぶき、簀子やぶれて、雨露をふせぐにしも堪へず、三代の聖人のかためたる寺あと、嵐木かげにむせびて、苔とこしなへに冷なり。

變りゆく世のありさまは、いかでたゞこゝにのみ限らん。宮殿樓閣は其所在を失ひ、思はぬ方に玉の御座の仰ぎやらるゝも、皆々の例なりけり。幾度かさわがしき世の變遷にあひて、只はかなきあとをのみとゞめたる嵯峨野の末に、いまはに思ひ出の涙の種の數そひにしを、住みなれてそを目の前に見し人のなげきこそ世の常にはあらぬ。心ある人の眼、情ある人の涙は、いく年月か只この方にのみそゝがれたる。

かくて世の盛衰をたゞ一目に見渡さるべき此の庵の古跡は、果しなきまで衰へてまた盛に向ひ、陰極りてまた陽に復りぬ。それ芝蘭の室はおのづから芳ばしとかや。後世一代の名婦おこりて、此の庵を復興し、一もとの芝蘭は、嵯峨野の末に芳ばしく薫り初めぬ。

大覺寺の世臣に津崎左京といふ人あり、その女にたづ女と云ふがありけり。其性極めてかしこく、よろづにたちまさりて見えけるが、十二の折より京にのぼりて、左大臣近衛基前公が侍女となりて、かしづき仕へけるほどに、其ふるまひいとまめやかなりければ、公のおぼえめでたくて、間もなくつかさ位も移され、祐筆若年寄などを經て長く老女の職にあり、其名たかく世にあらはれたり。そが職の名は村岡と呼び號を矩子といへり。其ころ上より賜はりし稱なりとぞ。

かくて六十とせの久しき間、たゞ一すぢの操を君にさゝげて、生涯人に嫁がず、願ふ所は衰へたる王朝を起して、君臣の條理を正しうせんとのまごゝろなりき。さればいたく志氣にとみて、日頃のふるまひ並々にあらざりしかば、上下深く頼みかはして威望たゞその一身にあつまりぬ。

當時幕府には秕政多くて、朝威日に微なりければ、悲憤の志士みな眦をさきて王政復古を叫ばぬはなく、いづれも近衛公を首領にいたゞき其黨を正議派となづけて、必幕府をたふさんと誓ひけるが、中にも清水寺の僧月照、薩摩の西郷隆盛などしばしば近衛家に往來して、其心を語りきこゆるに、村岡その間に立ちて、心を砕くこと大かたならず。常にそが秘密の議にもあづかりて、三人の交水魚にもおとらざりけり。さるほどに、幕府の正議派を惡むこと世の常にあらず、天下に物色してこを求むること急なれば、正議の人々、いまは枕を安うする所だになく、西郷は月照と海に沈み、其他は捕はれて概幕府に送られたり。あはれ平相國がいにしへも忍ばれて、心細さの限りなきを、村岡をみなの身ながら、亦はやくより幕府に目ざゝれ居たりしかば、召捕の籠は物のなさけもしらぬ顔にて、嵯峨野の原をふみしだきつ、其家に向ひ來りぬ。此の時村岡年七十にあまりたれど、男にも立ちまさりて、聊恐るゝけしきもなく、伴はれてまづ伏見の奉行所に送られ、此にて詮議を受くることゝなりしに、御身たちに物

云ふべきかは、早く幕府に送れかしとて、一言をだに云はざりしかば、其まゝだうまる籠にて江戸に送られしに、幕吏あら〳〵しく問ひ試みたれども、村岡才辯流るゝが如く從容として正理を說き、公衆の此はさらなり、武家諸侯のきは〳〵まで。さては公武の關係をも、幕吏のわきまへぬ事まで答けるに、いづれも驚きたゝへざるはなかりしとなん、かくて三度白洲に召されけるに、こを傳へ聞きし市民等、いかで一たび高名の村岡見ではと、ひし〳〵とつめよせ來りて、通行もかなはぬやうなりしを、かくとも心得ぬ村岡其夜歸りて、けふは何事のありてか人多くつどひて、步行もかなはざりけり。と其まもりの人にいふを、何事のさふらはんや、いづれも御身を見んとてまかりぬるにてさふらふと云へば、さては此のしわみ嫗をか、とてから〳〵と打ちわらひたりといふなど、いかばかり、心の廣かりけん。かく其名は囚人なりけれども、女の身、わきて先將軍の御臺所によしある中らひとて。其手あつきもてなしいふべくもあらず、花やかなる邸にあづけられ、衣服調度足らはぬ物なく、人あまたつけて、これもかれもとたゞ其憂を慰めんやうせられ給ひたれど、わが身のほどを思ひて、要あらんものゝ外はいづれも受け給はざりしとはいかばかりかしこき心がまへなりけん。

姑と嫁

高橋五子

人間は兎角に我が物びゐきにして、我が物と思ば、重きものも輕く思はれ、汚きものも美しく見え、堅きものも柔らかに思はれ、馬鹿なものも利口に見ゆるが常なり、故に天保時代の婦人が、天保びゐきするも、明治の女子が明治びゐきするも、皆此の我が物びゐきの心より起るなり、

世には、古の婦人を稱賛して、今の女子を貶する人あり、今の女子を稱賛して、古の婦人くさす人あり、又古の事を悉く善となし、今の事を悉く惡しと思ふ

人あり、此等の人は、世を一方より窺ひたる人にして、所謂世間識らぬ井の蛙といふとも、無理ならざるなり、何時の世にても、善人惡人のなきことなし賢者と愚者とのなき時なし、豪傑と卑怯者とのなき世なし、賢婦と懦婦とのなき代なし、古に於て、賢女烈婦と稱せらるゝ人は、今の世に於ても賢女烈婦なり、古に智者達者と名づけらるゝ人は、今の世に於ても智者達者なり、古の豪傑は、今の時に出しても豪傑なり、此くの如く、もし今の豪傑、智者、賢婦をして、古の世にあらしめなば、これ亦賢婦智者豪傑なり、凡夫が、時代の異るによりて、智識と膽勇との増加せしためしを聞かず、智者剛勇者が、時世の變遷によりて、智識と膽勇とを消滅せしためしなし、智者豪傑は、何時の世に於ても智者豪傑なり、凡夫懦婦は、何時の世に於ても凡夫懦婦なり、

然るに天保時代(天保ばかりに限らず凡て年老いたる人)の婦人にして、明治の女子を是非する人は云へり、明治の女子はお轉婆なり、明治の女子は人情薄し、明治の女子は禮儀を知らず、貞操を知らず、孝道を知らず、舅姑に事ふる道を知らず、實に我等の目より見るときは、世の澆季になりゆくにつれて、人間が斯くまで墮落せしかと思へば、歎息するの外なきなりと、又明治の女子にして、天保時代の婦人を是非するもの丶言を聞くに、天保の婦人は、何故に理屈にうときか、何故にあの樣に口喧しきか、何故に頑固なるかと、世は實に彼はこれを誹り、これは彼を誹りて、恰も古今女子の角突合の如し、斯くの如きは、殊に姑と嫁との間に多しとす、人此の世に生れて、幾十年の世渡りをなす中には、到底姑ならざるを得ず、嫁ならざるを得ず、一度姑となりたるものが、其嫁たる明治の女子をして心も思も、風俗も擧動も、悉く己の心の如くなさしめんとするは、到底能はざることなり、又嫁たるものが、其心、其風俗、其他萬事に就きて、己が心に任せんとするもかたし、人は如何に辛苦するも、他人を己と一樣にせんとするはかたし、現在己の腹より出でし子にすら、己と

名士の妻帯論と無妻論

無妻論

(一)経済上の運命は独身者増加の一原因にして、之を国にすれば仏蘭西の如き其適例なり、普仏戦争以来国民経済上の悲境は、中流以下の社会をして結婚難を謳はしめ、其結果は竟に独身生活の流行となれり、朝鮮の細民も亦恐くは其例に漏れざるべし(二)僧侶の禁欲主義も亦一原因たるを失はず、僧侶の如きは即ち此主義より出づる独身者なるが、思ふに欲望を解脱し、煩悩を去るは、仏徒の主唱する所にして、両性的欲望は人類欲望の最も大なるものなれば、先づ情欲の禁圧を試みんとするの主意に外ならざるべし(三)境遇の結果、此部類に属すべき独身者の中には、或は妻を亡ひ、遺児の養育と一家の平和の為に、一身を犠牲とせる者もあるべく、或は弟妹に学資を給せんが為に、営々として一身を顧ざるもあるべく、是は至大の同情を注ぐべき独身者なり(四)成功主義の独身者は社会の有力者に、多く、ゲーテ、カント、スペンサーの如きは、其顕著なるものなり、ゲーテは独身に非ざりしも、其屡々婚約を破りて顧みざりしは、恐く此主義よりせるものと言ふべく、此主義に因る独身者は、独身生活其物を喜ぶにあらず、唯己れの欲する所を遂げんが為めに、性欲を擲うてるものなるべし、(五)雌雄淘汰により、孤独の生活を送る者は、最も同情すべき独身者にして、此淘汰には、精神の内外に於ける長所、財産の関係材能及び名誉、外貌親切等最も有力なる標準となり、外貌は婦人に於て殊に有力なる標準となるもの丶如し(六)失恋の結果こは道徳学者の口にする悲む所なるべきも、道徳は社会を離れて立つべきにあらず、社会に斯る独身者の存する以上、斯る語を用ふるも亦余儀なからん、以上の各種を綜合すれば、独身者にも有害なるものと無害なるものとあり、社会上の見地より言へば、独り己をよくして満足せんとする独身者は好ましからず、自暴自棄の独身者は、危険なるものと言はざるべからず、成功主義の独身者は、概して有為なる独身者なるも、此は男女の性欲以上に大なる理想を有するものにあらざれば、学び得る所にあらねば、斯る独身者は鼓吹するも増加するものにあらず、之を要するに独身者は、有害ならざる限り社会も之を不徳視すべき理由なるかべし、フランシス、ベーコン曰く、結婚せざる人は良き友、良き主人にして、善き仕事をなす人なるも、善良なる国民と言ふ可らずと、女房子供を持たざる人の人情に疎き所あるは、争ふ可からざる所なるべく、独身者其人の利害問題よりしても、妻帯の利益なる事多し、例へば銀行が無妻の人に現金の出納を委かすを危ぶむが如きも此一例にて、スペンサーが倫理を研究し、親子の情を論ずるも、独身者の言として読者の同情を惹くこと薄きは、是亦独身生活の欠点とも見るを得べし、之を要するに独身生活の善悪は社会の発達進歩に及ぼす影響を標準として、社会的に之が解決を与へんのみ

學生などは尠くとも獨身の覺悟なかるべらず、肩揚のある時代よりホームを云々するが如きは、斷じて喜ぶべき顯象にあらざるべし、倘獨身生活に就きては二つの疑問あり、人口の增加は國運消長の關する所なり、統計的に之を算出すれば、一國現在の人口を維持するには、一人四人宛の兒女を設けざるべからず、人口の增加を謀るは一人四人宛の兒女を設くるを要す、然れば獨身者の增加は、更に此割合を增しむる譯にして、獨身は人類の責務を果すこと能はざるものの如し、此點に於ては晩婚者も、其責任の一部を分たざるを得ざるべし、尤も此疑問は一方に於て、其れ以上の貢獻を社會になし得れば、解釋を與へ得ざるにあらざるも、婦人に對する疑問は、目下大に研究を要すべきものなり、日本の風俗として結婚は相當の媒介者あるを要し、昔時は媒介をなすを社會の義務と考へしも、世運の進歩するに從ひ、社會は寧ろ媒介の煩を避けんとする傾向あり、而も一方には自由結婚に對する反感は、倘極めて大なるが如し、其狀恰も餓ゑたる者に食を示して、之を與へざるが如き觀あり、之れ恐らく婦人の最も困難を感ずる所なるべく、此が救濟の方法を講ずるは目下の急務なるべし云々（三輪田文學士談）

妻帶論

△自分は元來軍人無妻論者で有りました、特に海軍々人の如きは、軍艦を家として常に働いて居る者で有るから、妻帶をして家庭を作るには不適當だと思ひました、△英國へ參りました時、英國の海軍々人は多く無妻で、中將少將あたりにも無妻の人が多く、佐官尉官に至ては大半無妻で有ることを見まして、愈々自分の無妻主義が良いと考へました、△一身を國家に獻けんと決意したる軍人が妻帶をして係累を作るは宜しからずとの意見は、英國海軍々人の實狀を見て、一層鞏固になつて居りました、△然るに今回の日露戰爭に於て、日本の國情は外國と趣を異にし、妻帶せる軍人の方が無妻の者よりも良い事を發見しました

△それは日本の家の勢力が、外國よりも偉大なる故で有て、日本人が家名を尊重する精神は、世界無比で有ります、△家庭は擧げて、其の家の名譽を思ひ、何人も其の家名の爲めには、何者をも犧牲とする精神が有る、△故に日本に於て妻帶するも、妻子は少しも軍人の係累とならざるのみならず、妻子は却て軍人の後援となる、△獨身者は往々にして無責任の事も有るが妻子ある者は名譽を尊重し、生きて恥辱を取らんよりも、死して家名を宣揚する精神が高い、△臆病者となつては妻子に對する面目がないと云ふ精神は、常に妻帶軍人の胸中に輝いて居る、△又家鄕の妻子が、常に出征軍人を激勵して居る勢力は、我邦軍人の勇氣を增進するに與て力が有ツたと思ひます、△要するに私が本來の無妻論は、全く謬見で有て、日本に在ては軍人の妻帶が必要で有ると云ふことを、私は日露戰爭の實際に徴して悟りました、（財部大佐談）

共にすること能はざるは、世間往々見る所なり、こを察せずして、姑が時世と敎育との異りたる嫁をして、己が意の如くなさんとし、將た己が意に叶はぬとて、一目散にお轉婆との〻しり、貞操なきものと云ひ、舅姑に事ふる道を知らず、禮儀を失ひたるもの、人情薄きものとつぶやく等の事ありては、これ決して正當の言といふ能はず、何れの點より見るも、姑其人の無理と云はざるべからず、又嫁が舅姑を稱して、頑固との〻しり、口喧しとつぶやき、理屈にうとしと云へるも、皆時世を見ることの昧きより生ずるわざなれば、亦正理に叶ひたる言といふことを得ず、

そも姑と嫁との衝突は、今の世に始りたるにあらず、時世と敎育との變遷によりて、幾何か姑の心の嫁に叶はざることもあり、嫁の思の姑に合はざることもありて、以上の如き衝突を來すことあれども、姑の云へるが如く、あながちに、明治の女子が人情薄きにあらず、禮儀を知らざるにあらず、舅姑に事ふる道を知らざるにあらず、お轉婆なるにあらず、明治の女子にも貞淑婉順なるあり、舅姑に對しに鄭重至らざるなきあり、禮儀の正しきあり、人情の厚きあり、又嫁のつぶやく如く、天保の婦人があながちに頑固なるにあらず、口喧しきにあらず、理屈にうときにあらず、天保にも英明果斷なる人あり、溫厚沈默なる人あり、開化せし人あり、故に一目散に偏りたる見解を下して、彼を是としこれを非とし、彼を非とし、これを是とするは、吾等の決して首肯すべきことにあらず、これに依りて之を觀れば、天保明治の區別なく、何れの世にも賢愚と善惡とは、並び存ずるものなれば、明治の婦人は惡く、天保の婦人は善く、天保の婦人は貞にして、明治の女子は不貞なりと確定する能はざるなり、明治にも貞婦あり、不貞婦あり、天保にも貞婦あり、不貞婦あり、

且つ今の世に當りて、天保の婦人が、如何に己の意に叶ひたる、己れ同樣の嫁を迎へんと辛苦し、又今

の女子が、己の意に叶ひたる己れ同様の姑に事へんとするも、到底能はざることとなり、されば、如何にしても姑嫁は、新古相合はずしてはえあらぬものなれば、互に古今を是非して氷炭相容れざる心を盛にせんよりは、心打ち解けて、姑嫁互に容るゝやうつとめたらんには、如何ばかりか利益ならん、而してこをなさんとするには、まづ互の心に寛恕てふ心を養はざるべからず、即ち姑は、嫁の教育と時世とが、己の成長盛りの頃より大に變遷せしことを察し、其嫁の擧止、動作、進退に於て、其意に叶はぬことありとも、己れ此の氣に入らぬ嫁に接せずしてはえあらぬ時代に生れ來りしなれば、今更更生すべき術もなければ、あまりに甚しき事にあらざれば、嫁の心に任せ置くぞよき、明治の女子と云へども、決して心なきものにあらず、且つ其受くる所の教育も、古よりは幾何か進歩し居れば、姑よりやさしくしむけたらんには、決してこれに抵抗する故なく、却りてこを尊崇するに至らん、嫁たるものも、明治の世に生れたりとて、あながちに、明治の事のみ固執して、こを爲さずしてはえあらぬものにあらず、天保の事とても明治にまさりて善きことあり、故に左程害にならぬことなれば、大やう姑の意に從ふぞよき、姑は己れより先きに生れ、見聞も廣く、經驗を積み居れば、姑によりて得る所の利益鮮からざるなり、以上の如く、双方注意を加へ、互に寛恕し、互に自己てふ心を去りて、出來得る丈け衝突を省きたらんには、琴瑟調和せる一家を見ること疑なし、されど世の事、何にまれ雙方善きことはかたし、殊に姑嫁の間柄は、萬につけて隔絶し居れば、嫁より其心をためて、姑の意に從ふは容易なれども、姑をして嫁の心に叶はしめんとするはいとかたし、故に嫁入し一家の調和を見んとする人は、舅姑の心の善きと惡しきとに係らず、先づ己を顧ず、己をたむることの必要なるを思はざるべからず、所謂姑姑たらざるも、嫁は嫁たらずんばあるべからざるなり、序に曰す、女學生より嫁入せし人、將た嫁入せんと

する人は、一入の注意を加へて衝突なきやう覺悟せんことを要す、先づ第一に謹むべきは、舅姑と別居せんとする事なり、從來我が國にては、老いては子に從ふてふ風習の行はれて、今の世に於ても、十が十迄此の風を保守するが多し、是を以て嫁たるものが、何氣なく、却りて家の爲舅姑の爲を計りて云ふにもせよ、舅姑は斯く思はずして、從來の風俗を破り、西洋風を模擬するが如く思ひ、且つ己を邪魔にして孝道を廢する如き思を起さしめ、其感情を害すること甚し、故に嫁たるものは、斯くの如きことは、成るべく夫に任せ置き、或は一家協議の上、斯くの如き場合に至るにあらずんば、決して輕々しく云ふべきにあらず、但し別居の事は敢て惡きにあらず、却りて雙方に便利を與ふること多しとす、されど唯未だ時運の至らざると、舅姑の感情を害はぬが爲なり、次に謹むべきは、宜しく書生氣を去り、一家の女主たる資格を養はざる可からず、もし此の資格を養はずんば、一家は假の宿の如くにして、到底整頓せる家庭を作る能はざるなり、一家は女主たるものが、子女の養生を等閑にし、家事經濟を顧みず、衣服調度の破綻散亂するをも意とせずして、終日小說を讀みて日を費し、或は人のうはさに時を送れる人あるは、往々見る所なり、是等の事ありては、其姑たる人に如何なる惡口雜言せらるゝも、到底言ひわけすべき道なきなり、

己れ未だ姑とならず、嫁とならず、然るに今の嫁たる人が、天保時代の婦人より議せらるゝを聞き、滿面紅を染め聲を怒らし、一方よりは辯護の勞を取、一方よりは新舊一樣ならざることを論じたること幾度なるを知らず、されど一歩退きて考ふるときは、これ時世を見ることの暗きと、我が物びゐきするより生ずることなれば、敢て口論辯護するにも及ず、唯舅姑の善不善を省みず、自身を謹むを以て足れりとす、自身を謹まんとするには、まづ書生生活の時に受けたる教育を活用せざるべからず、即ち書生生活の折に受けたる教育の活用すべきは、

一文學　こは智識を開發し、諸物に通じ、道を尋ぬる導引者とし、女子を教育せんが爲に學びたるものにして、堂々たる家政を處理するに當りて、小説如きに沈醉する爲にあらざるなり、

一家事經濟　こは家族生活の折に活用せんが爲に學びたることにして、敢て時間ふさげに學びたるにあらざるなり、故にもしこを家族生活の時期に至りて活用せしめざれば、恰も千辛萬苦して家を作り、一日も住はずしてこを壞ると同然なり、

一衞生學　人の此の世にあらんかぎりは、缺くべからざる道なり、然るに子女を養ふ時に當りて用ゐざれば、何處にこを用ゐんとするか、もし用ゐざるとせば、寧ろ學ばざるにしかず、

是等の事を堅く守り、姑　姑たらざるも嫁嫁たるの本分を盡したらんには、決して衝突を來す憂なきなり、今や明治も四十年に滿たんとす、こを人間に例ふれば分別盛なり、されば躊躇して天保時代の婦人に非をうたれざる樣、注意せんことこそ願はしけれ。

女子の慈善思想

黄離女史

世の妻女が重んずべき道としも聞きつる舅姑へのかしづき、夫主への事へごと、あるは幼兒の養育、家庭の政、賓客のあしらひの如きくさ〲の任務はいと多かるべきを、余は此の經驗に暗うして、其深き理を窮むるを得ず、かつはかばかりの重き敎は、古も今も、自ら窮め得し人の、懇に後進の輩を諭し給ふなるを、事知らぬ身の同じこと繰り返さんは物わらひの種となりなんと、筆路をかへて、老いたるも少きも、凡その女史にあらまほしき、慈善思想にぞ及ぼしける、

女子が精明なる智識の活動をさへ束縛せしにも似たる古の弊害は、今しも英明なる君主を頂きて、漸く亦跡を隱し、女子皆奮起して身を立てんとはせり、即學術に於いて、繪畫に於いて、音曲に於いて、實業に於て、各希望する方針に託して、其思想を磨き

つゝあるを見て、余が心中潛かに之を慶せり、蓋女子必ずしも、擧りて名譽の爲に役せられ、他の才能に凌駕せん爲に奮勵するにも非ざればなり、

女流の奮起良に嘉すべし、されど、何ぞ學術と技藝とに長ぜる名をのみ聞くを得て、眞の慈善積德家なる者の名を聞くを得ざるか、人或は云はん、慈善は陰微に行ふを可となす、何ぞ其名の聞えざるを憂へんと、然らば余は明かに答へて曰はん、蘭蕙の室自ら餘香あり、故に人其靈草たるを疑はず、慈善者の在る所必彼恩者あり、彼自ら其德澤を隱さざるなりと、見よ古の聖者は、いかに德澤の餘香ありしか、彼等は皆清淨無垢なる靈性を備へて、靈性を惡むこと蛇蝎の如く、或は暗夜に往き、或は深山に逃れしと雖、其蹤跡はいつしか人の追ふ所とはなりにき、慈善者の隱るべからざるは亦此の類なり、いかに世ば浮華輕薄に流れゆくとも、原來良なる人心は、必彼が高德を世に紹介するを辭せず、今容易に其名を知る能はざるは、蓋眞の慈善積德家の有らざる故か丞々たる我が同胞の女子等、いかでかばかりの美德を顧ることの薄きか、是に於てか始めて疑ふ、學術技藝の競爭は却りて篤實なる風儀を傷ふ者に非ずやと、今の女子中、學藝と慈善とを熱心に並行する者それ幾何かある、

然れども、世は決して慈善矜恤の事に冷かならず、貧民救濟の事、孤兒養成の事、病者保護の事等に屬する美擧は、業に已に義俠者の稱道する所となりて不充分乍らにも繼續し、且又一部の婦人も多少の資を投じて、慈善事業の爲に結社する者あるを知らば猥りに衆女子を誣ひて、慈善矜恤の心無しとは云ふべからず、されど疑ふ、かゝる同盟結社の慈善事業は、果して女子が慈善の本心あるを證するに足れりや否やと、蓋奢侈驕泰の人と雖、能く同盟の名を署して自ら慈善家を裝ふ者あり、されど熟其內行を察するに、朋友貧を訴ふれども憐まず、乞食門に餓うれども賑さず、病者路に仆るれども亦顧みず、人情の菲薄なる、仁愛の冷淡なる、殆ど見るに忍びざる

者なきにしもあらず、何ぞ同盟慈善者が心事の信ず
べからざる、人間の心事は其小行に於て最も明かに
現はるゝを常とす、大行は僞り易しと雖、小行は却
りて欺くべから
ざる故なり、さ
れば、假令同盟
結社の簿記に其
名を輝かすと雖
平日隣を憐まざ
ること斯くの如
き者は、いかで
慈善矜恤家と稱
するを得んや、
情意の温厚なる
恩愛の敦篤なるは、是れ女子が特性なり、然るに矜
恤慈善の擧に至りては、屢男子の先んづる所となり
女子却りて預り知らざるが如きは怪しむべき一端な
りと雖、熟考ふれば是他なし女子が心中、惡むべき



利已てふ背徳の種子の潜伏して、其眞情より湧出す
る慈善仁愛を壓するに因るなり、故に餘資ありと雖
或は貯蓄に藏め、或は被服に充たし、或は口腹を奢
ばしめて、其
私情を制する
能はざるなり
偶他に慈善
を行ふ者を見
ることありと
も、是亦剩餘
あれば之に充
て、有らざれ
ば顧みざる類
なり、嗚呼同
盟慈善甚だ可なり、然れども彼等の常行の其名目に
負くあるを悲しむ、獨立慈善更に美なり、獨其人を
得る能はざるを嘆く、其心眞に貧者が窮困を察し、
病者が痛苦を思ひ、孤兒が寂獨を憐まば、いかにさ

ゝやかなる言行の如きも、必仁愛の範圍を漏れざる理なり、其の心中既に仁愛に滿たされんか、交を結ぶや善く深厚に、下に臨むや善く寛大なり、況して貧者、孤兒、病者、總ての薄命者とに對するをや、獨立慈善の基礎實に此にあり、願らくは同胞の女子、此の誠實篤厚なる心德を養ひ賜はらんことを

婦人界の通弊

竹内紅蓮

近年女子教育の發展するや、女學生の上京し來るもの、歲月と共に愈々多くなりましたが、此女學生を收容する女學校は如何な風でせうか、東京市内だけで總て九十五校有りますが、何れも皆賢母良妻の養成が目的です、然し九十五校が年々に出す數千名の卒業生の內に、何名の良妻賢母が出來たでせうか恐らく賢母良妻らしい者も鮮に有るまいと思ひますですから今日の女學校で賢母良妻の養成は目的で無くて理想です、否理想で無くて空想ですと云はれても仕方が有りますまい、女學校を出てから髷を丸う結つて、お若いにまア感心なと、十人並以上に指される女よりも、其前髪を更に高くし、其庇を更に突出して、文學を高らかに談じつゝ街路を濶步するは未だしも善いですが、小商人の所へ嫁に行かない水呑百性も相手に成りません、妾の理想の良人は文學士に限るなど、身分も顧ぬ無鐵砲に父兄も持て餘す樣なお轉婆や、女でも獨立自活が出來ると、それを善い事の樣に思つてるたわけ者が多く出來るのですもの

どうして那麽困つた事に成りませう、それには根本に於て誤つてる事が三つ有ります。

第一、卒業證書を嫁入道具の一つに數へ、萬一良人に死別れた時にも食ひはぐれの無き樣にとて學問させる親達の了見、

第二、學問ばかりを器械的に教授して、德育とか情育とか云ふ方面が一向お留守に成り居る學校の組

織、

第三、今日の女子自らが自らの人格を認め得ないから見識無く、意志弱く、働きの無い者ばかり多い事

それで第一と第二は教育當局者と父兄との考へ違ひですから、改良するにも比較的容易な事ですけれども、第三は永い年月の間に知らず識らず養成された悪い氣風ですから、一朝一夕に直るものでは有りません、然しどう有つても此點を改めねば不可のです、

昔の女は學校へ行かなかつたから、何も知らないで良人の命に從順でした。けれども此頃の若い女はヤレ女を奴隷の如く思つとるの、ソレ玩弄の如く扱ふのと、仲々愚痴が絶えないのです、之を聞く男の方では不快に感じます、

それほど甚大に女子の權利を蹂躙し自由を束縛して居ませうか、そりや今日の男子には絶對的に此形蹟が無いとは申しません、

凡そ女と雖も氣魄有り、才能有れば必ずしも男子から小供扱ひにのみされる理由は無いかと思ひます結局女でも爲れば何事でも出來ると思ふのです

例令ば西洋の聖母マリヤ、東洋では觀自在菩薩ですね、共に理想の婦人です、平和の神です、愛情の權化です、即ち女子は何所までも優美で、濃情で、可憐で無くてはならぬのが當然です。けれども、古來婦人の身として優美や愛情の正反對たる戰爭――暴力競爭や大殺戮の阿鼻叫喚の間――に成功した者も隨分多く有ります。して見れば戰爭以下の商業、工業、農業などが女に出來ない事は決して有りません取分け小賣には女子の特色たる愛嬌が最必要です、又手工には女子の特性たる細かい仕事を緻密にやると云ふ事が甚だ適當なものです。それから園藝の樣な美しい草花を培養するなどは、又大層ふさはしい女の仕事かと思ひます

女が股引を穿いて鍬を執つて田を耕すと云つたらそんな見ッともない事が出來るかと誰しも云ひませ

う、けれども越後の西頸城などでは常に實見します女だから出來ないと云ふのは、女を笠に着て爲ぬからです、況んや男子の出來ない事、即ち女子の特長を持して一人前だけの事を爲ると云ふに、そんなむつかしい事は無い筈です、米國で少しでも教育を受けた女は皆教師に成つて獨立自活して居るのは立派な證據でせう

昨年の夏、英國の學生大會が開かれた時、集つた者の半數は正に女子だつた相です、又瑞西で學生大會が有つた時も女子は其半數を占めて居た相ですがこれは業々そんなに爲組んだのでは無く自ら左樣成つたのです。それからスカンヂナビヤ地方では、兵備の少い弱小國の常として、商業や學術は比較的進歩して居て、女子の地位も相當に高まつて居り女權も仲々擴張されてる相です、尚ほ米國で婦人が盛んに新職業を發見して立派に立働いて居る事は誰も能く知つて居ませう、

然るに日本の婦人ばかりが相變らず無勢力で『それでは嫁に貰ひませう』『上げませう』と何か品物の樣に、言はれ思はれ扱はれてるのは、實際日本の婦人に働きが無いからだと思ひます

朝の八時に良人の出勤を送れば、午後四時のお歸りまで長火鉢の前にごろ〳〵と太平樂をやつてる三毛猫と對座して、絃齋居士の小說に飽くを知らぬと云ふのんきなのは、未だしも善い方で、小人閑居して不善を爲すと云ふ方が多いのです

旦那樣お歸になれば水を打たせた庭の椽端へ皮布團敷いて林檎の皮剝き乍ビールのお相手をして、貴郎何々亭へ何々太夫が來ましたの今晚連て行て下さい……是非ですよと念を押して、臺所に竈の下を燒いてる下女を振り向きお鍋や御飯は少し早目に出してお吳、などゝおつしやいますね

何所の奧樣も日課は大概こんな物なのに、自由を認めないとか權利がどうとか、時々つむじ曲りの樣な事を云つて强情られますが、考へても御覽なさい親ら活動せぬから依然として封健時代の舊慣を脫せ

られないので、充分お尻が重い癖に口ばかりが輕かるべき筈は神樣から許されて有りません

『妾は獨身主義でも、母の涙には到底打ち勝てませんから』と體裁の善い事を海老茶時代に仰在た奥樣が、旦那のお小言に對して、『それでは貴郞は良人たるの義務を盡して居ますか』反對に喰つてかゝられる勢ッたら、隨分なものです

女は懶けて居て男が活動すると己等の權利が蹂躪される樣に吝しますが、元來活動は其半面には必ず壓迫的行動を伴ひます。米國のモンロー主義は何時しか米國をして兩米大陸の覇者たらしめ、新日本の大日本主義は愚昧なる支那や朝鮮に對して、多少の壓迫を加へてる時け餘儀無き事實です。若し活動が他にそんな影響を及ぼすからつて不可なら、釋迦やキリストは餘計なお世話燒きです、宗教に權威の伴ふのが不都合です

今茲に甲乙二軒の砂糖店が並んで有つたとすれば乙店の不勉强に引換へ甲店は大層な勉强をするので客は殆んど悉く皆甲店へ行くので、乙店の主人は甲店の主人に不平を並べて怒る樣なものです、客が甲店に就くのは自然の勢で、それを兎や角云ふ權利は乙店の主人に無い筈です

唯だ女子の仕事は、男子が將軍たり外交官たるに比べて、家庭内にのみ襁褓を洗ひ幼兒を守むなどで、比較的引立たないのは少々お氣の毒な事實です然し男と女とを社會のこんな他地に置いた自然は何を意味して居ませうか勿論女子の無氣力に引換へ男子の目覺ましい活動が因を成したに相違無いのです男子に有る乳房の蹟は何でせうか、蓋し吾人は或時代に於ては男子も亦育兒の一部分を擔任したものに相違有りません

文明國人には男子の腦と女子の腦とは、其大さと其重さに於て大差有るけれども、野蠻人男女には何等の差も無いのです、之は未開國の女は『あら善くッてよ』などゝッンと澄まして橫樣に睨む樣な罪な事は知らないで、男と一緒に成つてセッセと勞働して

居るからです

阿非利加の或部落では男子よりも女子の方が腕力が強く、又アフガンの或地方では女は獵や漁に出で戰鬪に從事して男子が家事を執務して居ます、是等の地方では勿論女子が大いに威張つて居るのですから女子と雖も勤勉でさへ有れば、立派な地位はいくらも造つて行かれるのです

斯樣に言つても、女は男の如くせよと云ふのでは有りません、已の特長を利用して男の如く勤勉に働きなさいと云ふのです

下層社會には夫婦共稼ぎと云ふ事を屢々耳にするけれども、中等以上の社會では殆んど皆無ですが、元來奥樣達は男子は何の爲に働くのだか知つて居ますまい、美しい衣服を着る外に甘い食物に飽く外に肥馬輕車で大家高樓に出入する外に、もつと立派な理由が無ければなりません、これは各自が自然に享有して居る各自の天分を盡すが爲なので、妻子を養ふなどは末の事です

左樣で有つたら女子にも天分が有りませう絃齋の小說を讀むが女子の天分でせうか、ビールのお相手が女子の天分でせうか、寄席をねだるのが女子の天分でせうか、否々々、育兒です家政です、そして賢母良妻として最勤勉に立働く事です

上古は今の樣に便利な道具が無いから家庭の事は女一人には過ぎる程澤山に有つたけれども、育兒にも養老にも最早粥を煮る必要無くて、粥よりも有益なミルクやミルクフードが出來、梅干も煮豆も一一造り上げるまでの手數は決して容易もので は無いが五錢も買へば一度に喰ひ切れぬ程有り、衣類もホワイトシヤツやカラ其他の白いものは、家內でするよりも西洋洗濯へやつた方が安く上るから家でやらぬ大病人には、病院が有る看護婦が居る、一一數へられぬ程手數が除けて居るものですに今の奥樣方は昔の通り臺所の事の外は何も爲すと宜しいなど考へ違ひを仕て居られます。

閑居するから不善にも近づき身體も懶けるのです

働けば勢力が出來、勢力が出來れば見識でも何でも從つて出來ます、之が出來たら教育家や父兄の考へ違ひを直すと同時に社會は一歩を善美なる境域に進めます

夏窓笑話

濤庵主人

一

或る所に、牛を盜んで枷の刑に處せられた者があつた、親友が其者を見て、可愛相だと思つて『君は何んな惡いことをして、こんな刑罰に處せられたのだと親切に尋ねた。すると其人の云ふには『おれは道路をあるいてゐたら、一條の繩があつたから、是は誰かゞ捨てたのだと思つて、拾つて歸つたのさ、さうすると此の禍にあつた』『人の捨てた繩を拾つたつて、何も惡いことはないぢやないか』『處が其の繩の端に物がついて『ゐたそれは何でした』『小牛がついてをりました。』

二

ある近視眼の男が路に迷つた、偶ま道傍の石の上に鴉がとまつてゐた。すると近視眼先生は、是を人がゐるのだと思つて、之にみちをたづねた答がない。少頃すると、鴉は飛んでいつてしまつた。近視先生は、その人(實は石)の答へぬのを怒つて、『彼奴、居眠をしてゐるな、おれが路を尋ねてゐるのを、知らん顔してゐるは失敬だ。よし、よし、おれも彼奴の帽子が風に吹きとばされたのを告げずに行かう』近視眼先生は、鴉の飛んだのを、帽子が風に吹かれて落ちたのだとまちがへたのだ。

三

ある村の人が、鵞鳥を持つて市に入つた。近視眼の人が、是を布を賣る人だと見ちがへて、連りに呼んで布を買はうといつた。村の人は、鵞鳥を持つたまゝで、さつ〳〵と行つて、少しも應じない、近視眼は急におひついて、鵞鳥の尾をつかんでこれを視た

そこで近眼は、怒つて云ふには『賣らないなら、賣らないでよいぢやないか。何故そんなに怒つて、唾をはきかけるのだ』

四

ある近視者が客によばれた、主人はひきとめて茶をふるまつた、さて近視者先生は、既に茶も菓子もたべをはつてしまつて、茶碗の中に鼻の影がうつつたのを、橄欖があるのだと思つて、撈模うとしたが鼻の影だもの、とれる譯はない、先生はもどかしがつて、指でつまみあげて、ムシャリとやつた、處が指はかみやぶれて血が出た。先生は之を見て『エーおれは、之を橄欖だとばかり思つてゐたのに、これや紅棗だ』

五

ある聾者が友の家を捜してゐた。犬が之を見て大聲で吠えたてたが、聾者には、一向これが聞えない扨て家の中に入つて、一應の挨拶がすんでから、聾者のいふやう『あなたのうちの犬は、昨夜眠らなかつたものと見えますな』主人は『それは亦如何いふ譯で』『イヤ外でもありませんが、私があなたのお家を捜してゐるとき、あの犬は、唯呵欠ばかりしてゐましたから。』

六

ある所に聾者と啞者とがあつた、互にこれをかくさうとしてゐた。一日聾者が啞者に歌をうたつてきかしてくれと願つた。啞者は、其人の聾者だといふことを知つてゐたから、自分の啞であることをごまかしてやらうと思つて、唯脣を動かし、手で拍子をとるまねをしてゐた。聾者は、歌はぬ歌の聞ゆる筈がないのに、聽ゆるふりをして、少時きいてゐたが其の脣の動くのが止まつたのを見て、大に贊ていつた『おもしろい〳〵、久しい間、善い歌をきかなかつたが、今度は一入御上達です』





女子の職業教育

東京府視學　御園生　金太郎

現今女子教育に關する主義は二つに分れて居る、賢母良妻主義と、職業教育主義と、即ちそれである、賢母良妻主義とは、一口に云へば、女子はすべて他日夫に事へ、一家の主婦として家事を整ふるを以て目的とするものなれば、その準備的教育、即ち夫に事へては良妻たり、子女に對しては賢母たる教育を施すが、女子教育の目的であると主張するのである職業教育主義とは、女子と雖、夫の扶養を受けて生活するばかりが能事ではない、女子もまたそれ相應の職業を覺えて、自營獨立の生活の出來る準備をする必要がある、女子と雖も必ずしも人に嫁するものばかりとも限らぬ、中には終生獨身で終るべき境遇の人もあらうし、また中には一旦嫁して後不幸にして、寡居自營の生活を求めなければならぬ運命に出遇ふ女子もある、此等の事を考ふれば、女子には中流以下は勿論、中流以上のものと雖、それ〳〵相應の職業を與へて置くことが、女子教育の目的であると主張するのである、然しながら深く考ふる時は、この二つの主義は、一見甚だ相違する如くにして、實は相互に調和することの出來るものである、もとより女子の職業を有することが、人の妻たるを妨ぐる譯もなく、職業を修むる女子が一家の主婦たる心得を知らぬで濟むといふ譯のものでない、それに拘らず此の二つの主義が全く別物の如く、或は甚だしきは氷炭相容れざるが如く世間から思はるゝのは、何故かと云ふと、是にも理由のある事である、それは何かと云ふと、賢母良妻主義の教育に於ては、賢といひ良といふ、即ち女德の涵養といふを大眼目と

する、從つて德育を主位に置き、藝術に關する敎育は自然之を從位に置かうとする、然るに職業主義の敎育に於ては職業即ち藝術を授くるを主眼とする、從つて藝術を主位に置き、德育に關することはもとより度外視するといふにはあらざれども、自ら從位に置かるゝ傾きがある、これが賢母良妻主義と職業敎育主義との間に利害長短の議論の絕えぬ根本である、かやうな譯故、良妻賢母主義の敎育に女子の職業的藝術を加味し、職業主義の敎育に、女德を配劑する曉には、双方全く同一の道を歩むとまでは行かずとも、二者相距ること遠からず、といふ所までは歩みよる事が出來るので決して一方は東に行き、一方は西に行くといふやうな譯柄のものではない、女子に女德の缺くべからざることは云ふ迄もなく、これ古今東西のともに要求するところで、世が文明に進むに從つて、女德もまた進まねばならぬことは當然である、廣い意味から云へば、女子の職業といふことも、また女德の一部と見てよいのである、之と同時に、女子の職業といふことも、社會の進歩と共に、愈々必要の問題となるのである、よりてこゝに女子の職業に關して、少し述べて置きたいと思ふ

女子の職業といふことは、我邦に於ても、段々世人の注目するやうになつた、一二の例を擧ぐれば、學校敎員を始め看護婦女醫の如き、電話交換手の如き店員の如き、諸工場の女工の如き、これらは以前には全くなかつたものが、時世の推移につれて新たに出來たものである、又事業若くは內職業で出來るもので、以前にもあつたものが、時世の要求によりて、益々發達したものも少くない、例へば養蠶の如き、機織の如き、裁縫、編物、造花、刺繡の如き、其他此種のものは澤山あるであらう、要するに時世の進化と共に女子の從事すべき職業の增加するは事實で、また生活問題その他社會の事情が、女子をして、それ〳〵の職業を求むるの止むを得ざるに至らしむることも疑なき事實である、

我國に於ては、從來中等以下の婦人は、農業者をは

じめ、いろ〳〵の職業に從事して居るが、中等以上の婦人には有業者は少い、近來に至りて、婦人の職業は段々に増加し、從つて之に從事する婦人の増加することも事實であるが、猶各自それ相應の職業的素養を修めて、社會の趨勢に遲れぬ心掛が緊要である、それにしても我國と歐米各國とは家庭生活の狀況が違ひ、之に伴うて婦人の職業に從事すべき範圍も相違すべきは見易きことであれば、一概に外國の例に模ふには及ばぬことである。

それから刻下の時局を考ふるに、未曾有の戰爭後を承けて、我國民中多くの働き盛りの男子が、我が生産界より奪はれたるのであるから、此の補は直接間接に婦人によりてなさなければならぬ所の多きは云ふまでもない、或人は斯う云ふ事を云うて居る、米國の南北戰爭は四年の久しきに亙り、そのため非常に多數の男子を失つたその結果從來男子の手にわりたる職業が、多く婦人の手に移り、その遺習が、一般の慣習をつくりて、今日に至るも、なほ女子も各商店の賣子、小學教員、中學教員等の職務を執つて居る



のである、との事である、實に米國は世界中で最も婦人の職業の多いところで、各商店の賣子の多數は女子であり、小學校は殆んど皆女教員の手に歸し、それのみか女子にして中學教師となるものも尠からず、中には中學校長にも、往々女子を見るのであるなほそれに止まらず、實業界官界までも切込みて、各官衙の下級吏員、即ち田舍の郵便局内の執務の如き、全く女子の職業と見なされ、其他速記、簿記、店頭の執務、電信電話の事務、銀行會社の書記などは、皆女子の職業である、米國では斯く女子の國民的生活に參加することが多いところから　或州の如きは女子に議員たるべき選擧被選擧の權能をも與へ、女子にして議員たるものがあるのである、米國の此風が、全く南北戰爭の影響であるか、又他の理由に基くかは判然せず、又南北戰爭が米國の女子に與へたと同樣の影響を、日露戰爭が我國の女子に與ふるかといふとは未定の問題である、しかし戰後日本の國威國勢が加はり、產業が增加し、國力が增殖し、又家庭社會の上にも少なからざる變動を見るべきは明らかで、而して此等の事情が職業ある女子を要求すべきことも爭はれぬ事實であらうと信ぜられる、要するに今日修養時代にある女子は職業の性質の本業たり、副業たるを問はず、各々分に應じて、相應の職業的素養をなして置くことが、婦德の練磨とゝもに、一日も忽にすべからざる急務であらうと思ふ。

◎女子音樂學校講習會　來る八月一日より向ふ三週間同校にては、第四回夏期講習會を開くよし、講習科目は唱歌科、樂理、ピアノ、オルガン、ヴアイオリンにて、講師は山田源一郎、宮島愼三郎、江平かの子、神戸絢子、田中いち子、丸山とめ子の諸氏なりと、

◎音樂學校と婦人　上野東京音樂學校甲種師範科へは、今後夫を有つ婦人は入學を許さぬことにし生徒募集規則を改めたるよし

女學生の服制難

◎制服の効用　元來制服は其の形式よりも、寧ろ精神に於てこそ、多大の効力あるものなれば、之を制定する以上は、單に學校の往復に止らず、日常外出の際も、之を用ゆるに至らざれば、到底理想的効果を收むるに至らざるべし、即ち目下男學生に於ては、旣に然るが如く、園遊會にも、音樂會にも、兄姉の結婚にも、親戚の葬儀にも、常に必ず之を着用して、公衆の前に立つの習俗を養成し、苟くも學生時代には、時と場合とを問はず、決して華麗の衣服を纏はざる　眞の女學生氣質を成すにあらざれば、常に華奢に走らんとするの傾向ある、青春の女子を戒飭して、永遠に此の弊風を矯正せんこと頗る難かなるべし

◎創制の困難　然らば、之を如何に制定すべきかと云ふに、是れ頗る困難なる事業にして、本問題の從來屢々提唱されたるに拘らず、未だ一も成案の見るべきものなきも、蓋し之が爲なり、而して其の困難の基く所は、從來の日本服は、其の形に於て固より今日の如き敏活なる運動を要する社會に適せず、殊に學生時代にありては、體操等の關係より、其の不便一層甚しきにも拘らず、其の長所たる美を發揮する點に於て、未だ之に代はるべき名案なく、就中袖の長きは、審美的長所の隨一として稱へられ、一朝にして之を廢し難ければなり、又染色に於ても、西洋婦人のものは、其の顏面の白色に對する配合より單色のものを選むも、我國にあつては古來幾多の變遷を經て、其最も粹を集め、隨つて染色の如きも、少くも二三種を加味せざるなきを以て、今一朝にして單色を選むは、外觀上稍々慊らざる感あり、故にこの二點に於て成功せざれば、制服の完璧を望む頗る難し▲熱心に試みよ以上は耳新しき話に非ずして、從來この問題を口にせし者の皆な等しく唱へし所なるが、此の困難は今尙依然たる困難にして、苟もこの困難に打ち勝つにあらざれば、到底成功を見るの期なかるべし、然らば如何にして之に打勝つべきやと云ふに、唯熱心に試むるにあり、假令完全のものならざるも、一たび其の端の開かば、衆評に依つて漸次改良を加へて、年と共に遂に成功の域に達するを得べし、而して此際最も困難とするは衆評の批難に打勝つと、能く輿論の同情を集むるとにして、衆評の批難に打勝たんには、先づ文部省の令下に、其の直轄學校より指を染むるが、比較的實施の基礎鞏固なるべく、又輿論の同情を集めんとならば、新聞雜誌等の社會的勢力に依賴するを至便とすべし、要するに至難中の至難たる本問題は、單に教育者に一任せずして、輿論の力を藉るにあらざれば、依然不可能の事として、空しく終るを免れざるべきか云々（三輪田元道氏談）

模範的女學生監督寄宿舍

女學生の風紀と、其監督は方今教育界の問題なるが所謂監督寄宿舍としては本郷にやまと女塾(伊庭國子)救世軍女子寄宿舍(田村民子)錦秋女塾(秋間爲子)神田に秋穗女塾(秋穗かね子)牛込に立志女塾等あるが、此に小石川雜司谷の高臺に曉星寮とて、英國婦人フヰリップ孃の經營になれる、模範的女學生監督寄宿舍の設立を見るに至れり△位置　關口臺町なる細川邸の向横丁を入る約三丁の畠中にて綠蔭露滴る間にあり△舍主　フヰリップ孃は紅蘭女學校と、女子大學との英語教師にて、年齡は三十を一つ二つ上に出で、性質は至極快活、生徒に對しては親切に愛嬌に富み女子大學昨年度英文科卒業の細野とし子といへるを監督の補助に置けり▽宿舍の構造は南向き總二階にて階上には八疊三間、六疊四間、七疊一間、階下には六疊四間、八疊一間、この外に十四疊食卓附の間と二十一疊の集會室あり▽目下の人員　はフヰリップ孃の外に細野とし子女中二名、女學生二十三名、都合二十六名あり▽特徴とす可き個條を擧れば、衞生上最も恰好の位置なること、五間に二十間のテニスグラウンドのあること、寄宿生は毎日三名づゝ交代に件の二名の女中を幇け料理をする事、隔日に件の大廣間にてフヰリップ孃と英語の對話あること、浴槽を備へ附け一週に三回入浴の事等にて、一ヶ月の費用何から何まで一纏めにして八圓の安上り、且つフヰリップ孃は、寄宿生總體の母のつもりにて、臺處の手傳から、洒掃應待まで專ら家庭的に仕込むと云ふ、

幼稚園保育の方法に就て

現今我國に行はるゝ幼稚園保育の効果に對しては、從來教育者間に於て、隨分有力なる反對論もあるに拘らず、一般教育社會は義務教育程度以上の問題に忙殺せられて、之を顧みる者少なく隨て、刺激なく進歩なく、只一部當事者のなすが儘に放任せらるゝ

の危險なる狀態にあるは、常に識者の寒心に堪ざる所なるが、當府女子師範學校にありて近來專ら之が研究をなしつゝある、奧平主事の意見に曰く、今日一般幼稚園のなす所を見るに、室內に於ては一定の時間內、幼兒をして固定の座席に着かしむること、他の學校と異るなきを以て、幼兒等は屢其窮屈なるに堪へざるの觀あり、保姆等は之を知るや知らずや、活動の本性を抑壓し、力めて靜止の狀態にあらしめんことを企つるの傾あり、室外に出でゝ遊戲をなさしむるに當りても、常に共同畫一の動作をなさしめんことを計り、絕えて自由に嬉戲せしめんとせず、其弊の歸する所、時刻來りて兒童等が幼稚園の門を出づるや、宛ら籠の鳥の外に飛び出したる時の如き面地なきにあらず、かくては明かに兒童保育の根本的精神に違反せるのみならず、手技の如きも積木、剪紙、摺紙、豆細工、織紙、粘土細工、組紙、綴取、張紙、箸並べ、輪並べ等多くは幾何形體に屬するものにして、然らざるも悉くこれ人工的のものゝみ、甚だしきは此等に用ふる材料を得るに不便なる僻陬の地方に於てすら、尙強て之を課せんとしつゝあり、以上は皆發育の眞最中にある幼童の生理を解せざるの致す所といふの外なく、これ即ち他より種々の非難攻擊を受くる所以なるべく、依て當校附屬幼稚園にては近來力めて此等の弊害に陷らざらしめんことに留意し、成るべく兒童等の自由の行動を妨げざる範圍に於て、保育をなさんことを謀り尙遊戲の時などは、校舍の周圍の廣濶なるを幸ひ、屢門外に連れ出して、彼等が好むまゝに草花の採集などをなさしめつゝあるが、果して思ひ半に過ぐるものあり、然れども一人の保姆を以て多數の幼兒等の保育を引受け、直接的の監督指導をなさず、遠くより過失なく、之を保護せんことは、却々容易の業にあらず、首尾よく此理想を達せんとするには、第一に先づ局に當る保姆等のために、適當の敎育を施さゞるべからず、之に就ては何とかして一二年間內に當校に於て、此必要を充たすやうなしたき考へ

なり云々、

米國の女大學

米國に於ては女權の發達に伴ひ、自己の娘に對する父母の權利さへ、殆ど賴むべからず、女子の主張は益々不實用的に進むの傾あるより、米國新聞は此程「娘の教育法」に就て、左の如く勸告せり、以てハイカラ娘の鑑戒と爲すべし、

（一）女は食物を調理することを學ぶべし、（二）洗濯と釦を縫ひ付くる事、及び自己の衣服は自己にて洗ふべし、（三）パン燒く方法は是非學ぶべし、（四）一弗は百仙なることを知り、結婚後は亭主の收入と自己の出費とを計算すべし（五）借金を以て衣服を造るは耻辱なりと知れ（六）强て美人ならんとして肺病患者らしき姿ならんよりは「健全は美なり」との原則を忘るゝ勿れ（七）買物を爲す時は一錢二錢を爭ひながら、無益に香料を費消する一弗二弗が大なるを知らざるは、算術を知らざるの耻ありと知れ（八）一仙の財産なきも怠惰ならざる男子は、百萬の富ありて一日を安樂椅子に暮す男子より貴きを學べ（九）音樂と畫と文學は結構なれどもパンの方が大切なりと知れ（十）然と否とは正直に云へ、女の然は否なるか或は「眞の然」なるかを再考せしむべき不正直を去れ（十一）車行より步行の利益なるを知れ（十二）結婚と金と體裁とにより選ぶべからず相手の眞價を知れ（十二）以上の事の出來ぬ娘は結婚後男子を苦むる魔物なりと知り人道の爲め一生を獨身にて暮すべし

清國女學生と日本美術

清國女學生と云へば、今までは下田歌子女史の實踐女學校に二十五名ある外、他の女學校には僅に一二名を數ふるに過ぎざりしが、此度牛込市ケ谷なる女子奎文美術學校に、一時に九名の入學生を見るに至れり、九名とは

黃　華（二十七才）湖南　陳德馨（二十六才）浙江
黃　興（二十七才）湖南　蔡少姫（二十才）浙江
朱　英（二十三才）徽州　葉若賞（二十三才）徽州
胡蘊莊（二十二才）甘粛　屈　競（十九才）長沙
余邊申（二十六才）江蘇

等にて、何れも裁縫、造花、編物等を專攻し居る中に、單り胡蘊莊許りは、日本畫を專攻し居り、いづれも夫あり、中には母となり居るも三名ありて、朱英は妊娠の爲め昨今休學中、黃華、餘邊申の兩女は能く日本語が出來る爲に、自然通譯の任を務め居るが、尚は隨意科として數學もあり、昨今は西洋數字の敎授を畢りて、漸く加へ算に入りたりと云ふ、智識の程度は、我國の尋常二學年ぐらゐの處、人の妻となり、母となり、齡ひ三十に近き身にて、遙々日本に來り、123を學ぶ彼等の心懸けや、殊勝の至りと謂ふべし、

小學生徒に實物示敎

東京府敎育會にては通俗敎育普及の目的を以て市内各小學校生徒に實物示敎を施さんとて今回獨逸製新式反射幻燈を應用し昨日より向ふ四日間日本橋區明治座に於て午前午後夜の三回に反射幻燈會を開催し科外講習として日本橋區内小學校生徒全部一萬千餘名に觀覽せしめ須次各區に及ぼす豫定なりと反射幻燈とは光線と眼鏡を應用して實物を其儘反射映出するものにして頗る嶄新なるものなり

女學校の父兄懇話會

東京府立第三高等女學校に於ては來る二十六日午後一時より同校内に父兄懇話會を開く筈にて校長よりは父兄に對し左記各項の質問を提出し置き當日答案を求むる由

一、諸學科の敎授に就て家庭より希望せらるゝ所ありや
一、家庭に於ける生徒學業自習の狀況如何
一、家庭に於て生徒家事手傳の狀況如何
一、家庭に於て新聞雜誌等を讀ましめ居らるゝか又讀ましめらるゝとせば其種類如何

行屆たる注意といふべし

詞藻



文學士　男爵　千秋季隆君選

夏月

天

行水にうつろふ影もしらみけり
流れてはやきみじか夜の月

東京　山本芳子

地

打水の名殘も見えてさゝのはの
ひまもる人の影のすゞしさ

信濃　長谷川糸子

人

をやまだのみどりの露に宿りけり
さなへのふしのみじかよの月

東京　高良子

選外秀逸

○　名古屋　不破きみ子

物おもふこゝろはづかし夏のよの
水のそこにもすめるつきかげ

○　東京　佐野ふき子

笹のはにおくしもさゆるこゝちして
夏ともしらぬ月のよはかな

○　東京　五十嵐清子

すみだ川をふねうかべて照月に
なつしらなみのよるぞすゞしき

○　山梨　風間千代子

くれたけのそよぐひまよりかげもれて
はずゑ涼しき夏の夜の月

○　福岡　大石綾子

なつの夜はねやのとざしもわすれつゝ
雲井の月にゆめかよふらん

○　岐阜　豐田冬子

ながらかはきよきながれにとふ鮎の
かげも涼しく見ゆる月かな

よき歌にてよく似たるもの

ながれてもかげは殘りて水の面に
　ひかりさやけき夏の夜の月
　　　　大阪　池田英子

ながれてもかげは殘りて山川に
　ひかりすゞしき夏のよの月
　　　　岡山　松山ふさ子

○　東京　伊藤とし子
水そゝく庭の草はのつゆごとにすゞしくやどるなつのよのつき

○　埼玉　横田秋子
あつしとてひろはうとみし田中道すゞみがてらに月をみるらん

○　松山　田村多豆子
春秋のきりとかすみのなかぞらにはれてすゞしき夏の夜のつき

○　山口　村上操子
あけやすき影なけかすは夏の夜の月にはものはおもはさらまし

○　東京　青木たま子
夕立のはれてうれしきつきかけにはしゐしたれは夏ともなし

○　肥前　尾方綾子
松浦がた夏をよそなるなみの上にすゞしさそふる月のかけかな

○　東京　佐野富子
夕風のいよすもりくる高とのにさしいつるつきの影のすゞしさ

○　東京　河合象子
うち水のうるほふ庭に月てりてなつともしらぬよはのすゞしさ

○　東京　山口琴子
夏のよのすゞしくてらす月影にともとかたりていれてあかさむ

○　東京　高野元子
いよすたれ卷て風まつおばしまにすゞしくもいる弓はりのつき

○　東京　小川政子
夕風にかやりのけふりはらはせてふせやすゞしく月を見るかな

○　東京　松本まつ子
風そよき月もすゞしき夏のよにこもちからすもうかれてそなく

○　石見　青柳秀子
ゆく水に夏はながれてすみ田川あやせにうかふつきのすゞしさ

○　東京　原三幸子
なく虫の聲せぬのみやなつならむすゞしさあまる月よなれとも

○　奈良　天野芳枝子
夏の日のくるゝをまつの木の間よりもれいつる月の影の涼しさ

○　備前　小山松枝子
ゆあみして風まつまとにくれ竹の葉こしに出しつきのすゞしさ

○　常陸　兒玉こう子
水やりし軒のしのぶにしろかねのたまをつらぬる月のすゞしさ

○　和歌山　高内さくら子
暫しとて端居せしまにあけにけりぬるまもあらし月の夜ころは

○　大和　栗山たか子
のる舟のとまよりつきの影さして風なき夜半もすゞしかりけり

○　靜岡　竹内みつ子
ゆあみしてはしゐするよの夢きぬに霜のいろなる月もてりそふ

○　東京　林環子
なつ木立あをみわたれる夕くれに月みるはかりすゞしきはなし

○　備後　石井千鶴子
ゆふだちの雲間をもれてさす月の樹々のしつくにやどる涼しさ

○　備後　石井妙子
端居して涼しきまゝになつの夜のかたむく月をながめけるかな

○　秋田　古瀬りく子

ほたるよふをとめが聲もしつまりていなはに宿る月のすゝしさ
○　奈良　天野照子

庭のおもにそゝぎし水をたづねつゝやどるも涼しなつの夜の月
○　東京　關谷己子

みどりこきふみ讀む窓にむかしをは語りがほなる夏の夜のつき
○　秋田　細矢はる子

河水にひるのあつさをながさせてすゝしくうつるなつの月かげ
○　東京　和田ひさ子

わが庭の竹むらそよぎまとふがくもる影すゝしなつの夜のつき
○　三河　永井さい子

またよひとおもひの外に夏の夜ははやくも月のかげしらみけり
○　神戸　水越美子

瀬をはやみかげもながれて淀川のよどむまもなきなつの夜の月
○　岩代　菅野和子

すなけむりまづをさまりておく露にすゝしさわかつ夏の夜の月
○　相模　大谷津みい子

すゝしさはたゝこゝよりや流るらん見る目も清きなつの夜の月
○　京都　下川登美子

涼しさにまたたちいてゝふけ行くもうち忘れけりなつの夜の月
○　東京　鷲津梅子

かはみつにうつれるかげは大空にみるよりすゝしなつのよの月
○　讃岐　安藤光代子

ひるたにも涼しかりつるわが庭の若葉をもるゝなつのよのつき
○　秋田　古瀬惟子

若たけのまどにすゝしくやどれどもみるま短かきなつのよの月
○　越後　松永、繁子

かしましき蟬の音絶えし大杉のしづくにやどるなつの夜のつき
○　秋田　長田せつ子

くれたけにやどりし夏の月影はいくふしのまのゆめやむすばん
○　岐阜　山田房子

しげりあふ庭のなつくさ夕つゆにやとりかれたるみかづきの影
○　神奈川　汲田治子

さと川の清きながれにかげとめてさやけくてらすなつの夜の月
○　京都　高丘治子

おほ空に涼しくかゝる月かげは夏のあつさを知らずやあるらん
○　廣島　富樫てる子

里人がゆふがほ棚の下いほにまち出つるつきのひかりすゞしき
○　薩摩　松原みれ子

青やぎの葉こしにみるもすゝしけれがものがはらの夏の夜の月
○　大和　栗山俊子

中垣にかげをのこしてくれたけのまとよりおくるなつの夜の月
○　東京　美矢竹光子

夏のよは月もすゝしさおほゆらむ清きをかはにかげをやどして
○　東京　瀬藤千代子

つま琴のしらべ妙なる窓の面にさし入るなつのつきぞすゞしき
○　福岡　三原すな子

いとはやみ夏もながれて川水にやどれるつきのかげのさやけさ
○　東京　佐藤のぶ子

夏の夜のふくるも知らでさゝれ水の石にくだくる月を見るかな
○　東京　林艶子

雲間をはなれ〳〵出て照る月をめづるまもおらしみじか夜の空
○　鹿兒島　日高愛子

浮雲を吹きはらひたるゆふかぜのすゝしくいつるなつの月かげ
○　能登　栗倉菫子

夕月のかげすゝしくもさしいでゝひるの暑さもわすれてしかな
○　群馬　石井寛子

ゆふ立のくもはあとなく晴わたりすゝしくいつるなつの夜の月
○　東京　古谷花子

なりくは風にくたくるはちす葉の露にやとかる月のすゝしさ

○　　名古屋　木下鶴子
難波かたかすみし春はゆめなれや すめるもすゝしなつの夜の月

○　　讃岐　安藤光代子
ほとゝきす夜たゝ待とておはしまの 月にふかすかしの笛の音

○　　筑前　田島紫露子
蚊やりして見かいくさのものかたり桐の葉越しの月すゝしき夜

○　　三重　吉田よしえ子
荒磯に寄せてくたくるしらなみの しふきにやとるなつの夜の月

○　　埼玉　横田政子
水くみてかへるうなゐにものとへは 田中の井戸は月そすゝしき

○　　東京　土田八重子
ゆふ立のなこりとゝめしにはたつみ 影もすゞしき月なうかへて

○　　常陸　岡田萬子
ひるの苦をわすれて海士も眺むらん 萩のかり根のみじか夜の月

○　　東京　小島榮子
風そよく夏しらかしのこのまより かつく見ゆる月のすゝしさ

○　　東京　吉岡總子
かやりたく夕顔棚につきてりて かせをまちたるよはのすゝしさ

○　　東京　入江菊子
夏ころもすゝしの袖にやとりけり しもかと見えてさゆる月かけ

○　　東京　伊藤ふく子
夏ぬれと涼しき月を残しおきて ひとりねやへは入られざりけり

○　　東京　伊藤竹子
白妙のすゝしの袖にてるつきの しもかと見ゆるなつのよはかな

○　　甲府　名取正代子
月影の十日あまりになりしより すゝみふかさぬ夜半とてもなし

○　　上野　大澤筆子
むらさめのなこりもみゆるあを柳に 涼しくかゝるなつの夜の月

○　　肥前　居方やゑ子
水くさの花にたはるゝうろくすの かけをよますろなつのよの月

○　　東京　美矢竹照子
夏ながらてるつきかけを石山に なかめあかすそすゝしかりける

○　　下野　井上尙子
雨すきてしけみに匂ふしら百合に やとをしめたるなつの夜の月

○　　肥後　友永章子
くまなせし蚊火のけふりにかぜ見えて 軒端涼しきなつの夜の月

○　　肥後　友永常子
あけやすき空とはしれどなかくに 涼しき月夜ねられさりけり

○　　松山　上原のふ子
ほとゝきすなく音さやけき夏の夜の 月には秋もおよはさりけり

○　　東京　高橋珍子
舟ことにすゝしき月のかけのせて なつをよそなる松しまのうら

○　　陸奥　相馬冬子
おほそらにくまなくてれる月みれは 風なき夜半も涼しかりけり

○　　東京　永井ふさ子
すゝしくも庭のかけひの音きゝて まつまうれしきなつの夜の月

○　　上州　飯田かつ子
木の間もる月のひかりに露見えて すゝしかりけりゆふ立しあと

○　　上毛　蕪ゆきよ子
ゆふたちの洗ひ出しけんひかりさへ 色さへすゝしなつの夜の月

○　　陸前　大槻はつ子
まとゐして語らふ名さへ夏の夜の ほいなくふくる月のかけかも

○　　東京　津野千代子
よもすから露おきあまるなつくさの はことくにやとる月かけ

○　　尾張　井口とよ子
大空ににこりもすみてやとるなり ひかりもきよしなつの夜の月

○　　神戸　藤木梅子

山ふかみ太古の池に藻のはなの　しろきにふさふなつの夜のつき
○　東京　和田ひさ子
夏の夜を月にうかれて古さとの　むかしかたりに夜はあけにけり
○　群馬　竹のふし子
あきの夜の月にもましてうれしきは　若葉に笑めるなつの月かな
○　下總　河鍋たか子
笛の音のいともきよきにいて見れは　かけもすゝしき夏の月かな
○　東京　西村直子
音の葉の玉も出てやひろはましまつの　木の間のなつの夜のつき
○　長崎　秋山虎子
涼風にたもとふかれておをやぎの　樹陰うれしきなつの夜のつき
○　小樽　牧尚子
吹く風に軒のたま水おとたえて　しつけくあくるなつの夜のつき
○　愛媛　高橋茂子
ひくらしのなくれはやみて涼しくも　松の葉こしにみゆる月かな
○　大阪　木村春江子
かはづなく野さはの水に影さして　すゝしくてれる夏のつきかな
○　三河　榊原きく子
ひくらしの聲しつまりて今はしも　さやけき夏のつきは出にけり
○　磐城　鈴木菊史子
夏の夜ははやくもあけてわか庭の　あを葉にのこるあさの月かな
○　宮城　大槻やす子
涼しさは風もおもはてめつるまに　にしになりゆくなつの夜のつき
○　埼玉　横田やな子
月みんとさと河つゝみよるくれば　ほたるとひかひ水鶏なくなり
○　備後　杉原衣子
雨いのるしるしのありて涼しくも　のき端の水にやとるつきかな
○　佐世保　永峰つな子
てる月にわくかれ出てゝすゝみしつ　おかつき近くなりにける哉

○　東京　田中ちか子
なこり多き月を繪筆にうつしおきて　明ての後のよすかとも見ん
○　神奈川　由樹しつ子
ともし火はよしきえぬとも賤が家の　月にひと夜は明してんかな
○　新潟　岩本芳子
手にとらばはかなくきえんいけ水に　玉とうかへるなつの夜の月
○　千葉　木村きよ子
雨すきてそらにくまなきつきかけを　庭にも見するなつの夜半哉
○　愛媛　廣田政美子
薔薇棚もるかけすゝし月はかり　なつをよそなるひかりなるらん
○　埼玉　安部とみ子
葉やなきのみとりの露に影さして　すゝしくやとるなつの夜の月
○　丹後　旭のり子
にはか雨すぎしはかりのあを柳に　ゆみはりかたの月そかゝれる
○　東京　加藤廷子
吹く風も絶えすてすゝしとほやまの　ふもとにあはき夏の夜の月
○　山形　齋藤いし子
雨はれて雲のたえまをかげもれて　清水にやどるなつの夜のつき
○　東京　服部やへ子
夏ふかくみとり滴たる木のまより　あらはれいつる月のさやけさ
○　京都　櫻木すて子
行くへしといひける友を待ちわひて　いつる戸口に夏の夜のつき
○　筑前　山本きく子
かたりつる友の話しもつきさるに　はやなつの夜の月はうすれぬ
○　東京　碓井のぶ子
夏の夜のいづみにやとる月かげに　晝のあつさもわすれはてけり
○　長崎　秋山虎子
ふれ浮へゝたてぬ友と琴とふえ　あはせてたのしなつの夜のつき

筆

天

花ならばちりなんものを櫻木に
千とせもにほふ筆のわと哉
京都　都筑田鶴子

地

する墨のすれど磨けど硯いしの
かたきは筆のはこびなりけり
東京　伊藤絹子

人

あしひきの山の奥をもしのばれて
もみぢを名がく鹿のけのふで
秋田　長田せつ子

選外秀逸

○
治まれる君がみ代には弓矢より
ふでの力ぞたのまれにける
新潟　岩本芳子

○
言のはの花をたづねてたのしきは
筆のはやしのあそびなりけり
東京　原三幸子

○
おもふこと書やつくさむ數ならぬ
筆のいのちのみじかけれとも
東京　河合象子

○
執る人のこゝろの種をふみのうへに
くまなくうつる筆にもあるゝな
東京　林艶子

○
さまぐ〜に昔の文字を紙や川
心のまゝにかきなかすらむ
埼玉　横田政子

○
世のなかの人のこゝろの花もみちかきなかしたる水くきのあと
東京　青木たま子

○
とる人のこゝろ〜にさきいてゝ匂ふは筆のはなにそありける
肥前　尾方綾子

○
美しきみ筆のあとをみるたひに身のかひなさをかこちこそすれ
愛媛　高橋花子

○
みほとけのゝこしたまへる筆の跡に色はしッれとしたはしき哉
東京　山口琴子

○
人はかろきつれのけにてつくりたる筆のちからぞ世もつくせぬ
靜岡　竹内みつ子

○
色かへぬことはの花をめてたけれ筆のはやしにかたりのみして
備後　石非妙子

○
成國のひとのこゝろも世のさまも見するは下のいさほなりけり
備後　石井千鶴子
備前　小山松枝子

こゝろしてつちかはてやは筆草に　にほひし花は千代もくちせじ
○　松山　上原のふ子
思ふこと書出てゝむをいかなれは　ふてはこゝろに任せさるらむ
○　肥後　友永常子
かくまゝにわか手習のおこたりを　筆の見するもはつかしきかな
○　京都　下川登美子
命毛のみしかき筆もなかき世に　のこらんあとのあるそうれしき
○　岩代　菅野和子
み佛のこゝろをうつしあるときは　たつおとらして見なん筆はも
○　東京　和田ひさ子
手なりなは月やこほれんこのまゝを　繪筆をとりて君におくらん
○　三河　永井さい子
いひかぬる事もいはるゝ筆のみは　露もこゝろにそむかさりけり
○　愛媛　廣田せき子
あひみては言ひかたきこともうつし得て　筆の情そ嬉しかりけり
○　上毛　黛ゆきよ子
人の道教き殘したるふみ見れば　ふでのいのち毛なかくもある哉
○　薩摩　松原みれ子
うつりゆく世の面影を文のうへに　殘すはふてのいさほなりけり
○　大和　栗山たか子
何事もいはせておくる文のうへに　筆のちからは見ゆるなりけり
○　越後　松永しげ子
月花のかはるすかたのさま〳〵を　かきうる筆のちからつよくも
○　東京　瀬藤千代子
上つ世も後の世までのことくさも　書きのこすへき筆のめくみは
○　奈良　天野照子
とる筆の林しけりてかくはしき　こと葉のはなそさきいてにける
○　奈良　天野芳枝子
いにしへの人のこゝろもくまれけり　かきなかしたる水莖のあと

親にやるふみかく筆のいのちけを　なほ長かれとかみにいのらむ
○　秋田　細矢はる子
まなへともつたなき文字をとる筆の　ちからとたのむしかの命毛
○　岐阜　豊田ふゆ子
なへて世の人のこゝろはしらる哉　かいつゝりたる筆のすさひに
○　福井　岩橋花子
たのしみもこよなかるらむとる筆の　心のまゝにまはらましかは
○　甲府　名取正代子
世の中の人のこゝろのあやにしき　みゆるそ筆のいさをなりけり
○　山梨　風間千代子
とる人の心こゝろそあらはるゝ　ふてはよくこそかゝまほしけれ
○　愛媛　廣田政美子
よろづ世をへたてなからも水莖の　つたへて朽ちす來しかたの道
○　神戸　藤木梅子
百ちとせ古きこと葉の綾をさへ　のこすはふでのいさほなりけり
○　神戸　水越美子
ゆかしくもこゝろの色の見ゆるかな　かなもし書し筆のあとにも
○　東京　關津梅子
書つくす千とせのあとをとゝめおきて　おのれうせけむ筆の命毛
○　東京　古谷花子
文机のちりをはらひてとるふてに　千々のことはの花も咲きけり
○　名古屋　木下鶴子
絶えせじな奈良の小川の水汲めば　いにしへひとの筆の香そする
○　神奈川　由樹しづ子
いにしへのひしりものせしつれ〴〵の　草も短きほにてかきなむ
○　東京　美矢竹照子
一ひらの紙にむかひてとる筆も　おもひのまゝにまはらさりけり
○　肥後　友永常子
山口　村上操子

その口にいひ得ぬ事も筆をもて　かけはたやすくかく世なりけり
○　松山　田村多豆子
とる人の心の奥も見るへきは　しるせるふでのあとにそありける
○　東京　土田八重子
かき流すふてのいのち毛枯るゝとも　言葉の花は散らでかなりん
○　常陸　岡田ゐ子
いにしへのうれしきふしも憂きふしも　書き殘したる筆の跡かな
○　埼玉　横田やな子
松のけふり机のしまにたなひきて　かきなかすらん筆のうなはら
○　埼玉　横田秋子
文つくえに筆とらぬまは文よみて　ふみよまぬまは筆をこそとれ
○　秋田　古瀬惟子
重きものもつ身なからもいかにして　筆にちからや挽むなるらん
○　備後　杉原衣子
狸毛の筆にしろせることの葉に　いつはりさへもうちましるらん
○　東京　林環子
太刀にかへ筆をは取てやすらきの　庭に出てゝよあはれますらを
○　東京　加藤延子
緋ほたんの花に繪筆を執る君の　小そてにはらむはなのしたかせ
○　小樽　牧侚子
今むかし筆てふものゝなかりせは　こと國ぶりもいかできかまし
○　名古屋　不破きみ子
さま〱のよの言の葉をとゝめなく　筆こそ人のたからなりけり
○　東京　松本まつ子
おもふ事消やる筆はおそろしき　けものゝけにてつくるなるらむ
○　千葉　木村きよ子
いにしへの聖のみちもひともとの　筆によりてそ世にのこりける
○　大阪　池田英子
おもふことのへつくさんもへたつ身は　筆こそおのか寶なりけり
○　三河　榊原きく子
するすみに深き色香をかきなかし　こゝろのかきりいはせつる哉
○　佐世保　永峰つれ子
書おける筆のしつくを見ることに　むかしの人のさしもこひしき
○　常陸　兒玉こう子
ふりたれとすてかれにけり朝夕に　したしみ合ひし筆とおもへは
○　福岡　大石綾子
文のうへにいにしへ人のおもかけを　忍ふや筆のちからなるらん
○　伊賀　菊山かれ子
ちゝきみがいまはのみ歌この筆に　そめたまひては捨られぬかな
○　大和　栗山倹ゝ子
言の葉につくしかれたる事をみな　筆のちからにたのみけるかな
○　讃岐　安藤光代子
みしかくもすくなる筆のいのち毛の　曲らぬ事そいのられにける
○　東京　服部彌惠子
なへて世のよきもあしきも筆なくは　なと後の世に傳ふへきかな
○　東京　美矢竹光子
ほそふとのわけめたゝしき水莖の　あとおもしろの紙のうへかな
○　東京　碓井のぶ子
なにくれと思ふこゝろを語ふは　筆のほさきのちからなりけり
○　岐阜　山田房子
思ふとちかよふたまつさひと文字も　ふでの命毛たのまぬはなし
○　伊豫　樋口孝子
かく文字のつたなき己をかへりみて　ふてに罪きす人もありけり
○　陸前　大槻はつ子
からやまとそてつられすに交りて　あそふは筆のはやしなりけり
○　大阪　木村春江子
西ひかし立ちわかれては筆なくて　思ふこゝろをいかでつけまし
○　山梨　標武子

うきときのおもひ出にとかきおかむ 君のたまひし筆にまかせて
○　能登　栗倉薫子

名に高き君のものせし筆のあと いかなるたまのこもるなるらむ
○　筑前　山本きく子

とる人のこゝろ一つに筆のわざ とふとくもなりいやしくもなり
○　三重　凞田代音子

いにしへのよろづのことを長しへに 殘すは筆のいさほなりけり
○　石見　齊柳秀子

いろ〳〵の言葉の花もとる筆の あとににほひてさくそやさしき
○　下野　井上倫子

水莖は高きいやしきけしめなく こゝろのつかひするそうれしき
○　東京　高橋珍子

いかにして朽せぬあとを殘すらん みぢかき筆のいのち毛にして
○　秋田　きさ子

人の名を後のためとてしるすにも 筆のいさをいからさるはなし
○　松山　山脇幸子

人の世の數たに入らぬくらき身の 筆にうらみを云ふよしもかな
○　群馬　石井寬子

もゝ千里はなれ小島にある身さへ 筆あらはこそうきこともなし
○　宮城　大槻やす子

そのひとの心のそこもみゆる哉 かきなかしたるふでのしつくに
○　秋田　古瀬りく子

かきなれてまつ程よしとおもふまに きれて短かき筆のいのち毛
○　群馬　大澤筆子

わけつくす文のはやしのおくふかく 見ゆるもうれし水莖のあと

◎和歌兼題　　秋月

▽八月　朝顔　夕顔　▽九月　松蟲　女郎花　▽十月　紅葉

短文

天賞

千早　　京都　西島靜子

天下の兵を引受けたる千早の城は此所なり、松柏繁りて常時の風枝を鳴らし、雫は人の袂を拂ひて木の根を洗ひ岩を濯ぐ、感慨胸にあふれては、見るもの胸を嚙むの種ならざるはなきに、鳴くや山蛙の谷に響きて、雲梯の山に炭燒の煙立つたり。

評　山蛙の聲、炭燒の煙も、楠公奇計の紀念とぞ思はる

地賞

夕立　　遠江　鶴田花子

向ふの荒物屋の軒端へ、大勢の人が逃込んで、押合つて居るが、皆それ〳〵家もある人だらうに、氣の毒なことである。

夕立や軒端に人の目白押し

評　斯うなつては、人の價値も乏しくなるべし

人賞

お葬式　　常陸　兒玉こう子

滿身の俗臭を紫の衣に包みたる僧都、お布施相應に讀經を濟せば、誇りかに名札附けたる鳥籠は開かれぬ。式を外に犇めき合へるは己が名と、賴まれし名刺を野邊帳に記さんとて也、梢の烏石塔の蔭の乞丐、共に人の歸るを待てり。

評　君もお人のわるいこと、アラばかり御覧成さつて、

選外秀逸

月　　石見　靑柳秀子

春の月の、黃昏に老いたる梅にかゝれる、可し。夏の月の早瀨に碎くる、可し。秋の月の皓輪纔に山の端を離れたる、亦可し。されど冬の夜更て霜氷る寒空に、傾ける月の光冱て、高き塔の上に懸れる、又なく可し。

評　君は四季の月の長所を知れり

廢寺　　東京　永井ふさ子

雨降る夕、獨り廢寺を尋ねぬ、楹落ち甍破れし本堂、鐘撞堂、共に昔の榮華の跡を止むれど、讀經の聲今は何處に、鐘の響今は何處に、唯松籟の颯々たる音を聞くのみ、噫、誰か思はん、其昔老僧の撞く鐘の響のかく絕え果てんとは、

評　之に對して諸行無常の感あるべし

麥秋の夕　　松山　野菊女史

刈急ぐ黃色い麥に迫る暮色、畑の道も哀に崩されて右に飛ぶ蛙、左に逃ぐる蛇、眞上には輪を畫いて鳶が一羽「お父さんもう歸らないの……」と子供の聲、向の森陰の小家からは細い腕を延て此方を招いて居る、暮色は愈鎌の光迄……。

評　よく寫生し得たり

漁村の少女　　東京　土田八重子

都人夢深き頃。櫓聲勇ましく漁舟歸れば、赤襷褄端折の一少女、濱邊に走り迎へて得物を運ぶ、我等漸く目覺る頃は、そを頭に戴き、山の彼方なる市に鬻ぐべく急ぐ、さな働きて何面白きと問へば唯一言かくてぞ樂しきに、と顧みもせで、

評　正直に働く、げに樂みは其中に在るなり、

偶感　　千葉　木村きよ子

殘月の光り淡く、空には星の瞬き、地には露の滴り、それよりほかは曉の鐘の幽に響くばかりなる時、かくても此裏に世の罪、煩悶のひそめるを悲

まざること能はざりき

評　白露さへそれはあるものを、ましてや、

涼しき夕

上野　大澤肇子

急がすばぬれざらましをてふ村雨は、翠滴る青葉にやさしの玉のこして晴れぬ、窓より送る松風のあまりにゆかしくて、思はずも欄干によれば、月に煌く葉末の露の美くしさ、いはん方なきに、そを誘ふ風の、いとも涼しくて、

評　讀む人の肌にも涼風の通ふを覺ゆ

窓螢

肥後　友永常子

軒端の竹をさら〳〵とすべる夕風の、我文机の燈火を吹消せば、涼しけれどわなにくしと思ふまに、螢の三つ四つ二つ窓に來て飛かひぬ、手にもつ文や照すと、さしよすれば、さすが櫻木にちひさくえりにし文字なれば、見ゆるよしもなし、

評　車胤も今の時に生れざりしぞ仕合せなる

燈火

東京　神田けい子

夜は早更けぬらし四邊小暗きに、彼方の森蔭より微に光洩るゝは、如何なる人の書や讀める、文や綴れる、懷かし彼の燈火、我と同し心の人か、折しも三更の鐘の音響きていと靜けき夜を、いさや吾も今少し文かゝむ、彼の燈火の消ゆる迄、

評　君のこゝろこそなつかしけれ

七夕

讃岐　安藤れん子

こよひ七夕の空を眺めて居る我額に何やらん一雫『兄樣雨ですよ』ナーニ椎の葉の露だよ』とやがてばら〳〵と紅提灯の火も覺束なげにふり出しぬ、天の河瀨の水まさりて、後朝ならぬ此よひの雨を牽牛織女は如何に情なくや思召すらん、

評　濃情掬すべし

まぼろし

大阪　池田英子

古代紫のお袴に、海老茶のお包を片手に、つと我前に來り玉ひ、「英子の君、紀念博覽會へ行き玉はずや」とかたく我が手を握り玉ひぬ、そも何れの君かとうち見はれば、早や其お姿は無く、雨戸をもるゝ太陽の、昨夜讀みなせし机上の女の鑑を照らすのみ、あゝ夢なりしか、

評　女鑑と連立ち玉はゞ過ちなかるべし

田中千賀子

眞に汚ならしきものは、落花後の雨、花の下の貧

人、椿の花の散り際、美しい繪葉書に亂暴書、掃清めた道に馬糞、白百合の枯れたの、雪降の翌日等ならんか。

評　さて君の筆はいとうつくし

夏の夜　　和歌山　高内さくら子

流るゝ水に胡蝶の夢のせて、春もいつしか呉竹の世は夏となりけり、さし入る月に燈けして、獨り歌よまんとすれば、いづくよりかひゞくいとも妙なる笛の調べ――月はいよ〳〵さへぬ、あゝさても笛の主やたれ――

評　君の歌を笛の音に通はせたかりし

白百合　　相模　大谷津峯子

淙々として溪流むせぶ處、危ふげに突き出でし岩の間に咲ける白百合一輪、天つ少女がかざしの花か、そも妙なる姿、露けがれなき美しの色、優しのかをり、あはれ幾年月を、只獨り咲きて、空しく枯れぬ……あなあはれ。

評　却つて靜境に其所を得たるなるべし

にくらしい　　神奈川　由樹しづ子

私は正月乳母の小さい家を訪れるのが、何よりの樂しみです、乳母はニコ〳〵しながら、マア御嫁にゆく樣な年をして、時々乳が戀しくなるのだれ、妾が嫌い顔をするとマアおかわゐらしい、それだからばーやはにくらしい、

評　終の對照おもしろし、

諸嬢に告ぐ　　岩代　菅野和子

男友あり妾を罵りて曰ふらく。世に愛らしき者は女なり、而かも恐ろし。花の如き顔にして心は魔箱の樣なり、嫉妬、憎悪、陰險悲傷、猜忌、蚰蜒の如くなりてこゝに發生し、醜禍なる世に流布す、女は有つてもならず、無くてもならずと

評　油斷したまふな

偶感　　神戸　藤木梅子

天空濶に夏の月、純淡の海波を離れて入る須磨の夕、金波銀波を高く飛ぶは何の魚、遠く見ゆるは岩屋の燈火か、突如過ぎ行く舟の黒影、遠く消えんとして誰が唱ふ、

渡り比べて世の中見れば阿波の鳴門に波もない。胸を抱いて去つた、

里より　　加賀　富田環子

若葉がくれに白き手拭を姉樣被り赤き襷かけて茶つむ田舍は一入に候、昨日摘みし若草のお團子妾乳母やの手傳致せしにて候。都にては得難き代物、まづ初穗な。お土産には乳母やに敎はつたお團子の手並御覽に入るべく候。

朝顔　　尾張　井口登代子

露のひぬ間といとも短き、命もこゝは日に背きたるにや、朝顔の黄ばみたる葉がくれに濃き淡き紅の二つ三つふくつかに色も香も今を盛りと咲き出でたるしほらしうみゆ。

桑港の震災

松山　田村多豆子

土はさけ、家はたふれ、火はおこりて、人畜の死傷かぞへかたしと、其慘狀いかばかりなりけむ、耳にきくたに、身の毛もよだちて、胸つふるゝ桑港の地獄、あゝ桑港の地震の慘況、赤十字社救護の擧、誰かは默してあるべき、

讃岐　安藤潔子

物に行て歸るさ、すつぽんが捕れたといふを聞き、行て見ると石龜によく似た黑褐色の甲の丸い軟い様な、氣味の惡いもの見て居るのは多く躰をかたいた野良歸りで、中にはなほし、郵便脚夫、ズツク袋に牛乳壜三ツ四ツ提げたのもあつた。

老の情

岡山　小山松枝子

一老翁あり、社前に跪きて懷より一葉の寫眞を取り出し、其所の三方に載せて、何事をか祈願すらし、蓋遠國にある息子の無事を祈るならんか、しばらくして石のごとくをさめて立ちぬ。知らず寫眞のぬしよいかに過すらん。

仁

陸奥　相馬冬子

其心田に善の種子を下す人は、其實や必ず仁と愛とを結ぶ、其胸源に善の泉を涌す人は、其流や必ず道と德とを潤ほす、貧を賑はし困を救ふは、世の繁榮を增すの喜びあり、隣に親しみ近を和らげるは、身に光華を輝かすの慶びあり、

田舍の夜

能登　栗倉菫子

平和にして靜穩かなる田園生活に憧れて、幸多き己が身を喜ぶ我も夜に至りてはそゞろ騷しき故鄕の偲ばれて、あらぬ想ひに耽るなり、

空想を消して耳をそば立れば、聞ゆる物は蛙の聲と、筧より落つる水の音のみ時鳥の聲又喫し。

折にふれて

日向　中村はつ子

野に出でて花つむの樂しい春の日に、ふと取り出だせるは、今なき兄の寫眞と、杖曳ける兄が上野の給業式、今將に見終らんとすれば、彼方は瀧笛の山折つて長う響くなり

昨夜の月

越後　松永しげ子

昨夜はいつになき月松の梢に昇りたる故、端近う出づ、夏草にすだく蟲の聲一きは面白く、そよ吹く風も涼しう、いぶせかりし草屋もえならぬ住居と覺ゆ、あゝ此月は君が獄をも照し給ふらむと遠き東の君の方へ

遠方の兄へ

筑前　上原歌子

おゝ兄上、昨夜お花ちやんと螢狩りに行きましたよ、いつぞや兄様とお二人で泣き悲んだ、川邊の古いあの柳はとくになくなりました、でも水の音はやはり物悲く、私に何か囁く様で、またかの時のことが忍ばれて、そゞろに袖をぬらしましたよ、

偶感

奈良　天野照子

花いばら赤く白く垣根に咲き匂へるとき、胡蝶いづこよりか三つ四つ飛び來て、樂しく花上に翻々たり、姉妹の少女あり、これを見てほゝゑみつゝ、互に睦じく花蝶の樂趣を相語るかの如く、口唇動けり、思ふに花は姉たり、蝶は妹たり、あゝ二人の少女花蝶と其樂趣を同じうせんか、

夏の月夜

東京　關谷巳子

月は綠濃き青葉の蔭にうすうく、野邊を照し、風涼しく吹きていと心地よし。

宇宙は寂としてそゞろ嵯峨野の昔ぞ忍ばる。妾と清子の君との影法師は、靜かに、美しく愛らしき袖ぬらす露しげき萩の蔭に映りぬ、

病院の一夜　　　三河　榊原きく子

今しも青白き月光は、病院の窓にさしいれり、妾病床に横りてうつら〳〵と聞くともなく、耳すませば、はるか二階の方より讃美歌の聲のあはれに細くたえなんとしては又つがれ、はては涙にむせぶ聲のもれきゝぬ、

わかれ　　　大阪　木村春江子

兄さん……御機嫌よう……と可憐な聲、アイ！お前も壯健で……是は又たし何心なく歩む我前に佇む少女は、其れか否か小さき手に眼を被へり月は今雲を離れて、少女も我も、はた彼方の麥畑に見え隱する力なき男の姿をも、等しく照らしぬ、

◎短文投書家諸孃に謝す　今回は選者か前號に於て希望せし條件を悉く容れられ、從て、本欄甚だしく賑ひ、一文も棒を引かんと思はるゝものなき盛况を呈せり、尙此調子にて、續々名作を投ぜられんことを希ふ。

新體詩

天賞　　　大阪　清水敏子

浪まくら
あやなくかゝる村雲の、月の光をおほふごと、迷ひの夢はわが魂を、深き闇路にさそひけり。
ともし火消えてひたすらに、いそぐ山路のけはしきを、われさとりえしあかつきは、小笹篠はらみちたえて。
果てしも知らぬ廣野原、幾重かたゝむしら雲の、峰かあらぬかゆきゆきて、歸る此方は海なれや。
行くも歸るも逢阪の、闇路やいづこ柴の戸の、眞の道にしるべして、我をみちびく人もかな。
思へばふりし故郷の、門の青柳糸たれて、ことしも我を招くらん、優しき姿なつかしゝ。
前の小川に釣たれて、歸る岡邊のつぼすみれ、摘みてたのしき春やまた、わが身にいつか歸るべき
なさけあまれる父母や、惠みも高き師の君が、涙の誠見せし時、わが目くらみて見ざりけん。
慕ひまつはるはらからや、諫めとゞむる友垣の、なげきの聲はわが耳に、響かざりけむ淺ましや。
行衞も知らず立出でゝ、辿りし道は定めなく、むかし馴にし西山の、嵯峨野のあたりさまよへば。
もとむる人はあらずして、わが爲ならぬ人の身のよその哀れに深草の、仇なる情くりかへし。

理想の中の辰氣樓、むなしく仰ぐ大空の、雲をまつ間の久しきに、調べによれば舟もなし。よらば斬らんと構ふなる、人の心に鬼は棲む、劍は舌の根にありと、聞きて驚ろく我やそも。

たどり／＼て北の海、渡島後志山越えて、石狩野邊の雪の中、熊か人かとあやしまれ。

南八島のほかはまた、臺灣琉球もろこしに、行きて見ばやの好奇心、騙られて出いづる浪枕。

所定めずさまよへば、ふるあめりかに袖ぬらし、うらるの山のあかつきに、朽ちし袂を歎きけり。

もとより人と生れ來て、なすべき業のなからずや生命の限りいそしめば、聽きやすき道得んと。

思ふまことも理に、似たれどおろか定まれる、道はおのれにあるものを、知らで過ぎにし慕なさよ

一度迷ふ浮雲の、見るが中にも重なれば、在りし山々鳴りひゞき、河は溢れて大水の。

盆をかへすに異ならず、流れ／＼て今こゝに、配所の月を見るごとく、わびしく暮らすきのふけふ

汝が父なほもまし／＼き、母は涙にくれたまふ、

汝が家を出でしその日より、燈火消えて汝が家は家庭の花も色はえず、やさしき妹がつま琴も、汝を慕ひて聲しめり、汝を思ひてあはれなり。

紙鳶のぼりもて歸來る、汝が弟も昨日けふ、なれの姿の見えざれば、いづこに在すと尋ねにき。

父母思へはらからも、家も財貨もなれが身も、思へとありし玉章は、あやしく今も身にそひぬ。

膝打かさね父よわれ、罪を御前に得たりけり、今より後は父の子と、われ稱ふべくもあらずかし。

草苅るわらは家の奴と、われ見そなはせ朝夕に、父の御面あふぎなば、われ足れりとやいはん哉心の光かゞやきて、われと我身をてらす時、やつれし面は火と燃えて、胸は焰火とのぼりけり。

思ひさだめて郷里へ、今むかふなり夕日影、かしらにさして玉鉾の、道はる／＼と歸り行く。

地賞

時鳥

東京　中津しん子

五月やみ、あやめもわかぬ雨のよを、ないて明すかほとゝぎす、血を吐くおもひの胸のうち、いづ

くの空に月やすむよはとこ暗の迷ひ路と、知るやしらずやもろ人の、やみより暗をたどりつゝ、淨らにすめる月影を、尋ぬる人はなつかしの、身で身をこがすあはれさよ、月に一聲逢坂の、山ほとゝぎす汝もわれも、おなじ心にさみだれの、雨ならなくに涙にて、袖もたもとも朽そはてぬる。

人賞

床上花　　伊勢　吉田よしえ子

行く春を
偲び音になく五月雨や
　うらびれの身ぞ淋しけれ
　病に臥する昨日けふ
君が挿したる床の花
紫涼し杜若
　紅色豊けき芍薬の
露際立ちて生々と
　物皆默す我がほとり
　　慰め神の御姿か
何とはなしに慕はしき

花を戀ひぬる心こそ
　人をも慕ふ心かも

選外秀逸

想夫戀　　大阪　木村春江子

夕陽の影は今落ちて　あとにたなびく紅は
今日のいまはの光かも　いきはの光消え行けば
次第にたるゝ夜の幕
あゝ紫の雲そひて　東雲しらむ暗は
今日ぞ嬉敷便りもと　頼みし物を甲斐なくて
今日も望は絶えにけり
病めりとしもは思はねど　人の勸めのぜひもなく
すまの浦わのかり枕　松ふく風や浪の音
一人してきく此夕
人こそしらね束の間の　別れも我は淋しきを
双手のを指折りつくし　二つあまりし年月を
あゝ堪へ難き思哉
君の上のみ忍はれて　友よひかはすはま千鳥
われも共音に泣き明し　涙にくちし小夜衣
色あせにしを君しるや

待てし甲斐も在されは　燈火くらき小夜中に
思ひつかれし一人寝や　夢に逢ひ見し暁の
露けき袖を君しるや
思ふもつらし其かみの　千代の盃くみし時
ちかひ玉ひし御心の　他し色香に染みにしか
音つれ絶えし昨日今ふ
病めりとしもは思はねと　忘れ難なき思ひには
異事の病となりもせむ　けふも一日は暮果てゝ
脳は又も増しにけり
心やりにと手馴にし　小琴取出てかきならす
糸の調も力なく　涙に落る想夫戀
あゝ脊君や奈何に在す覧

螢　　神戸　足立あさ子

山の端出る月かげに、ほころびかゝる闇の夜を、
縦か螢のたてぬきに、飛かふ空ぞおもしろき

春の田の面　　石見　青柳秀子

春の田の面のあな美くしや、神の敷きけんこの野むしろ、眺むる限り咲く蓮花草、日かげふく風うらゝか長閑、あさるや雛の四羽五羽六羽、舞ふや蝴蝶の七八九十、彼方につばなをぬく妹に、あねは此方に花束つくる、賤の男さへも手に鋤もちてかへしかねてか彳む畔路

濡れにし袖　　越後　松永しげ子

都におはすなつかしの
友立ちませしその折に
別れてのちのかたみとも
ならば送らむ寫しゑを
言葉やさしうのたまひし
君がかたみのみすがたを
受けむは明日か笑みゐます
うつしゑ得むは今日なれと
待ちつゝあたに暮しけり
いにし昔の言葉思ひて、
せめむとすれはしかすがに
君か心のなつかしう
人目もいかゝあらむよと
濡れにし袖の乾くまも
五月雨しげき此の日ごろ

百合

大和　栗山たか子

露にほゝゑむゆりの花　なまめく色の面影を
峯のたもとにかくれつゝ　夏靜なる山川の
水面にかけをうつしては　己かすかたを粧ほへる

草まくら

松山　山脇さち子

我村に父母を失ひし少女が、佛化を得んとて、十三年を春風秋雨に曝らされつゝ、あらゆる寺々を廻りし、あはれの物語をきゝて、

歌に鳴け詩に鳴け窓い鶯と、
悲しき夢とさめはてゝ、
心はいつしか昇天の、
行かばや戀し父の國。
軒端は朽ちし百ふりの、
痛飲天を仰ぐとき、
南の山に落ちにけり、
行かばや母のいます國。
悲しや生ける人の身と、
又も飛ぶなる靈の星の、
縷縷を笈に納めつゝ、
南の山ふみこして。
佛心の我なれば、
所定めぬさすらひに、
山路に深く暮れ果てゝ、
岩を枕のまどろみや。
匆來の闇の花に泣き、

眠ひし春も一睡の
墓なさになく身の上や、
籠に乗りたる心地して、
ゆがむ柱に身を寄せて、
心ありげに飛ぶ星は、
あはれ飛びしは母の靈、
眞こひしき夕間暮、
行衛に心ひかされて、
辿るは露の草野路や、
迷はん術も知らざれど、
宵月くらき鎌倉の、
星の明りにさぐり寄る、
夜の白川に哭しつゝ、

露えつかれし網匪を、
時雨も戀し衣川、
夜毎に結ぶ草枕。
巡る六十有餘國、
鐘のひゞきは變られど、
父は見ますか母上は、
佛化を得ざる悲しさよ、
さへ行く星をもる露に、
ほつれし髮に秋の風、
細き瞳に仰ぐとき、
二つの星は飛びにけり。

運ぶは遠き東奥の、
西を廻りて十餘年、
立つとし建てる寺々の、
やつれはてにし我姿、
されど通天したまはで、
冷たく結ぶ草枕、
痩せたる頬に露うけで、
忽ち天の一方に、
しよふ〳〵と鐘は我を刺す。

五月雨

肥後　友永常子

軒はたきつ瀬庭はかは
いつこの川は水いくら
きくも中々いふせきを
通ふ道へやいかならむ
それも晴間を待えてと
うとくなるまで村雲の

いく日降そふ五月雨に
いつこの橋は流れしと
里のうなゐか學び屋に
我はとふへきともの家
にはにもおりず胸さへ
ゆきゝのみ見て暮す哉

海濱に郭公をきく

三重　黒田代音子

磯の香たかき夕まぐれ
　へだて渚のとも千どり
よつの秋をひろがへし
　過ぎ來し跡も殘しつゝ
限り知られず果もなき
　辿る折しもほとゝぎす
雲井に高く名のりゆく

そなれの松の下かげを
　吹きくろ沖のしほ風に
清き眞砂にふたすじの
　そらに輝やく夕づゝの
のぞみの影を數へつゝ
　はつ音をしまで久方の
仰げば月のかげきよし

長橋かゝる七采の、
天つ御國に住む神の、
新樹の瓔珞の、
玉殿の音のけはひして、
神秘の色の印象に、
片手に把るいと小さき、
長橋消ゆる七采の、
満霧の包もれて來る、

神戸　藤木梅子

眩ゆしと衆の人言へど
來往ますする長橋や。
夫かと見ゆる彼方に、
忽ち消ゆる白蓮花。
今宵生るゝ子の幸や、
額に銘あり天國の。
消えて訛しぎ山里や、
孤燈の光拾たらず。

白鳥

そゞろ夕の淋しくて
森にひそめる白き鳥
胸にさわげるこひの音の

尾張　井口登代子

君が垣根をさまよへば
折々小さきこゑすなり
そのさゝやきはたかくして

湖水

下野　井上尚子

朝

金門ひらけあさ日子の
峯の朝もやきえてゆく
夜の氣はなれて湖水に、
ひかりにはゆる幸の湖

ひかりまばゆく照す時
たもと飜ふあさ風に
たゞよふなみは金色の
平和の光みちて輝く。

夕

くもにそびゆる黒髮の
風にゆらるゝよし声の
ひめをのせしか紅白の
今は岸べにつながれぬ
湖上しづかに暮そめぬ
けふは消えゆく夕陽の
我かけ長くみづうみに

山を横ぎるとりみえて
は末に夕日うすれゆく
暮をまわせしやかた舟
數多の舟はかへりくる
夕べのくもの追りきて
光をあびてたゞずめば
入るも寂しき湖の夕暮

雲

下總　兼坂末子

夕日は今を名殘にと、
もつれ〳〵て美くしう、
行へいづこと冷ゆる戸に、
姿やさしき白鳩の、

いとまはゆかる色流の、
五彩あやどる雲の色、
もたれて雲を追ひし時、
翼に似たる雲を見き。

父母の恩

奥陸　相馬冬子

蝶よ花よとうつくしみ、
かげを仰げば高さこの、
何時かはむくひつくすべき、

荒き風にもあてざりし、
松の葉毎のかずくに、
いつかは報ひつくすべき、

螢

秋田　きさ子

輝く星の昨日より
里川つゝみ露ふかく
あはれは人のきはみなれ
戀てふ事を知りてより
すてゝ迷ひし道なれば
なやむもおのがつみなるを

天つみ空をとび下りて
思ひにもゆる螢こそ
親ともたのむ月をだに
誰かは人をうらむべき

友の墓

東京　關谷己子

破れし胡蝶の喩絶えて
白露置ける萩の花
有縁の墓に音づれて
罪の姿にやさ心
この奥津城の主とは
綴る涙は幾千行

落花涙ふさま過ぎて
朝顔愛づる朝まだき
手向くる線香烟永き
むつみし友は永久に
なりし昔の忍ばれて
さびしうなりぬ虫の音も

馬上の將校

陸奥　堀口ふじ子

日は麗かに風ぬるく
池の汀を逍遙ひぬ

鳥啼き花咲く春の日に
手には好める若菜集

耳朶に響きぬ師の音
威風あたりを拂ひつゝ
服裝いかにと眺むれば
美々しくも亦嚴しく
さらでも服裝美々しきに
毬上さしたる其けはひ
憧へは過ぎし壽永の春
箙に梅の花はさみ
いざことあらば戰塲に
みやびやかなる心ばえい

かへり見すれば二將校
沙塵を揚げて驅け來る
黑の上衣に緋のズボン
揃ひし騎兵の大尉なり
淡紅の梅の花
鍬上さらに花を添ふ
梶原源太景季が
奮戰せしも偲ばれぬ
命捨つべき身なるだに
こともやさしく床しけれ

夏の夕　　東京　永井ふさ子

待たれど永き夏の日に
樂しき夢を結ばんと
繁木の下に打ちふせは
誰を戀ふらん蟬の聲
いつとしもなくなき止みて
涼しく暮るゝ夏の夕

短歌

天賞

水邊納涼　　東京　小池松子

影うつる月を見つゝもさゝ波の
よるぞすゞしき池の邊の宿

地賞

撲螢　　美濃　佐藤みよ子

うちもらす扇の風やさそひけむ
あやなく袖に入れる螢火

人賞

朝顔　　東京　服部彌惠子

はかなしとたれか云ひけんあさかほの
花より落るつゆもありけり

選外秀逸

早苗　　備後　杉原衣子

取り分くるみとりの早苗香にたちて
風もかをれり露もかほれり

郭公　　松山　松村ゆう子

いさ我も初音は人にもらさなむ
きゝしやまべの山ほとゝぎす

夏舟　　肥後　友永章子

こき下すふねを見るにも涼しさの
乘りおくれぬはこゝろなりけり

卯花　　松山　松村常子
よそめには雪かと見てしさきつもる庭の卯のはな今さかりなり

同　　同　松村ゆう子
時ならぬ雪のふりしとおもひしは今をさかりのうつ木なりけり

同　　同　木村好子

ふしのねのきことの雲にならひてそ裾野もしろき卯の花そさく

時鳥　　下野　むらかみ

何となう只何となうあはれなりなつのはじめになくほとゝぎす

同　　相摸　奥津よれ子

あらし吹く磯のとま屋のあれはてゝ松原がくれなくほとゝぎす

同　　山形　齋藤いし子

ほたる追ふ里の乙女のこゑやみてしづけき月にほとゝぎすなく

同　　東京　豊田とよ子

月影をしるべになりし卯の花をかざしにさせは鳴くほとゝぎす

同　　相摸　中川かれ子

ゆふ月の影かすかなるやま里にたゞひとこゑをなくほとゝぎす

同　　廣島　隅井いく子

待つ人は多かるべきをたが爲かひとふし高くほとゝぎすの鳴く

同　　松山　松村常子

ほとゝぎすなく一こゑに夢さめてまくらの山もおもしろきかな

同　　松山　木村好子

さみたれにはれまもまたてめつらしく一聲きゝつ初ほとゝぎす

同　　宮崎　藤井清子

小夜更てかりのやとりの淋しさに物思ひ居れはほとゝぎすなく

同　　陸奥　相馬冬子

なみあらき灘上暗くふくる夜の空をつんざくほとゝぎすもかな

更衣　　香川　星野ひさ子

人なみにぬきは更ふれと夏ころもきし朝さむくおぼえぬるかな

同　　和歌山　高内さくら子

ぬきかへてたもとすゝしきせみの羽の衣のそでに夏そたちける

同　　奈良　天野照子

なつきぬとさくらかさねを卯の花のひとへごろもに脱かふる哉

螢　　備後　杉原衣子

小夜ふけて野守が闇の燃し火のもろゝと見しはほたるなりけり

同　　備後　石井妙子

うなゐらが追ふ手のがれて亂れつゝかのもこのもに飛ふ螢かな

同　　尾張　井口とよ子

夕かぜにさそはれぬらん二つ三つ學びのまどにとぶほたるかな

庭螢　　上州　飯田かつ子

みつまきてすゝしくなりし庭草の露とつらしてとふほたるかな

川螢　　岐阜　豊田冬子

いそきもてながるゝ水のはやきせのなみをてらしてとふ螢かな

同　　高松　井上玉代子

繁りあふわか葉をくらきたに川のやみを照してほたる飛ぶなり

五月雨　　東京　神田けい子

今日やまむあすや晴れむと空をのみ眺めてくらす五月雨のころ

同　　名古屋　木下鶴子

をやみなく雨はふり來て夏ころもあらふひまなき五月雨のころ

浦五月雨　　神戸　水越榮子

うき雲のかゝるうらわの磯なれ松こすゑなみこずさみだれの頃

池五月雨　　大坂　木村春江子

さみだれて野邊のいけ水かさませは波の面たかく魚おどるなり

早苗　　備前　小山松枝子

書みるもわれはうみにしさみたれにぬれつゝ賤は早苗とるなり

同　　秋田　古瀬惟子

ラツパぶし唄ひながらも少女子がすゝみ行く世と早苗とるなり

同　　松山　田村多豆子

おひたてる早苗のふしのおもしろく歌ひつれてもうゑ渡すなり

同　　伊豫　釜田春子

五月雨のふるもいとはで賤のめは山田におりてさなへとるなり

水雞　　筑前　山本きく子

風そよくみぎはの眞菰たそかれてかはかみとほく水雞なくなり

同　　備後　石井千鶴子

月かげのてらす田中のひとつ家をたゝくは夜半の水鷄なるらん

同　　秋田　古瀬惟子

夕づきは松のしづくとはやなりて水鷄なくなりやまかげのやと

船中水鷄　　肥後　友永常子

水棹とるひともなきさの舟はたをたゝく水鷄のあかつきのこゑ

若楓　　三重　黒田代音子

寄るなみにうつる楓のわかみどりにしき織りなす秋そまたるゝ

庭新竹　　京都　下川登美子

わかのきのまとのわか竹なよやかにゆかまぬまゝの心ともかな

瞿麥　　東京　關谷已子

のき端うつさみだれの音いま止みて窓より見ゆるなでしこの花

白玉の花　　能登　栗倉薫子

おばしまによりてながむるゆふ庭を垣のしら玉またこぼれけり

白百合　　東京　石川琴子

瀧の音に白百合ゆらぎかをり來て君がすがたのしのばるゝかな

夏菊　　東京　加藤延子

日傘して小枝を手折るひとやたれみだれ咲きそむなつぎくの花

池蓮　　東京　永井ふさ子

濁りたる水のなかより生ひたちてそまぬこゝろを花に見るかな

池上蓮　　大和　栗山俊子

あかつきの月またのこる池の上にはちすの花のにほひそめけり

夏川　　上州　大竹しげ子

なつ川やあつさくたけてながるらん月も岩こすなみのすゞしさ

夏夜　　三河　永井さい子

うたゝ寐のまくらに結ふ夢の間に夏のみしか夜はやあけにけり

水邊夏月　　石見　青柳秀子

魚おどり水おとふけていけどののおばしまちかく月ゆらくなり

蚊帳　　上野　森ゆきよ子

釣るごとに蚊帳の廣きをかこつかな世になき夫を思ふわが身は

月　　筑前　上原歌子

見るほどもなくて入にし月かけのこよひのくもぞ恨みなりける

月に懐をのぶ　　名古屋　林田糸子

月すめと訪ふ人もなきさびし夜になくさむものは小琴なりけり

虫　　東京　市川琴子

ほのかなる青葉の影のしづやかにともし火もれて虫のこゑする

鶯　　陸奥　堀口ふじ子

咲きにほふ梅がこずゑをつたひつゝふし面白くうぐひすの鳴く

花　　秋田　きさ子

かげうつる細たにがはのいは清水むすばゞ花の散らむとすらむ

惜落花　　神戸　足立あさ子

中垣のかなたより散る花ながらをしむこゝろにへだてさりけり

藤　　神戸　足立ゑい子

山松のたかきこずゑに咲く藤はたちはなれてぞ見るべかりけれ

山吹　　福岡　大石綾子

道のべのはにふの小屋もうづむまで枝たれかゝるやまぶきの花

山吹露　　長崎　秋山虎子

黄金なす玉とや見らん山ぶきのはなに置きそふ今朝のしらつゆ

暮れゆく春　　上野　大澤華

春三月暮れゆくそらに花散りてなごりや惜しきかりかねのこゑ

折にふれて　　松山　野ぎく女史

雨さるゝ黄の花散るややまぶきの歌知るをみな亡せけるゆふべ

同　　三河　柳原きく子

夕まぐれ友のおくつき弔らへばあはれさびしくほたるとぶなり

同　　讃岐　潔

別れてはまた逢ふこともしらま弓ひけはよるべき君ならなくに

同　　相撲　大谷津みれ子

いとせめて君おもひ出のつま琴にさびしくかよふ雨だれのおと

同　　下總　河鍋たか子

ほとゝぎすの歌しのせんとかみくだく筆の穂先のみじかき夜哉
同　群馬　石井寛子
まと近くほたるとひかふなつの夜に文よむ今もむかしゝのひて
同　伊豫　益田春子
みどりふかき木の下やみにまとゐして　へだてぬ友と語る嬉しさ
同　筑前　田島紫露子
病む床の夢ひやゝけきさよなかに　なほ忍べとかほとゝぎす鳴く
榛名の白雨　神戸　藤木梅子
しらさめは五歩に十歩にとほのきて　虹の榛名のうるはしきかな
夜の雨　加賀　富田環子
うたゝねの夢むすぶまにおとづれて　芭蕉のうら葉つたふたま水
古寺夕　肥後　友永常子
山寺の軒端のすきにゆふづきのかげもやとりてふくろふのなく
岩上苔　肥後　友永章子
松杉のしづくにぬれて岩のきるこけのころもはみどりそふらむ
田家垣　埼玉　横田政子
あらてくむせどの垣ねのほそながれ　賤のゆふげの米あらふなり
松　東京　土田八重子
いやしける竹の園生をことほぐかすゞめも千代を歌ひてぞなく
海邊松　常陸　岡田萬子
しほ風にいく世ふかれし松ならん下枝はなみに折られながらも
平相國清盛　埼玉　横田秋子
ふかみとり小松はかなくかれしより　まかる老木の猶しげりゆく
日道大士　埼玉　横田須磨子
法の師のなたかきあとの由井の濱　いまもきこゆる波のおとかな
商船　薩摩　松原みれ子
あだ濵は静まりはてゝあきなひの　船のゆきゝのしげくなりぬる
金鶏勲章　東京　碓井のぶ子
武士のいさほは胸にこかれなす　とびのしるしにあらはれにけり

文　下野　井上尚子
みる石にはちすのつゆをすり流し友をいさめのふみをかくかな
無學　埼玉　横田やな子
なに事もまなはぬほとに老にけり　こゝろのやみに道をまとひて
愛國婦人會總會に　皇后陛下行啓について　東京　瀬藤千代子
をみなへしつとふ園生にいでましを仰ぐけふこそ畏こかりけり
都の友の許に　長崎　秋山虎子
此頃はいとゞむかしのしのばれて　君がうつし系見るもたのしき

俳句

天賞

炎暑　常陸　中山鈴子

寝て知らぬ顔にも見ゆる暑さかな

評　されど本人齊物篇中の人たらんも知れず

地賞

蚊帳　東京　伊藤春子

とりあへず襷も蚊帳の釣手かな

評　プーンと一聲聞きてはたまらぬといふ風情ほの見ゆ

人賞

蚊帳　横須賀　高橋つね子

一人づゝ静まる蚊帳の話かな

評　騒ぐは蚊のみとなりて、夜は更行くらん

選外秀逸

夏五句　東京　永瀬茂子

短夜や芦間に殘る繋り舟

時鳥呉越の空を斜かけに

對岸の家遙かなり五月雨

評　つれ／＼のほと思ひやらる

紙燭して雨の庭見る牡丹哉

釣床に詩集ひもとく若葉哉

評　その詩集若菜集とはいはずや

夏の句　上野　黛ゆきよ子

繪日傘を妹に歸省の土產哉

氣も輕くなりし心地す單衣

我が夫の色黑く見ゆ夏衣哉

評　妻の心はかうもあるか

松山　上原のふ子

蚊のために罪のなき子もたゝき皃

評　怪我の八當りなるべし

五月雨や去年の女鑑もひらき見る

評　先づ女鑑を保存せられたるが嬉し

夏の月　東京　勝屋くに子

合奏の終りし頃や夏の月

評　合奏の間は月のはぢてや顔かくしけん

須磨寺に法談きくや夏の月

評　十六年夢物語は出でざりしか

門付の新内きくや夏の月

夏の月柳小路の人出かな

夏の月川岸に夜市の人だかり

夏三題　横須賀　高橋つね子

糟糠の妻丹精の鑑かな

評　此の妻殊に堂より下す可らず

利根河を下る夜船や郭公

評　鳴ばえのする景色なるべし

衣かへて膝も崩さぬ一日かな

評　糊のきゝたるさまも見ゆめり

時鳥　京都　西岡穆子

朝月の八坂あたりや杜鵑

詩を題す壁の古びや時鳥

老王の懶うきあけの時鳥

雨くらき大佛殿や時鳥

評　時と所を得るほとゝぎすとかな
絹蒲團はだにつめたし時鳥
郭公曉の雨や淀わたり
蜀魂水樓の蚊帳はずゝ頃
子規鏡に簾のいりぬべき

朝顔のつぼみ數へて夕涼み
洗滌の皿に涼し夏の月　大阪　木村春江子

白鷺は風吹れけり青嵐
千町田の苗の見よさや青嵐
瀧の音聞て上るや夏の山
帆柱の並ぶかなたや雲の峯
夕立や小船透込む橋の下
血に咲くや其城跡の曼珠沙華
亡國の墟に泣く人や蓼の秋　常陸　岡田萬子

髮ながき人により添う芥子の花
姫君の肩に耕芥子のくだけけり　伊賀　菊山かれ子

思ひきや夢に一聲ほとゝぎす
客人を見送る門や梅雨の空
かしましき蛙なつかしひでり年　群馬　竹のふし子

初夏や數島河原螢飛ぶ
水際を踏む迄も追ふ螢哉
桐壷や夕顔棚の釣り灯
着初から料理にぬらす袷哉
琴の音の門に佇む日傘哉
瓜の香や一と雨ほしき畑の色
石菖に風送りけり絹團扇　神戸　水越美子

子の寢顔見ながら遣ふ團扇哉
竹植し跡や端居の小酒盛
鶯も蛙も老てほとゝぎす　神戸　足立あさ子

乙鳥の木に夕暮るゝ夏野かな
入梅晴や雲高き限り鳶の舞ふ
聞てさへ涼しき名なり須磨明石
水無月や夜道に馴し驛の馬
夏寒き瀧の飛沫や石楠花　神戸　足立ゑえ子

其花も水際立てかきつばた
炎天や青葉ちぎつて嗅て見る
夏菊や往來のしげき夕戀師
藻の花の白きに月の昇りけり
萍の花に漂ふ田舟哉
雨すぎて灯涼しき木の間哉
涼しさや月に更け行く須磨明石　下總　たか子

籠持ちて目高追ふ子や橋の下
飯櫃に目高の泳ぐ岩清水
魚斂ふ夏の川邊の夜振かな
凉しげに螢追ふ子や蚊帳の中
螢籠穴あり螢出でんとす　東京　土岐靜子

化粧する身の恥かしや白牡丹
むつましき一家なりけり田植唄
出干の緋絨着出す弟かな
美くしき姉と妹の浴衣かな
飴賣の唐人笛や夏木立
夕顔に軍がたりの面白き
塔一つ殘して岡の若葉かな　常陸　兒玉こう子

瀧の音近く聞へて百合の花
青簾今打つ水に動きけり　神奈川　由樹しづ子

竿の葉の露のこほれし惜さかな
繪の皿に露たつぷりと百合の花
月に手などゝけて池の柳かな
杜鵑夕立雲の上や下
村役場椅子に居れむる吏員哉

讃岐 安藤光代子

御饌に榮ゆる社の若葉かな
糊つけて乳房の痛き單衣かな
草とりの手拭て汗を拭ひけり
藻の花やうたげの船に風かをる
見るうちに樋の落らけり五月雨

石見 青柳秀子

橋杭を流して早し五月雨
つみこみの杉の若葉や庵の門
誓ひ來な筑摩の神に鍋一つ
ものうさの筑摩祭や雨が降る
五月雨やあかくらへ行小灯
麥刈やひばりのひなをとりにけり

三河 糟谷とし子

山里は訪ふ人もなし春の雨
子守歌やさしき少女野道ゆく
葉櫻の茂りに水を打ちにけり

松山 岩崎きよ子

葉茂る中に卯の花咲きにけり
夕顔や垣根に干せし釣瓶繩
朝顔に朝寢の君を起しけり
夕立に都大路の埃りかな
夕顔に行水の水捨てにけり

松山 首藤さと子

賤が家の籬に白し百合の花
瀧殿に近き小庭の百合の花
業卒へて郷へ歸るや五月晴
一聲は母呼ぶ聲か時鳥

松おへる岩間を漏るゝ清水かな

廣島 富樫むろ子

遠方の琴の音涼し月ともに
絕世の美人は病みて暮くれぬ
送り來し君まだいます柳かげ

京都 高丘汀子

行く春や一家こぞつて京遊
芍藥や花の香こもる八疊間

能登 栗倉藍子

虫干や笑ひの種の數多き
花あやめ二本折りぬつゆの朝

越後 松永しげ子

短册と貰ひて嬉し花あやめ
大原女の背に[illegible]する籠や蝸牛

東京 市川琴子

定齋屋も一と休みする夏木立
暮にふける離れの君に蚊やりして
日ぐらしや城山あたり夕霞む
紅梅の下に鷄餌をあさる

陸奥 堀口ふじ子

紅梅の下に遊べり乳兒や
鍬洗ふ池にうつるや春の月
飛び入りぬ水汲む桶に梅の花
朧夜や大きう見ゆる鬼瓦

安藝 能勢くろ子

風絕えてゆつくりと散りし櫻哉
名も聞くもあやに賢こし御所櫻
あすもあると云ふ日から散る櫻哉
隅田川水の底まで櫻哉
瀧壺に迫る茂りの雫かな

松山 野菊女史

若竹にかゝる貧寺の煙かな
寄らで行く絹商人や麥の秋
紫陽花に神饌盛る祭りかな
緋鯉うく池のみぎわや下り藤

東京 永井ふさ子

下駄持つて假橋渡る藤の花
池にふの多く浮ぶや藤の花

次號

建部文學博士の女子教育に就て、柳原伯の家庭教育に就て、三輪田文學士の人格論等を初め、各欄諸大家の高説名文を掲げ、社會欄は今回の婦人觀を第一着手として、次號も大に賑ふべし、就中地獄の三丁目といふべき瘋癩病院觀、看護婦論など人道問題として、はた婦人問題として、必ず再讀を經べきものあるを信ず、

華族女學校問題

本號紙上に掲載すべく諸大家の高説を集めたりしが、此問題はいよ〳〵火の手強くなり、而も目下未だ研究中に屬するを以て、今一回延期し、次號に掲載すべし、

誌友倶樂部と批評

いよ〳〵次號より雜錄欄内に開始すべし、誌友諸孃は盛んに誌友倶樂部を使用せられたし、新刊書は續々寄贈せられたし、

定價

一册	前金貳拾錢
三册	前金五拾七錢
六册	前金壹圓拾錢
拾貳册	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行		金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六十四行	金拾貳圓
表紙一頁		金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵劵代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に参錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年六月廿八日印刷
明治三十九年七月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

國學院雜誌

本居春庭翁紀念號

▲毎月一日同十五日發行▲定價一部金拾五錢

發行所　東京市麴町區飯田町　國學院大學
(電話番町五五八)

絶好紀念

◎肖像墨蹟は東郷乃木両大將

(一) 凱旋大觀兵式（四月三十日）唯一紀念 **乃木大將** 肖像墨蹟寫眞版 額面

(ロ) 一回刷用紙アート紙幅一尺五寸長二尺

(ハ) 定價一枚金貳拾錢 發送料金拾錢

(ニ) 大將の快諾を得て謹寫せし半身像、上に大將が陣中吟の傑作を掲ぐ、本會の爲に大將が揮はれたる眞筆也、瓢々たる英姿、[illegible]たる墨痕と相俟て、眞個凱旋好紀念

(ホ) 日本海大海戦（五月廿七日）唯一紀念 **東郷大將肖像** 石版額面

(ヘ) 用紙鳥の子 幅一尺八寸長二尺三寸

(ト) 肖像は知名の畫家が心力を注ぎて謹寫したる大將が等身大の半身像を極彩色三十回刷と爲せしもの、鬚髯の細一々眞に迫り、人をして親しく大將に接するの想あらしむ

(チ) **東郷大將墨蹟[illegible]二面** 用紙畫箋紙の堅額[illegible]にして額の大さは肖像畫と同じ◎横額は堅一尺二寸横二尺五寸[illegible]「在征一戰」の四大字、彼の大海戰に於ける大將の信號中の大警句は今や大將の[illegible]に下りて[illegible]揮灑せり、肖像の温容と相對して、世間何物か之に優るの好紀念品あるべき

(リ) 右肖像墨蹟（堅額横額何れにても）二枚一組定價金壹圓

(ヌ) 一枚賣は肖像一枚八拾錢墨蹟一枚參拾錢發送料金拾錢

(ル) 申込は總て前金若くは代金引換とし其の郵便爲替は京橋區築地郵便局宛振込まるべし

◎利益金は悉皆癈兵院に寄附

東京市京橋區築地二丁目二十一番地 **日本癈兵慰問會** （電話新橋二六九八 特八三）

女學及家庭書類

著者	書名	冊數	定價	郵稅
島田佳矣・野口駿尾 共著	女子技藝 編物模樣圖案	全五冊	松ノ卷四十錢 櫻ノ卷五十錢 藤ノ卷五十錢 菊ノ卷五十五錢 梅ノ卷五十五錢	各二錢
棚橋絢子著	女道叢話	全	金三十錢	金四錢
三輪田眞佐子著	女子之本分	全	金二十五錢	金四錢
三輪田眞佐子著	女子處世論	全	金二十錢	金四錢
磯部武者五郎著	家計簿記法	全	金十五錢	金二錢
藤野天城著	女子小觀	全	金二十錢	金四錢
堀內新泉著	女樂師	全	金卅五錢	金六錢
松川霓州著	結婚と家庭	全	金十五錢	金四錢
堀內新泉著	家庭の鑑	全	金十八錢	金四錢
女鑑編輯局編	新編 ひめかゞみ	全	金二十五錢	金四錢

◀國光社出版圖書目錄▶

梅澤清一著 ◉清少納言と紫式部 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢

澁谷愛著 ◉萬國女子風俗 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

堀內新泉著 ◉少女讀本 全三冊 定價各金十八錢 郵稅各金四錢

大町桂月著 ◉常盤御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

濱田藤著 ◉袈裟御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

小林雨搭著 ◉勾當の內侍 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

國府犀東著 ◉靜御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

長田偶得著 ◉顏世御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

杉谷正隆著 ◉家庭訓歌 修身百首 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

高瀨眞卿著 ◉學校家庭 修身一夕話 全 定價 特製六十錢 並製三十八錢 郵稅 八錢 六錢

指原乙子著 ◉女子文章軌範 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

女鑑

明治三十九年七月一日發行　毎月一回一日發行　第拾六年第八號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷所